

奉念 佛眼真言、大日真言、本尊真言、能滿所願真言、延命真言、金剛吉祥真言、破宿曜障真言、吉祥天真言、一字金輪真言。

右は 金輪聖王玉體安穩寶壽長遠、兼ては天變恠異消除解脱の奉爲に始め五月十一日より今月今日に至る並に八七箇日の間、八口の伴侶を引率し殊に精誠を致して修し奉ること右の如し。 天養二年七月六日 行事大法師 阿闍梨權小僧都元、

或は曰く、五尊皆鉤を持する意は、南方寶菩薩の種子は鉤の種子なり、五佛皆寶部の三摩地に入る故なり、又護摩品幢菩薩の處に曰く、皆生の字は諸寶を雨して彼の本業の印を結び能く一切の寶を召く。又成就富貴金剛虛空藏鉤召五字明王。文

私に曰く、此等の文は、寶と鉤と尤も相具なるべきか、大吉祥の真言は能く一切不祥を除いて、能く一切の福德を鉤召す。

以上卷一

國譯玄秘鈔卷二

(二) 大次第 仁海  
の作、愛染王の次  
第なり。

○愛染王法 經に曰く、像を造つて西に安し、行人の面を西に對ふ。文 仍つて敬愛に之を行す、或は小野の(二)大次第に依つて十七尊に之を行じ、或は金剛界成身會、羯

磨に依つて之を行す。

○道場觀 本尊の種(三)に二様有り。 ○種(一)或は重 ○三、五股 或は五股鉤 ○種(二)三

箭 師の口傳に曰く、此の二様事に隨つて用ふ可し、先徳達(一)は各々一様を教ふ、之に依つて人多く各別の傳と思へり、自是非他尤も不可なり。本(二)或る傳に曰く、紇哩を種とし白蓮を三と爲す、蓮は人天生愛の花、白は諸色の本なり、諸の雜色の爲めに染

(二) 或る傳 瑜祇  
經の説、此の命剛  
染菩薩の種子に  
て愛染の本體なり  
白蓮は人天生愛  
の花なり、此れ敬  
の故なり。

せらる、是の故に染の三昧耶と爲るなり。云云 此の傳は證據無きに非ず、瑜祇經の序品之を見るべし。身色日の暉りの如くにして熾盛輪に住し三目にして威怒に視る、首

髻に師子冠あり利毛忿怒の形なり、又五鈷鉤を安して師子の頂に在(一)かしむ、五色の花鬘を垂れて天帶耳を覆へり、左の手に金鈴を持し、右に五峰の杵を執つて儀形薩埵の

如くして衆生界を安立す、次の左は金剛弓なり、右は金剛箭を執り衆星の光を射るが如く能く大染の法を成す、左の下(二)の手には彼を持し、右の蓮を以つて打つ勢の如くす、

一切の惡心の衆速に滅して疑有ること無し、諸の花鬘の索を以つて絞結して以つて身を嚴れり、結跏趺坐を作して赤色の蓮に住す、蓮の下(三)に寶瓶有り、兩畔(四)より諸寶を吐かしむ。云云 彼とは或る傳に曰く、所求の事なり、(五)空の手に作して所求に隨つて其

(三) 空の手 左の  
手を開き舒て上  
齊しく其の手の  
に願に隨つて四  
法の三形を置く  
其の三形次に出す

(一) 之を持せしむ  
 云云。息災は屬底  
 迦等の左の金剛應の  
 句是を虚にして持  
 の内を虚に入れ置  
 ざる様に入れ置  
 ことなり。上は四  
 種三形は四種相  
 然れども同じ義  
 (二) 大僧都 成尊  
 (三) 神日 白雲の  
 上綱  
 (四) 故大御室 性  
 信親王

(五) 廣慶 天台の  
 明匠 花山の通照  
 院に居住するなり  
 (六) 日輪 人頭は  
 頂の十字人頭に  
 り、所持の六粒は  
 干栗、肉團は能持  
 同し、日輪との

の時に臨んで、三昧耶を以つて彼手に置いて願を成す、謂く息災には輪を用ひ、増益には珠、調伏には一股、敬愛には蓮、鉤召には鉤、延命には甲冑なり。三寶院權僧正曰く、彼とは所求に随つて梵字に書して(一)之を持せしむべし。文 或る師の曰く、所求の事の三昧耶形は、千手の四十手の三昧耶形を以つて之に準知すべし。文 此の傳に與有り、或は觀念すべし、梵字に書して置くべきか、秘傳に曰く、人王を持す、謂く人の頂の十字の上に人王六粒有り、宛かも牛王の如し。文 (二)大僧都は彼手に後冷泉院の御名を梵字に書して之を持せしむ、是れ調伏の故なり。文 (三)神日律師の曰く、彼とは人王を指す。文 但し何粒を言はず、仁和寺(四)故大御室、之を小野僧正に問ひ給ふに、僧正答へて曰く、仁黃なり。文 唐本の尊像は或は人頭、或は日輪を持せしむ。或る鈔に曰く、人頭を持せしむるは即ち人王を持せしむるの義なり、人の頭に人王有る故なり。(五)廣慶には廣を皇、慶阿闍梨の曰く、肉團と人頭と(六)日輪は皆同じ意なり能く心を得べし、夫れ神魂を持するは日輪に似て而も實には日輪に非ず。文 最秘傳に曰く、彼とは心なり。大師の 問ふ、心には形相無し云何んぞ是を手に持せしむべきか。答ふ、心に於て肉心(異には心を)有り、不思議の疏の下卷に言ふが如し、謂く心に置

(一) 心の字云云  
 心の種子なり、大  
 師御傳は彼手は心  
 なる故に此の説最  
 秘なり。  
 (二) 右の手の云云  
 白蓮なり、之を以  
 て惡心を拂ふ、又  
 赤蓮花あり。  
 (三) 二手金剛拳  
 印母なり、二拳右  
 印金剛王、左は金  
 剛愛、此の二法薩  
 即ち定慧の二法は  
 定慧合符する義な  
 り、二中立て交る  
 は不二愛染の義な  
 り。  
 (四) 大威徳の像に  
 常の威徳の御手な  
 し。然れども大師  
 御筆の大威徳の像  
 金剛智の口決あり  
 是の弓箭は定慧合  
 符の義を顯す即ち  
 生佛不二の義なり

くとは肉心なり。文 又大日經疏には、訶栗駄心なり。文 此の傳は秘の中の秘なり、輒く之を授くべからず、此の傳に就て肉心有りと觀想すべきか。或は心の字を書して置くべきか、(一)心の字は即ち阿字なり、最勝光明心經に見えたり、大師御持物の彼手は、拳にして持物確然見えす、然らば只だ拳に作らしむる尤も優美なり、(二)右の手の蓮を以つて打つ勢の如しとは、右の手の蓮花を以つて持彼の手の邊りを打たしむ、是れ則ち惡心障難の輩を摧滅せしむるなり、故に次の文に曰く、一切惡心の衆速に滅して疑有ること無し」云云  
 ○根本印 染愛王品 (三)二手金剛拳にして、相ひ又へて内に縛を爲して忍願を直く立て、針の如くして相交へて即ち染を成す。是を根本の印と名づく。四處を印す。 口傳に曰く、二中指を交ふるは是れ定の弓に惠の箭を交ふる義なり、此の印を染の印と云ひ、又は弓箭の印と云ふ。文 (四)大威徳の金剛智の口決之を見るべし。 ○眞言に曰く 唵摩訶羅識縛曰路瑟泥灑縛曰羅薩怛縛弱吽鍍殺。」正念誦並に御加持に之を用ふ。  
 ○羯磨印 復た根本の印を説く、二手金剛縛して忍願堅て、相ひ合はせ、二風鉤形の如くして、檀惠と禪智と堅て合せて五峯の如くす、是を羯磨の印と名づく。」先徳曰く、此の印に於て外難を拂はんが爲めには外五股の印に作し、内障を拂はんが爲め

(二)息災印に二  
 大の事なきも二大  
 は交へ立るが宜し  
 此れ弓箭の義なり  
 (三)増益の義なり  
 風を二火の背に付  
 くることより上  
 まてヒツタリと付  
 方は平に並程なり  
 (四)敬愛の義なり  
 し屈し中二風を  
 付けたがら蓮葉に  
 急度第二節を折  
 屈めて三角の形に  
 する事  
 (五)鉤召二風端  
 を中指に付けたが  
 中指の背に付けた  
 来には善巧是れ如  
 無ければ染愛の欲  
 行の願力に由るが  
 故なり  
 (七)一時觀の義  
 定印にして字輪を  
 前に之を行はずと  
 此の觀は入我々入

には内五股の印を作す。文 此の説を用ふ。 ○真言に曰く 經には愛染王一 字心と名づく 吽拏拏吽 短

弱 短 師説に曰く、平等王の真言とは即ち此の小呪なり、是れ金剛薩埵の異名にして

真如平等の義、又一切衆生善惡平等の義なり。文

○五種相應の印 法に隨つて隨一 (一)息災 内縛して二火を豎て、二風を申べ中指 二(三)増益

先の印。二風を以つて二火の背に著く。 (二)敬愛 蓮葉に作す。 四(四)調伏 蓮花を改めて

五(五)鉤鉤 二風を以つて 三(三)敬愛 蓮葉に作す。 四(四)調伏 蓮花を改めて

○真言に曰く、經には大勝金剛一字心真 吽悉底 五種相應の印に此の真言を用ふるこ

是義範僧郁の傳なり、三寶院權僧正は之を以つて秘事と爲せり。 ○勸請 金剛愛染威

怒王、三十七尊諸薩埵。 ○禮佛 金剛界愛菩薩の梵號なり。 南無、縛日羅囉議、冒地

薩怛縛、摩訶薩怛縛 ○密號 離樂 離愛。義訣に曰く、如來は已に愛染を離ると雖

も、(六)善巧に由るが故に諸佛愛念すること、世の恩愛の如くして相ひ捨離せず。文

○字輪觀 「重」因業不 摘 橋慢不 积 作業不 吽 了義不 弱 遷變不 ○讚 愛菩薩の讚を用ふ。

縛日羅 二(ア)引 識 愛 摩訶燥 引 企 也 二合 一 縛日羅 二(イ)引 攀 箭 縛 商 迦 羅 合 二 摩 引 邏 迦 引 摩 訶

縛日羅 三合 縛日羅 二(イ)引 曩 謨 娑 都 諦 ○(七)一時觀 敬愛の事を祈る時には必ず此觀を作す

(二)箭を持す 箭  
 を兩の手に持し  
 てマギル勢をな  
 す  
 (三)分明云云 四  
 攝の印を以て四  
 の明を誦し自身に  
 引入す了りて即  
 ち金剛愛菩薩印を  
 結びて四處を加持  
 す  
 二(二)頭を立て交へ  
 り 二つを合するな  
 り 陸と成ると觀ずる  
 なり  
 (三)禪念律師 宗  
 觀の弟子にして神  
 日 師匠なり  
 (四)最極秘密云  
 此の法の作者に三  
 種のあり又作者不明  
 の作、又自然の作と  
 今は安然を取ると  
 金 人形杵 壇上  
 にも置き自身にも  
 結び、五相成身も  
 道場觀入我入、  
 本尊加持、此の如  
 り 觀想することな

小野僧正曰く、先づ自身の前に於て阿字門を觀すべし(朱)定印 淨月輪と成る、輪の中に

於て斛字を觀ずべし。(朱)變じて箭と 成る。變じて 金剛愛菩薩と成る身朱砂色なり、身より紅光を

放つ、二手に(二)箭を持す。(異)には弓箭、(三)分明に觀じ已つて四字の明を誦し印を結んで

自身に引入すべし。四字の明に曰く、弱吽鑊解。便ち印を以つて四處を加持すべし。

真言 唵縛日羅囉議阿地瑟怛娑縛給解 (朱)定印を結び、此の觀を作す 「誦に己身を觀せよ、金剛愛染菩薩の如くし

て、威儀色相差別有ること無し、即ち觀ずるに彼の人前一肘に在り、身の下に紇里字

有り、蓮花と成る、自身花の孔より彼の人の身に入り、其の形體支分に遍すること猶し

被たる帯衣を上下するが如し。誦に其の形無二なりと觀せよ、即ち真言を誦して曰く、

唵縛日羅囉議囉野 解 (三)禪念律師の傳に、此の一肘觀有り、又勝佛頂儀軌にも之あり、但し少異せり、之を見

るべし。(四)最極秘密羅議法 其の名を知らず。に曰く、又の法は本尊の前に於て、一の五股

を安して念誦の法を作す、但し其の杵を造らば、先づ二種の(五)人形杵を作れ、其の

形上は三股に作れ、下は二股に作る、中股無うして中の把る處に至つて之を彫るべ

し、此の二種の人形杵逆順に交會して、五股杵と成る、闕減有ること無し、所以に其

(二) 面は云云、御身は二なり、二面は一體なり、二面は一體なることを顯す。  
(三) 八供四攝、此の曼茶羅十三尊なり、中八供の一印會に四攝八供を加へて十三尊と成る、惣じて一體の尊なるれば皆一印十三に成るなり。

の左の二股形を而も右の三股の二方に指し合はせ、其の右の二股形を而も左の三股の二方に指し合はす。是の故に五股を成するなり、能く秘密にすべし。觀想せよ、是の三昧耶身變して愛菩薩の身と成る、其の形一身兩頭にして面に各々大寶冠を著す、右の面は赤異には此に肉の字有り。色にして忿怒形なり。左の面は白肉にして慈形なり、並に遍身白肉にして紅蓮花色の衣を著す。儀形金剛薩埵の如し。右の手は心に當て、五股を横たへ執り、左の手には五股金剛鈴を持って、紅蓮花の上に坐し、月輪の中に處す。  
三 八供四攝各々本位に住せり。行者の面を西方に向ふて眞言を持念す。此の如くの觀を作すなり。」或が曰く、左の面は赤肉色忿怒形なり、右の面は白肉慈形なり、遍身白肉にして炎光圍繞す。蓮座に坐して左の手に五股を持し、右の手に所著の天衣の端を執る、右の膝を立て左の足の上を踐む、是れ曼茶羅の像形なり。」又同じ奥の文に曰く、秘して之を觀せよ、月輪の上に呼重斛の二字あり呼は右斛は左此の二字の色、紅顏梨にして光を放つ、互に照して各々人形杵と成る。上の說此の杵轉合して五智の杵と爲つて月輪の上に横たへ在り、此の杵轉じて兩頭一身の愛染菩薩と成る。前の說此の如く觀じ已つて専ら念誦に住す。文

(二) 師子冠云云、大勇健獅子物を食す、獅子の物を食すとなく、悉く食ひ盡すものなり、是れ精神の義なり、其の餘の獸は狸狼の如く必ず食し残すものなり、獅子は菩薩は一切衆生を殘さず、盡す事を表す。  
(三) 那摩人の梵

○護摩時 第一火天段、第二部主段、降三世第三本尊段、第四諸尊段、第五世天段。  
加持物には小呪を用ふ、謂く呼摘枳呼弱是れなり。諸尊段には理趣會の十七尊之を行す。大樂不空身の眞言を以つて之を供すべし。大樂不空身の眞言。師曰く是れ十軌に出づ。金剛界の眞言と少しく相違せり。唵摩訶蘇佉縛曰羅薩怛縛弱呼釁斛蘇羅多薩怛釁是れ即ち十七尊の種子なり。  
○師子冠の事 大日經疏一に曰く、今此の宗に宗義を明にして曰く、師子とは即ち是れ勇健の菩提心なり、初發心より以來、精進の大勢を得て怯弱有ること無し、猶し師子の執縛する所に隨つて必ず獲て遺すこと無きが如し、是れ即ち自在度人無空過の義なり。文 此の文を以つて之を案するに、此の明王の師子冠は、自在度人無空過の義を表するなり。秘す或る傳に曰く、師子冠は惡人を調伏し、又持者の無畏を表す。文 此れは本説を知らざるか。經に曰く、又彼の三那摩を取つて師子の口に置く。文 或る師曰く、阿尾舍盧迦アビシヤロキヤは惡人の姓名、惡星等の名にして是れ摧破の義なり。文 或る師曰く、調伏に限らず、又檀越の姓名を書して之を置くべし。但し經文には且く調伏の一義を出すか。文 後の義優れり、自在度人無空過の義に相ひ契ふ故に之を依用すべし。

(二) 如法に云ふ是れ如實愛染の法なり、即如意寶珠の法なり、此れ秘事なり、秘して法の字を書くな

(三) 高野後僧正真然なり。

(四) 之を焼く此の處に金剛理趣會の曼茶羅を圖するも今之を略す。  
(五) 四種念誦法仁海作見行現行の略。

(二) 如法に之を行する事。白河院の御宇六條殿に於て鳥羽僧正範俊如法愛染王の法を修す。 大壇に天蓋を張り八色の幡を懸く。仁王經法の如し。 懸け奉る曼茶羅は、十七尊の曼茶羅なり。但し中尊には愛染王を畫す。 ○敷曼茶羅の中央に塔を立て舍利を安す。傳口 ○護摩二壇 謂く敬愛曼茶羅の左と調伏曼茶羅の右なり。一説に曰く、調伏の壇には降三世を懸く。文 一説に曰く、之を懸けず、凡そ二壇の護摩俱に本尊を懸けず。文 後の説を善とす、金剛界理趣會の曼茶羅を以つて愛染王の曼茶羅と爲す、但し中尊に本尊を安するなり、(三)高野後僧正の傳なり、是を十七尊の曼茶羅と言ふ。文 敬愛の護摩壇には愛菩薩を部主と爲し、或は觀音降三世護摩壇には不動を部主と爲す。已上支度別に在り。師傳に曰く、敬愛の壇には紅の薄葉を以つて蓮葉百八枚を造り、六枚は乳木の次に(三)之を焼く。文 曼茶羅を懸くる。(四)四種念誦法之を見るべし。

私に曰く、(五)見行の金剛界理趣會畫像の曼茶羅に、内院の四隅に香・花・燈・塗・の四菩薩を安し、外院の四隅に嬉・鬘・歌・舞の四菩薩を安す、是れ普賢菩薩金剛薩埵儀軌、並に金剛薩埵修行儀軌に依るか。今の愛染王の十七尊の曼茶羅には、嬉等の四を以て内の四隅に安し、香等の四を以て外の四隅に安するなり。其の所以は、金剛王の

(二) 委しく之を云云此處に理趣釋、金剛王儀軌、小野僧正大次第、並に敷曼茶羅の諸圖を出す、今之を略す

儀軌、並に勝佛頂の儀軌、小野の大次第等に、皆外院の四隅に香等の四印言を行す。彼の儀軌等は香等と言はずと雖も金剛界香等の印言と同じきが故なり。 之を以て準知するに、内院の四隅は是れ嬉等の四菩薩なり。(二)委しく之を案すべし。

問ふ、愛染王は何れの佛菩薩の所變なるか、答へて曰く、諸説不同なり、護摩達磨に曰く、金剛薩埵なりと。文 此れは金剛薩埵は定と云ふ文に依るか。古次第に曰く、金剛王なりと。文 此れは金剛王と名づくる文に依るか。瑜祇經の疏に曰く、愛染王、此れを金剛王と名づく、實には是れ愛金剛にして金剛王には非ざるなり。文 理趣房も之と同じく愛菩薩と云ふ。文 秘藏記に曰く、金剛妻妻とは齊なり。定惠均等なるを齊と云ふなり。 染愛定惠均等に互攝入攝持して不二なるを染愛といふ。 秘傳に曰く、大日如來の所變なり、惣じては三十七尊の德を攝し、別しては金剛部四親近の菩薩の德を主とる、種は鑊、三は五股なり。染愛王品には大呪を以つて一切如來の心眞言と名づけ、愛染品には此の愛染王の法を以つて一切如來共成就の法と名づく。亦曰く、又金剛界の三十七羯磨を結ぶと。文 明に知んぬ愛菩薩等の一菩薩には限らざるなり。然らば大日如來は、三十七尊の德を統かるなり。故に今の

明王は大日の所變なり、別して之を言はゞ東方金剛部の四親近の徳を主とる、故に染愛王品の題目に、金剛堅固の詞を居まく。又祇經の序品に、金剛部四親近の菩薩、同聲に金剛界の如來に白して言く、我れ今此の神通を現すことは、彼の愚童を開顯し鉤召して諸佛の妙法を染愛せしめんが爲めなり。文 明かに知んぬ。東方の四菩薩に染愛の徳を具する故に、此の明王の形貌に東方四菩薩の徳を表するなり。經の偈に曰く、左に金鈴を執持し、右に五峯の杵を執る、儀形薩埵の如くして衆生界を安立す。文 是れは金剛薩埵を表すなり、頂上に五股鉤を安す、又經の偈に曰く、此れを金剛王と名づく頂の中の最勝の名なり。文 是れ金剛王を表す、經の偈に曰く、次の左に金剛弓右に金剛箭を執る、衆星の光を射るが如く能く大染の法を成す。文 是れは金剛愛を表すなり。經の序品には、金剛愛菩薩を金剛染菩薩と名くるなり、明王の首を低たるゝは金剛喜菩薩を表す、經に曰く、左の下の手には彼を持し、右は蓮、打つ勢の如くすと云ふは、別して明王の徳を顯はすなり、故に此の下の二手に於て究竟甚深の事有り、凡そ此の明王は勇猛の菩提心を以つて自在に人を度して、空しく過すこと無き義の故に師子冠を戴くなり。疏の文、上に之を鈔するが如し。勇猛の菩提心とは金剛薩埵是れなり、故に五秘密の儀軌に

曰く、金剛薩埵とは是れ一切如來の菩提心なり、金剛薩埵の三摩地を名づけて一切諸佛の法と爲す。文 既に菩提心を表す、故に金剛薩埵と名づく、薩埵に定惠の二徳有り、惠は金剛王、定は金剛愛なり、定惠和合して愛染の義成す、愛染に由るが故に適悦の義有り、即ち金剛喜の義なり。吉しく之を思ふべし。法花開題兩に曰く、若し觀自在を以つて首とするときは則ち大日尊を亦觀自在と名づく、此の尊を以つて首と爲る則んば、三七尊、及び無量の佛刹微塵の身を具す、大日は即ち觀音の遍法界體性智なり、阿闍は則ち觀音の圓鏡自性の金剛智なり、多寶は則ち觀音の福德聚の身、無量壽は則ち觀音の妙觀壽命智なり、釋迦は則ち觀音の作業寂照智なり、分身は則ち觀音の正覺差別身なり、普賢は即ち觀音の菩提心如智なり、文殊は則ち觀音の妙惠、慈氏は則ち觀音の大慈、乃至一切の聲聞緣覺の身、天龍八部國王長者の身も亦復た是の如し。

是れ眞言教の大宗尤も至要なり。云云

○種・三・の事 瑜祇經疏上に曰く、佛部には阿字を以つて率都婆を成す、蓮花部には羅字を以つて種子として八葉の蓮花を成す、故に轉字輪品に曰く、胸は離染の字を表す、若し秘密法品には薩を以つて蓮花の種子とし、金剛部には縛を以つて種子として

(二) 護摩品 瑜祇  
經の護摩品なり、  
本業三摩耶の印文  
は愛菩薩の印なり  
外縛して二風立て  
交る。

(三) 金剛稱 稱は  
稱讚の義にして即  
ち金剛喜菩薩なり

五股金剛を成ず變じて大日尊と成る。文 又曰く、其れ等の三部に、各々是の證菩提の義を用ふ。文 三摩地儀軌に曰く、成金剛心の所 汝淨月輪に於て五智金剛を觀じて法界に普周ならしめよ、唯一の大金剛なり。以上此傳は秘中の秘、深中の深なり、非機の人に授くべからず。能く能く之を慎しむべし。 (二) 護摩品に曰く、復次に金剛染の本業三昧の印は、悦の字にして歡喜を生ず、聲十方界に遍す、一切の佛菩薩盡く染愛の妻と爲る、三界世中の天人王等敬愛す。文 金剛染とは愛菩薩なり、又曰く復次に(三) 金剛稱の本業三昧耶は印經には印の字無し 讚字は適悦を生ず、正受三昧を得て大空界に遍し、自他適悦を生じて大に悦び平等を得て諸冤悉く退散す。文

○經文料簡の事 愛染王品に曰く、大羯磨の印を結び及び根本の明を誦せよ、兼ねて三昧耶一字心の密語を示せ。文

愚案するに大羯磨の印を結ぶとは、愛染王品所説の根本の印。即ち染の印なり。 及根本の明を誦せとは、彼の品所説の明。即ち大呪なり。 兼ねて三昧耶を示せとは、今の愛染王品所説の五股の印。故に經に曰く、堅て合はせて五峯の如くせよ是を羯磨の印と名づけ、亦是三昧耶と名づく。文 一字心密語と言ふは、今の品の次の文に説く所の一字心の明なり。即ち小呪問ふ、今の品に既に五股の印を指して是を羯磨の印と名づくと言ふ、若し

然らば大羯磨の印を結ぶとは、此の五股の印なるべし、何ぞ前品所説の大呪ならん。又及び根本の明を誦すとは、今の小呪なるべし、何ぞ前品の大呪と云ふや。答ふ、大羯磨の印を結ぶとは、前品所説の染の印なり、羯磨とは事業の義なり、若し今の品を指さば五股の印と云ふは、同文次の句に兼ねて三昧耶を示せと曰ふ、何の別か有らんや、又及び根本の明を誦せとは前品の大呪を指す、若し今の品の小呪と言はば、次下の文に一字心密語と云ふに何の別か有らん、況んや今品下の文に曰く、常に羯磨の印を結び大根本の明を誦すと云ふ、豈に一字心の明を以つて大根本の明と名つけんや。小呪を一字心の明と名くること今品分明の説なり。 疑ふて曰く、大羯磨の印を結び及び根本の明を誦すとは、五股の印及び小呪なるべし。兼ねて三昧耶を示せとは又五股の印なるべし、一字心密語とは亦大勝金剛心瑜伽成就品、所説の一字心の明なるべし。五股の印をば、經に是を羯磨の印と名づけ、亦三昧耶と名づくと云ふ、故に印は二に通するなりいかん、答ふ爾らず、愛染王品に既に一字心密語と云ひ、同品下の文に小呪を説いて愛染王一字心と名づく、豈之を置き乍ら別品所説の一字心を言はんや。又解すらく、大羯磨の印を結ぶとは今品所説の五股の印。及び根本の明を誦すとは今品所

説の小呪。兼ねて三昧耶を示せとは、羯磨印の異名を擧ぐ、一字心密語とは、根本明の異名を擧ぐ、示とは説の義なり、法花論に曰く、説言に於て示現す。文 之を思へし、但し前の解を勝とす、大勝金剛心瑜伽成就品に曰く、若し愛染王根本一字心を持せば、此の障速に除滅して小しきも親近することを得ずと。云云 尋て曰く、言ふ所の一字心とは何の眞言ぞや、答ふ、或る傳に曰く、此れは成就品の初に説く所の一字心の眞言呼悉地なり、瑜祇經の疏も亦此の意に在り、乃ち彼の疏に曰く常に自心中に於て一の吽字の聲を觀せよ是れ一法なり。眞言には悉弟シツヂと云ふ此には成就と云ふ。其の吽字は即ち金剛薩埵の一字心、或は愛染王の一字心と爲す、此の一字心の明を以て一切瑜伽の悉地を成就す、故に悉弟と云ふ。文 或る傳に曰く、前の愛染王品には小呪を以つて愛染王一字心と名づく、今は彼を指すなり、今品所説の一字心は全く愛染王の名を説かず。文 今傳受する所は前の傳なり、今品に一字心の機能を説いて曰く、復た次に眞言行者若し常に誦持すれば一切天人愛敬し降伏することを得て能く一切の見る者をして歡喜せしめ、能く一切心願を成就して悉く皆圓滿し速かに成就を得。文 是れ豈愛染の徳に非らんや、況や今品の初に一字心の眞言を出し了つ

て、下の文に若し愛染王根本一字心を持すと云ふは、豈に初めの一字心の眞言に非らんや、更に前の愛染王品を指すと云ふは、全く文の起盡を得ざるか。

○愛染王御修法所

奉供 大壇供六十三箇度 護摩供六十三箇度 諸神供九箇度

奉念 佛眼眞言一萬二千返、大日眞言六千三百返、降三世眞言六千三百返、本尊

眞言三十一萬五千返、平等王眞言六萬三千返、金剛吉祥成就一切明一千三百返、

妙吉祥破諸宿曜明六千三百返、一切成就明六千三百返、奇特佛頂眞言四萬五千返。

右は 后主殿下御除病延命恒受快樂御願圓滿の奉爲に、始め八月十二日より今日に至る並に三七箇日夜の間四口の伴侶を率ゐて殊に精誠を致し修し奉ること右の如し

保延三年九月四日阿闍梨前少僧都法眼 和尚位寛信

注進 愛染王御修法支度の事

合 蘇 蜜、名香檀 五寶 金、銀、眞珠、虎珀、螺貝 五香 龍腦、鬱金、白檀、丁子、麝香 五藥 人參、茯苓、天門冬、石菖蒲、牛黃



五穀 稻穀、大麥、小麥、大豆、小豆。

壇一面。爐脇机二燈臺四禮盤一脚半壇敷布一大幕一壇供御明已上二種常の如し。又の禮阿闍

梨、伴僧、承仕、駝仕、見丁、淨衣赤色

右注進件の如し。 大治四年十二月十九日 阿闍梨大法師寛信

注進 愛染王御修法支度の事

合

大壇所 蘇 蜜 名香檀 五寶 金、銀、眞珠、虎珀、螺貝。 五香

鬱金、龍腦、薰陸、甲香、麝香。 五藥 牛黃、赤箭、人參、石菖蒲、天門冬。

天蓋空赤色の八葉蓮花を畫く、幡八流。八色各々一尺六寸。内に八葉蓮花を安す。尺、白紅黒烟赤綠黃肉敷曼荼羅一鋪日絹八尋佛

壇敷布一大幕一壇供米八御明油一斗二升房油等に加ふる料。壇脇机二燈臺四禮盤一脚半

護摩所二種壇二面有二燈臺八禮盤二脚半壇敷布二壇米拾陸御明一斗

別香 沈香、白檀、丁子、芸提草、青木香、安息、甲香、白膠、蘇合。本書虫喰ひて儲

別藥 遠志、檳榔子、茯苓、甘草、桂心、花石木、裏書は巴豆、菖蒲、鬼

箭、水精指。裏には石相應物 白芥子、紅花、十鐵末、引生鹽、酢、天木香五葉

一束、蘇摩那花木冬一束、說相木木一束、垣沙仙木ツギ一束。 阿闍梨、伴僧十二

承仕三駝仕六見丁三淨衣赤長櫃脚三人供並に自餘雜具等常の如し。

年月日 行事 如眞

〇〇光明眞言法息災に之を行す。

〇本尊胎藏大日二遍知院僧都の傳 十八道を以つて之を行す、念誦並に諸供物には光明眞言

を用ふ。 〇燒加持物には、歸命阿。 〇部主・阿彌陀三昧耶會無 〇本尊・印・言

印は三五股、言は光明眞言なり、或る傳に曰く、左の拳腰に按し、右掌中を開き申べ

し。胎藏の曼荼羅を懸けて之を行すべし、或る説は阿彌陀を以つて本尊とす。大理

之を行す。 或る説は空羅索を以つて本尊と爲す。覺意僧 或る説は金剛界大日を以つて

本尊と爲す。小理趣 〇智拳印功能の事 心地觀經に曰く、是を引導無上菩提第

一智印と名づけ、亦是能滅無明黑暗大光明の印と名づく、此の印を結ぶ加持力を以つ

ての故に、十方の諸佛行者の頂を摩して、大菩提勝決定の記を授く、是を大毘盧遮那如

圖譯玄秘鈔

四〇九

〇〇遍智院 義範

〇〇五股 外五股

〇〇五色光 光明

〇〇大理趣房 寂

〇〇小理趣房 禪

〇〇惠

〇〇

〇〇

〇〇

〇〇

〇〇

〇〇

〇〇

〇〇

〇〇



(二) 銅の筒 此の筒に並ぶに十  
六大護の蓋を  
す。あれども之を略す。

經には彌勒を以て轉法輪菩薩と爲す。件の傳は此の經を以て證とするか。但し既に彌伏の法には忿怒形を以つて本尊とすること尤も優美なり、仁和寺覺法親王は此の説を以つて善と爲す。○銅の筒を壇中に之を立つ、○梵等 シヤキヤ ○密號 金剛法身 ○部主 金輪私に曰く彌勒なるべきか ○諸尊 十六大護等本朝の諸神をも之を加ふべきか 小野僧正の次第に廣略の二本有り。見し 二十一支の乳木に杉の木を用ふ。委細口傳に在り。

注進 調伏御修法七箇日支度の事

合

蘇

蜜

名香水

金銅の筒一口細工に給して之を作らしむ

五寶

黄金、白銀、

眞珠、螺貝、赤珠琥珀を代用す。

五香

沈水、薰陸、白檀、丁香、龍腦

五藥 赤

箭、人參、天門冬、訶利勒、桂心。」 五穀 稻穀、大麥、小麥、菘豆、油麻。」

別香 安息、麝香、甲香、蘇合、鶴香。 別藥 花石木、勅豆丸、水精、巴豆、

模樹。枳の實 相應物 鐵末、引生鹽、酢。 壇供米八石四斗 御明油五斗 壇敷布段 阿

闍梨、伴僧、承仕二 駝仕四 見丁二 淨衣黒色

右注進件の如し。 萬壽二年三月 日

大法師

○大輪明王形像の事 或は二臂攝一切佛頂輪王經の如し、其の文は既に上に之を鈔す。 或は六臂、理趣經の轉法輪

(二) 印 小金剛輪

(二) 更に秘事を云  
實珠を安置するを  
いふ之れなくん  
ば舍利五粒なり。  
此の次に天蓋表裏  
の圖、數曼荼羅、裏  
輪塔の圖あれども  
之を略す。

菩薩品に、又金剛輪菩薩と名づく、理趣會曼荼羅の圖に之れ有り。」七集に曰く、曼荼羅菩薩は黒色忿怒形六臂なり、右の第一に三股を持し、左の第一に獨股杵を持す、次の左右の二手は(二)印を結んで頂上に置き、次の右第三の手に劍を持し、次の左第三の手に輪を持す。文 金剛輪菩薩理趣會の圖之に同じ、圖位に曰く、曼荼羅菩薩は黒色忿怒形なり、面上に三眼あり、鬚髮上に擧つて炎の如し、六臂にして左右の二手に三昧の契を結び頂の前に仰く、右一の手に三股を持し、左一の手に獨股を取つて端を座の上に突き立つ、次の右の手に申べ開いて劍を執る、左の手に輪を持す。」  
或は 復の本には此の像無し、圖位に曰く、大金剛輪の種子は悉地里シツヂリ、三摩耶形の金輪は肉色なり、右の手の風指に金輪を安して赤蓮花に坐す。文 又曰く、纔發意轉法輪菩薩の種子は遮シヤ、三摩耶形は蓮花の上に金剛輪なり、肉色にして左の手に蓮花を持して上に輪を安す、右は掌を仰けて獨股杵を立つ、赤蓮花に坐す。文

○如法尊勝法増益に之を行す。

大壇の上に天蓋を釣りて本尊を懸けず、敷曼荼羅の中央に塔を立て、舍利を安置す。

○輪に書すべき事 阿哩耶聖者 烏瑟泥灑頂佛 尾惹耶尊勝 曩麼密 陀羅尼。

國譯玄秘鈔

(一)胎藏云云胎藏の中の八佛頂の尊勝印の如く内縛して右風を立銅にする事。  
(二)彈指の勢次第の如し此れ尊勝塔の印なり寶瓶の印を云ふ中に陀羅尼を觀ず。  
(三)智拳印。尊勝塔の形なり。

此の題目を以つて不空譯の陀羅尼を書すべし。○護摩壇に延命を懸くる。云云但し權僧正範俊、院宣に依つて公家の奉爲めに近年之を行せらるゝ日、尊像を護摩壇に懸けず。○道場觀 尊勝曼荼羅を觀すること次第の如し。○印 ○鈎召(一)胎藏次第の如し。  
(二)彈指の勢次第の如し。 ○智拳印一率都婆秘 ○部主 寶生尊更に秘事有り ○本尊 尊勝蘇油。三次に焼供。三次に五穀粥。三次に沈香、次に白檀、次に乳木、次に又沈香、又白檀、次に安息、次に丁子、次に薰陸、次に甘松、次に鶴香、次に荅陵香、次に乳豆香、次に又安息、次に龍腦、次に又丁子、次に豆蔻、次に白芥子。加持物所 白芥子二十一返、爐に投ず。次に粳米を投ず。乳木 骨路草。ウリ根、高野山に之あり。 若し無き時は栢の木、或は松の木を四角に削り之を用ふ、又は活路草を用ふ。カラスウリナリ。 御加持は、胎藏除障佛頂の眞言なり、曰く 曩莫三曼荼沒駄引南、カロンビキラシダハシツウシユニシヤバ 訶。時の間伴僧は陀羅尼を念す。異本に出づ。  
○尊勝法の香藥 一、毎日の香藥。 黑沈香、白檀、安息、薰陸、丁子。以上九香散香等に用ふべし、多くは諸段に通すべし、若し不足ならば本尊段に限るべきか。 檳榔子、天門冬、訶利勒、人參、桂心、伏苓 以上本尊段の藥種に用ふべし。

(一)十五日香藥 一百日五十日等修する時毎月十五日に此香を供養す可きことなり。

し、各別に之を盛り各々三度之を供すべし。  
一(一)十五日香藥。 沈、白檀、紫檀、煎香。以上四種の香、抹にして蜜を以て一器に和して之を供すべし。 安息、丁子、薰陸。以上蘇を以て一器に和して之を供すべし。 甘松、鶴香、荅陵香。以上蜜を以て一器に和して之を供すべし。 乳頭香、龍腦、丁子。以上の香抹にして丸香となし、香毎に荳蔻及び白芥子を加ふべし。 右件の香藥等は、諸檀の丸香散香の所に之を供すべきか。凡そ此の法は月の一日より之を始めて、十五日に至つて之を結願す。但し餘日に之を始むるも上の如く之を作すべし。  
注進 尊勝御修法一七箇日支度の事  
合 蘇 蜜 名香檀 五寶 金、銀、瑠璃、青 琥珀、水精。 五香 龍腦、鬱金、白檀、麝香、沈香 五藥 赤箭、人參、茯苓、甘草、檳榔子 五穀 稻穀、大麥、小麥、大豆、胡麻  
一、毎日護摩の料 黑沈香、燒香の料 白檀、塗香の料 乳木、骨路草件の草無くば代りに活路草を用ふ、又栢の木を代用す。  
安息、薰陸、丁子、檳榔子、天門冬、訶利勒、人參、桂心、茯苓。

一、每月十五日護摩料 沈、白檀、紫檀、煎香、安息、丁子、薰陸、甘松、鶴香、苓  
 陵香、乳頭香、龍腦、荳蔻、白芥子、蘇、和香の料 蜜同 乳燒供の料 酪同  
 一、天蓋、空 幡九流の中、一流は長三丈淺黃、八流は長八尺淺黃、一、敷曼茶羅一鋪方六尺。佛前に給て圍せしむべし。  
 一、多寶塔、一基 一、壇供米、十二 御明油一斗 雜穀鹽斗七 壇敷布、二 阿闍梨、一  
 伴僧、八 承仕、二 駝仕、六 見丁、二 淨衣色  
 右注進件の如し。 天仁二年八月十五日權僧正範俊公家の奉爲に之を修せらる。  
 尊勝御修法所

奉供 大壇供 護摩供 諸神供。 奉念 佛眼真言、大日真言、尊勝陀羅  
 尼、同小呪、白傘蓋佛頂真言、最勝佛頂真言、殊勝佛頂真言、廣生佛頂真言、光聚  
 佛頂真言、無邊聲佛頂真言、發生佛頂真言、不動真言、一字金輪真言。

右は 御息安穩增長寶壽御願圓滿の奉爲めに始め某月某日より今日に至る並に三七  
 箇日夜の間六口の伴侶を率ゐて殊に精誠を致し修し奉ること右の如し。 年月日

〇〇尊勝法一卷の軌に曰く、本尊尊勝の像を東の壁に安す。文。増益なり。又息災に之を行す。

「觀想せよ、五大所成の法界宮の中に大圓明の月輪有り、三股を以つて界道とし、寶

こ 飛天 薄及び  
 秘鈔の如し。

瓶を以て分齊となす、其の中央大蓮花臺の上に鍍字有り、法界率都婆と成る、率都婆  
 變じて大日如來と成る、五智の寶冠を戴き瓔珞身を嚴れり、法界定印に住して八師子  
 の床に結跏趺坐せり、左の圓明の中に擢字有り、白傘蓋佛頂と成る、右の圓明の中に泉  
 字有り最勝佛頂と成る、中の圓明の前に訶唵字有り變じて鉤と成る蓮花の上の鉤變じて  
 尊勝佛頂と成る、中後の圓明の中に但陵字有り放光佛頂と成る、尊勝の左圓明の中に  
 苦子カシ有り勝佛頂と成る、尊勝の右圓明の中に吒嚩吽トハム有り廣生佛頂と成る、光聚の右圓  
 明の中に吽字有り無邊聲佛頂と成る、光聚の左圓明の中に輪嚩吽リンポム有り發生佛頂と成  
 る、下左邊半月の中に吽字有り降三世と成る、右邊三角の光の中に憾字カク有り不動尊と  
 成る、前に香爐有り、像の上に寶蓋有り、兩邊に六箇のこ飛天有り各々花を執る。文  
 ○本尊印言此の印言は一卷の軌に出づ 二手合掌して、二頭指を屈して甲を相ひ背け、大指を以つ  
 て二頭指を押して彈指の勢の如くす、即ち尊勝陀羅尼を誦す、根本の印は、内縛して  
 右の風を鉤す。此の印言は胎藏二卷の軌に出づ、此印を以つて大呪を用ふ。 曩莫三曼多沒駄引南、引 訶林ニヒ 尾枳羅ヤシ 半  
 祖那シユニ 拈灑婆ニ 賀引 師説に曰く、御加持に之を用ふ。師傳に曰く、智拳印を以  
 つて陀羅尼を誦す。又曰く、合掌して二つの人指を平に屈して、二大指之を並べ立

(一) 由緒口傳云云此の法は尊勝の法なれば尊勝を以て本尊となすべき處然らざるは勝も八佛頂の時は一門の尊なる故に今は唱ふ此れ不二の大日の本尊となす故なり本尊とすることを本尊とすることなり

(二) 撥遣眞言云云此の次に善無畏譯の二卷の儀軌の尊勝曼荼羅を出せるも今は之を略す唯その圖後の文を出す

(三) 首陀會天云云六ヶの飛天の種子なり

(四) 大日の法界印智智印のこと

(五) 權智權は左、智は右なり

(六) 智の手云云是れ智智印なり

て、陀羅尼を誦す。密印なり。○小呪尊勝陀羅尼疏の正念誦に之を用ふ。唵阿密哩多諦惹

縛底、娑縛賀 ○勸請 尊勝佛頂轉輪王、八大佛頂諸轉輪 ○禮佛此の次第は先德胎藏に依るか。

南無怛隸嚩迦、烏瑟尼沙、薩怛他藥多返三 南無悉多他半怛羅、烏瑟尼沙、薩怛他藥

多。傘白 南無惹野、烏瑟尼沙、薩怛他藥多佛勝 南無尾惹野、烏瑟尼沙、薩怛他藥

南無帝儒羅施、烏瑟尼沙、薩怛他藥多乘光 南無尾枳羅拏半祖、烏瑟尼沙、薩怛他

藥多尊勝 南無吒嚩吽、烏瑟尼沙、薩怛他藥多生廣 南無輪嚩吽、烏瑟尼沙、薩怛他

藥多生發 南無吽惹欲、烏瑟尼沙、薩怛他藥多無量 尋て曰く、既に尊勝の法なり、宜しく尊勝の所に三返を唱ふべし、何ぞ然らざらんや、答ふ(一)由緒口傳有り。

○讚四智不動 ○部主、寶生尊更に口傳 ○諸尊八大佛頂 ○(三)撥遣眞言、唵縛日羅二合 謨乞灑

謀ボク

(圖後の文)

此の九尊二明王の種子は即ち件の軌の圖に出づるなり、(一)首陀會天の種子に於ては、

他本を以つて之を書す、二卷儀軌の上に曰く、復乃ち(四)大日の法界印を用ひて五處を

加持して即ち成ず、五分法身を具足し萬徳の身を具す、其の法界印相は、(五)權智を以

つて各々金剛拳に作して、(六)智の手に權の風幢を執る、五處を加持して便ち住す、心

(一) 成身云云 五相成身のこと。

(二) 又曰く云云此の次に異本所出の尊勝曼荼羅を出すも今之を略す唯その圖後の文を出す

上に當て、己身毘盧舍那如來の身となる、頭上に五佛の寶冠あり、即ち是れ五佛頂輪王なり、五智を具する義なり。(一)成身の所 又曰く、中の圓に毗盧遮那如來を書け、頭に五佛の冠を戴く種種寶花の光あり、七師子の上に於て結跏趺坐して、手に法界印を結ぶ。曼荼羅の所の文なり。

私に曰く、此二文の意を案するに、中尊は智智印に住す、若し然れば鍍字なるべし、何ぞ今阿字を用ふるか。答ふ、今の曼荼羅の中尊に阿字を用ふることは、又是れ同軌の圖の曼荼羅なり、豈二卷の軌に依り乍ら圖の意を捨てんや、但し圖と文と相違に似たるは、圖は理を表し、文は智を擧げて大日の不二を顯す、故に或は阿字を書し、或は鍍字を書す共に此れ失無し。又下卷に曰く、我一切如來五頂輪王尊勝佛頂を證す、又除障佛頂輪王眞言神變法と名づく。此文甚深なり。師傳に相叶ふ。吉く善く之を思ふべし。 (三) 又曰く、毘盧遮那如來大如意廣大尊勝佛頂を。文

(圖後の文に曰く) 一卷の軌に八大菩薩の名字を列すと雖も種子を出さず、又中臺に毘盧遮那如來を説くと雖も印相を出さず、先德所圖の曼荼羅の種子は此の如く之を思ふべし。 平治元年七月二日之を鈔し了る。



(二) 須菩提は五百生の間龍趣に生るる故に之を繪す。

(三) 幡十五本云云常の十二天の輪蓋龍王と難陀跋難陀とを合して十五本なり。

(三) 於保僧都 成尊のこと。

に檜一枝、栢一枝、桂一枝之を挿む、餘の四之に準す。軌並に一卷二卷の經皆四瓶を用ふ。又集經には四瓶の外に五龍の前に、龍別に各々一の大瓦の瓶を安す。瓶の上に各々白粉を以つて之を塗る、其瓶の身上に眞の牛糞を以つて各々四箇の(二)須菩提の像を畫く。結跏趺坐す。云云。 瓶水は日に須く新水を用ふべし宿を経るべからず、金精若くは青黛等を以つて水に和して之をして青からしめよ。 第三の間。 護摩壇無概五色 兩壇の壇敷布の上に更に茅チカラを以つて之を敷く。

第四の間。 十二天壇常の如し。 第五の間。 聖天壇常の如し。 朱神供所壇所

は、東の池邊に大石の有る本なり、毎夜之を修す、但し(三)幣十五本並に粥等常の如し、二四字には道場建立前の池邊なり。二説を出ださるか。 ○水天供 東の庇に於て之を行

ず、但し便宜に隨ふか。壇上に二の幡青を立つ、中心に青瓷の鉢を安して水を入れ、其前に青き絲を曲げて之を置く。闍伽一前常の如し 諸壇皆紺の布を以つて壇敷とす。 ○幡

數の事 三寶院權僧正は青色の幡四十一流を用ひらる。(三)於保僧都も亦然なり。但し長さは不同なり。 小野僧正は或る度に青色の幡二十一流を用ひらる。 ○幡懸け様の事

壇所の屋の上に幡十三流を立つ、中方に一字の眞言並に輪形を書き、餘の十二流は各々天の方に隨つて之を懸く、各天の眞言は梵字を以つて之を書き、餘の二十八流は母屋モトの北の四間、並に西の庇、此四間の間間に各々二流を懸く、謂く柱に副へて懸

(二) 書狀 成尊の書狀。

くるなり、但し本尊の後並に十二天の後の間には之を懸けず、又南の端四つの柱並に東庇の五つの柱には惣じて之を懸けず、此二十八流の幡は、梵字を以つて胎藏諸龍の眞言を書き、所謂るイキヤシヤニなり、三寶院權僧正は、卅一流の幡を用ひ給ふ、懸け様は上の如し。但し屋上の中央の幡を以つて庭中に之を立つ、謂く壇所の西面庇の南第三の柱本より、一丈許り去つて庭に一丈五尺許りの幢を立て幡を懸くるなり。小野僧正は二十一流を用ひ給ふ、屋の上には十三流、餘の八流は母屋の柱に之を懸く、幡は只常の如し、但し青色を以つて異とす、手足の端などはソクイにて之を付くる。

(二) 書狀に見えたり。 ○幡長短の事 於保僧都支度に曰く、一流は一丈六尺、十二流は各々一丈、二十八流は各々五尺。文 權僧正支度に曰く、一丈の青き幡一流は、一丈五尺の棹一枝を相ひ具す、八尺の青き幡二十八流、六尺の青幡十二流は、一丈の棹十二を相ひ具す。文 ○器瓶等の事 闍伽器並に瓶には皆青瓷を用ふ、瀝水器並に闍伽

器及び瓶には紺青を入れる、但し兩壇にのみ之を入れる。(吳)口傳鈔に曰く。若くは青黛を水に和して之を用ふ。 ○藉フシを立つる事 東(朱)壇の東なり並に北の道邊に籍を立つ、其の文に曰く、親疎上下結界の内に来るべからず、懈怠の障礙に依つて制止する所なり。 ○五龍祭の事 大阿闍梨



公家に奏聞して、五龍祭三箇日之を行せしむ、此れ陰陽寮の所爲なり、御修法第五日以後三箇日之を行せしむ。其の旨於保僧都の書狀に見えたり。但し小野僧正は第四度の御修法には、第四日に之を祭らしむ。私に曰く、件の日日次吉ヒナか。私に曰く、即ち修法第二日許りに奏聞すべきか。奏聞の狀は於保僧都の消息を以つて本とすべきか。陰陽の口傳に曰く、茅を以つて五龍の形を作つて其の中に龍の梵字を用ふ即ち件の梵字は阿闍梨之を書す。

○造龍の事 茅を以つて龍王の形を作つて紙を押し、其の上に金薄を押しして舍利を以つて額に入れ畢つて之を開眼し、種種に之を供養す、謂く散供なり、其の龍の長或る説は八寸、或る説は九寸なり。(一)遺告に依つて之を定むべし。是の如く供了つて池に之を放つ、其の龍を供養し並に之を放つ處は、延命院僧都は池の丑寅の角に於て之を行ぜらる。(二)龍出現の處なり。小野僧正は中の島辰巳の角に於て之を行せらる。「供具一前に半疊を相ひ具して阿闍梨件の處に至るなり、私に曰く、更に龍穴有り極秘事なり。口傳に在り。龍を池中に放つ事、七箇日の間大切の時只一度許りなり、或る書に曰く、例の神供の外に、伴僧の中にて度度龍に供す文 私に曰く、茅の龍供は阿闍梨之をなし、只の龍供は伴僧之

(一)遺告云云 是れ茅龍供のこと告げて曰く、長け八寸計りの蛇なり、此の金色の蛇長さ九寸計りの蛇の頂に居在せりと、尤も此の茅龍供は大阿闍梨修し玉ふ唯授一人なり(二)龍出現云云 此の所に大師の時善女出現し玉ふなり

(二)燒香云云 準提經に由る。

(三)準提經 安息香を燒くは此の經說に由る。

(三)輪蓋龍王 三千界の龍の主なり是れ善女龍王と同體なり。

(四)覽字云云 法界生の印を以て法界と三反唱へて器界を淨むるなり

をなす、又例の神供は伴僧之をなす、(一)燒香を絶やさず、又兩壇の半疊の下に茅の薦を敷く、又此御修法の間伴僧の外に別に僧を請して不斷に孔雀經を轉讀せしむ。或る鈔に曰く、祈雨には陰門を開き、止雨には陽門を開く、謂く東南は陽、西北は陰。文 ○五香二卷の經說 薰陸、沈水、蘇合、栴檀、安息。」○名香安 準提經に曰く、若し大に早ヒナせば中夜に於て安息香を燒くべし、印を結び五方の龍に勅して速に降雨せしめよ。文

○誦行法次第 增益に之を修す。

○普禮 乃至五悔等常の如し ○勸請 歸命摩訶毘盧遮那等常の如し。

朱本尊界會釋迦尊 大雲經中諸三寶 (三)輪蓋龍王難陀等 龍神八部諸護法

兩部界會諸聖衆 外金剛部威徳天 不越本誓三昧耶 降臨壇場受妙供 聖朝

安穩増寶壽 天長地久成御願 亢旱疾疫皆消除 甘雨普潤成五穀

別尊の行法次第に依つて行すべきか、地結天結等は之を用ひず。私に曰く、四無量觀勝觀等は之を用ふべし。是

れ龍衆を自在に壇上に勸請して供せんが爲めなり、阿闍梨自ら能く護身結界を爲す。

○道場觀 先づ(四)覽字並に印を以つて器界を燒淨す。「次に阿字を觀せよ、變じて

(一) 囊字云云、一  
 は輪蓋、二は難陀、  
 三は跋難陀なり。  
 (二) 大鉢、先づ智  
 吉祥の印明にて一  
 切衆生を法器なら  
 しめて此の功を得し  
 むるは此の印なり。  
 (三) 正觀音云云  
 外縛して二中蓮葉  
 なり。  
 (四) 金剛手印明  
 五古印。  
 (五) 普世天云云  
 胎藏の普世天明妃  
 の印なり。  
 (六) ヌテ、ヌテは  
 (七) 行事辨の許云  
 云、辨官のもの七  
 一人を御祈り奉行  
 に定めらる。

宮殿樓閣と成る、難陀優婆難陀龍王宮内、大威德摩尼の藏大雲輪殿の如し、寶樓閣の  
 中に蓮花座有り上に娑字有り、右邊蓮花の上に薩字有り、左邊に卍字有り、佛前の荷  
 葉の上に(一)囊字有り右左の葉の上も此の如し、即ち次ての如く變じて釋迦觀音金剛手  
 菩薩、輪蓋難陀跋難陀龍王と成る、諸大菩薩並に眷屬、前後に圍繞せり。」

種子・尊形・皆青色に觀ずべし、道場觀莊嚴之に準知すべし。 ○次に釋迦印明(三)大鉢

○次に(三)正觀音印明 ○次に(四)金剛手印明 ○次に(五)普世天印明 ○次に難陀跋難陀の二印

明 ○次に諸龍印明(胎) ○護摩加持物(小米を青色に染めて之を用ふ) ○乳木(楊柳之を用ふ) 於保僧都曰く、

乳木は白膠木なり、即ちヌテの木の名なり。文 彼の書狀に見ゆ。惣じて一切の供具は

皆青色を用ふ。曼茶羅は當日之を圖し奉る。 前日早筆の佛師を召き儲けらるべき

旨、(七)行事辨の許に申し送る。於保僧都 ○結願の作法常と異れり。先師の口傳造紙 表

白並に發願の句等は古造紙に在り、靜に披いて之を取捨すべし。 ○伴僧二十人上下

番相ひ分つ。 保元二年夏の比上醍醐に於て之を鈔す。 次年の夏少小之を加ふ。權

少僧都實、之を記す。

○普賢延命(増益に之を修す) 「須彌山の頂に惡字有り變じて七寶の宮殿と成る、其の中に紇

里字有り變じて八葉の蓮花と成る、蓮花の上に五千の群象有り一の大金剛輪を負ふ、

其の輪の上に四つの哦字(ゴ)有り四つの大象と成る、鼻を以つて獨股杵を卷く、各々六牙

を具す、其象外方に向ふて立つ、象の頂に次での如く四天王有り世界を警護す、其の

象の上に紇里字有り千葉の大寶花王と成る、其の上に阿字有り圓明の淨月輪と成る、

輪の上に卍字有り變じて金剛甲冑と成る、甲冑轉じて、三世常住金剛壽命薩埵の智身

と成る、其の形滿月童子の如し、身黃金色にして五佛の寶冠を戴き、身より百寶の光

を放つ、光の外に白月輪有り、二十臂を具足して、十六尊並に四攝の三摩耶形標幟を

執持す、右方、薩王愛喜、寶光幢咲、鈎索、左方、法利因語、業護牙拳、鎖鈴。」

私に曰く、以前の道場觀は大旨、普賢延命經に依るか、但し彼の經説は大金剛輪の

上の象は一身三頭なり、又本尊は(一)二臂なり、今の四象二十臂は金剛智の口決に依る

か。 ○普賢延命印(二手各々金剛拳に作り二頭指を仰け並べて相鈎して心に當つ) 眞言に曰く、唵縛曰羅喻勢、娑縛

賀 ○金剛壽命加持甲冑の密印(儀軌に出づ) 前の印に同じ、但し結冑の印相の如く處處を

結べ。 ○護身被甲眞言(儀軌に出づ) 唵砧縛曰羅瑜(儀軌に出づ)

輪燈を立て四十九燈を燃す、佛前と大壇との間に之を立つ、或る説に曰く、大壇と護

國譯玄秘鈔

四二七

(一) 囊字云云、一  
 は輪蓋、二は難陀、  
 三は跋難陀なり。  
 (二) 大鉢、先づ智  
 吉祥の印明にて一  
 切衆生を法器なら  
 しめて此の功を得し  
 むるは此の印なり。  
 (三) 正觀音云云  
 外縛して二中蓮葉  
 なり。  
 (四) 金剛手印明  
 五古印。  
 (五) 普世天云云  
 胎藏の普世天明妃  
 の印なり。  
 (六) ヌテ、ヌテは  
 (七) 行事辨の許云  
 云、辨官のもの七  
 一人を御祈り奉行  
 に定めらる。

(一) 不空譯云云  
此の經を用ゆる宜  
しからず、深秘の宜  
の譯を故に金剛智  
の經を用ふる宜  
し。

(二) 延命の眞言云  
云、此は御加持の  
呪なり、降三世の  
呪を用ふる宜し。

(三) 延命法云云  
此の法は普賢の法  
に付しても行じ、  
又法は普賢の法に  
付して、又法に付  
ても、又法に付て  
魔天の法に付ても  
修す、又法に付て  
の法計り修して是  
宜し。

(四) 最極秘事  
魂は三十卷の教王  
秘の秘事なり、又  
秘の秘事なり、又  
もいふ。

(五) 施主云云  
施主の方へ行けば  
病人に及ばず、直  
服の人に加するに  
病なり、加するに  
房にて加持の時、  
自に

摩壇との間に立つ。(後説を用ふべし。〔異〕には後を前に作る。) 仁和寺覺法親王は、天蓋に八色の幡を懸

くる。文 師説に曰く、天蓋を用ふること便宜ならず、若し之を用ふれば火の爲めに危  
きか、随つて經に見えず、又先徳も多くは用ひざるか。 前の大僧正は(二)不空譯の壽  
命經を讀ましめ、御加持には降三世の眞言を用ふ、仁和寺覺法親王は(三)延命の眞言を  
用ふ。○種子の事。或が曰く、諭なり、是れ諸乘不可得の義、乘は則ち運載の義、運載  
は則ち延壽長遠の義、此れ近きより遠きに到るなり。文 或が曰く、種子は阿、三形は  
五股。文

○讚 秘密明讚に曰く、以下別 唵縛曰羅ニ、羅細堅固男、摩訶燥契耶の大安樂、縛曰羅ニ、摩訶勢

率都帝、與本を以つ、右の一讚は是れ傳法の阿闍梨深く之を秘す、是故に録に載せず、儀

軌に出さざるなり。文 或は金剛薩埵の讚を用ふ。○勸請句 普賢延命大薩埵、金剛

部中諸聖衆。○發願。本尊聖者、三世常住、普賢延命、金剛部中、諸大薩埵。○梵號 南無阿梨耶縛曰羅、日法三昧耶薩埵。

無量壽。○諸尊 三十七尊  
○延命法招魂作法魂魄より出づる怪異有る時之を行す。最極秘事なり。之を披露すべからず。 施主の衣服を請ひ出だして、

り、延命等の法な  
修し、作法の末に  
この法を作さば  
方の向き衣服を  
机に置き、加持

(二) 三十卷云云  
降三世王に自在  
降三世王に自在  
降三世王に自在  
降三世王に自在  
降三世王に自在  
降三世王に自在  
降三世王に自在  
降三世王に自在  
降三世王に自在  
降三世王に自在

覽・鏡の字を以つて香水を加持して、彼の衣服に灑ぐこと三度すべし。次に三股杵を  
取つて軍荼利の小呪を誦して、左に旋轉して衣服を加持すること三七返、次に活命の  
印を結んで彼の眞言を誦すること三返、印を以つて衣服の上に置く、印を置き了つて  
後念珠を取つて彼の眞言百返を誦す、次に三股を取り軍陀利の小呪を誦して、右に旋  
轉して衣服を加持すること三七返、然して後に施主に著せしむるなり、修法の初夜の  
時御加持の前に之を行ひ、彼の衣服を著せしめし後御加持を行ふなり。

○印 毎初夜の時之を行す。後夜 左右の十指堅固にして、舒べ立て、側はめ合せて外に向ふ、  
日中には之を行せず。 十指を鈎して招ぐ勢を作して金剛縛を爲す即ち成す。 眞言

唵引 縛曰羅ニ、薩埵呼弱句 三十卷の教王經十四に曰く、爾の時に一切如来、普

く三世を盡して増上の主宰たる、大自在天の活命を得せしめんが爲めの故に、一切如

來の心より此の大明を出して曰く、唵引 縛曰羅ニ、薩埵呼弱句 此の大明印は、堅

固にして秘密の鈎を作すべし。諸指を外に向へて舒べ展ぶ、是の印相を合して頂の中

に置く、死者能く還命を得せしむ、是の印相を説く時に、而も彼の下方は跋婆摩那

世界、跋婆彌莎羅囉哩瞿沙如来、忽に大自在天の身中より出現して此の頌を説いて曰  
く、大なる哉一切正覺尊、諸佛の大智は上、有ること無し、能く死者の有情の身を

(二) 禁五路の印を結んで大滿陀羅尼を誦すべき事。  
(一) 此の印を以て五路を去るに人にては、此の印を以て五路を去るに人にては、此の印を以て五路を去るに人にては、  
(二) 禁五路の印を結んで大滿陀羅尼を誦すべき事。  
(一) 此の印を以て五路を去るに人にては、此の印を以て五路を去るに人にては、

て、去讖還來して活命を得せしむ。病人死に臨まば、(一)禁五路の印を結んで大滿陀羅尼を誦すべき事。  
(二) 穢積金剛說神通大滿陀羅尼法術靈要門に曰く、又法あり、若し呪人病者を療治せんと求めば、先づ頓病の印を作すべし、先づ左の頭指を以つて屈して(三)房素の文を押して即ち呪を誦すること一百八返、印を以て頓病の人を七度下だせ、其の病立ち所に即ち除瘥す。」又法あり、若し呪人病治死に臨まば、先づ禁五路の印を作つて、然して後即ち其の病人を療治すれば即ち死せざるなり、三日是の如くす、先づ以つて前に準ず、次に無名指を以つて屈して掌中に向へて小指を豎て、呪を誦すること百八返すれば、其の患人速に除瘥す。文 同じき初めに大圓滿陀羅尼を説いて曰く、唵伐折羅俱嚩陀 一摩訶摩羅 二訶那訶 三摩他 四微枳羅 五尾陀防 沙咩社置羅 藍謨馱羅 烏樞沙摩俱嚩馱 呼泮吒 娑婆訶  
○法花法(四)息災に之 空色の天蓋を張り、幡二十四流を懸く。八色の幡なり。懸け様は仁王經法の如し。 又大壇の四邊四角に幢を立て雜色の幡四流を懸く、中央に多寶塔を安置す可し、護摩壇、十二天壇、聖天壇常の如し。  
○道場觀如來拳印 「觀想せよ、心月輪の上に八葉の蓮花有り、蓮花臺の上に惡字有り字

(一) 彼此冥合 定  
(二) 彼此冥合 定  
(三) 彼此冥合 定

變じて塔と成る、塔變じて大日如來と成る、衆生を利益せんが爲めに釋迦の身を現じて娑婆世界に出で、法花經を説き給ふ、此の娑婆世界は其の地瑠璃にして坦然平正なり、閻浮檀金を以つて八道を界ふ、寶樹行列して諸臺の樓觀皆悉く寶を以つて成ず、諸の菩薩衆咸く其の中に處す。是の如く觀じ了つて印を以つて七處を印す。  
○印 率都婆の印なり。(一) 彼此冥合 虛心合掌して、二頭指を屈して二大指の上に置く。或は智拳印を用ふ、是れ又甚秘なり。委細口傳 但し(二)口傳を以て之を結ぶ。極秘密なり。 ○眞言 曩莫薩縛怛他 藥帝 毘庚 二尾濕縛合目契毘藥合 薩嚩縛他 阿阿暗惡 嚩 口傳に在り。正念誦に之を用ゆ。 眞言を滿する時五字の義を思惟すべし、即ち謂く、阿因 阿行 暗證 惡入 嚩 圓滿の義。 ○部主 不動範後傳 或る傳に曰く、金剛界大日(三)常 智拳印、普賢一字心の明、歸命・鍔、今は後の傳に依る。 ○諸尊段、八大菩薩。八杓之を供ず、一切菩薩の眞言を用ふ。 四大聲聞。四杓之を供ず、聲聞の眞言を用ふ。 ○一切菩薩眞言普 曩莫三曼多沒馱喃 引 薩縛他尾摩底尾枳羅 停 三 達麼 二 馱 涅 入 佐多 四 參 參、訶莎 二 呵 ○聲聞眞言梵 曩莫三曼多沒馱喃 引 係賭鉢羅 二 底 也 二 野尾 曩多羯磨 涅惹 多 呼 〇無量壽命決定如來眞言に曰く、曩莫阿跛哩 引 欲枳 娘 二 曩尾 賴室 者 二 也、囉 逝 捺 也 但 他 藥 跢 引 也 唵 引 薩 縛 僧 塞 迦 引 羅 跛 哩 輪 的 反 馱 達 摩 音 帝 摩 訶 引 曩 也 跛 里 縛 引

○法花肝心真言

曩莫三曼多勃駄喃佛命普 唵三身 阿開 阿示 開悟 惡入 薩縛 勃駄 喃佛 一切  
積攘 合二 曩智 沙乞 葛合 毘耶 也見 誡誡 曩娑 縛空 性羅 乞叉 彌離 薩達 廢法 浮陀 哩迦 花也 蘇  
馱覽 也惹 入也 吽銀 也護 喜縛 日羅 囉乞 叉給 唽無 願也 娑婆 訶決  
○法花補闕真言 曩謨囉但那但羅夜耶唵 佉羅佉羅俱注俱注 二 摩羅盧魚 伽呼 囉呼 囉成  
賀賀素但弩五 叭素 鞋未 拏薩 阿薩

○滿すべし真言等

佛眼、大日、部主、本尊、無量壽命決定如來、法花肝心真言  
已上の四真言は轉經の後に誦す。 法花補闕真言、一字真言。

○轉經間觀念

舌の端に入葉の蓮花有り、花の上に佛有す結跏趺坐せり、猶し入定の相の如し、妙法蓮花經の一一の文字、佛口より生じて皆金色にて光明を具し遍く虚空に列なる、一一の文字皆變じて佛身と成つて虚空に遍滿す。云云 此の觀を作す時に漸く身心輕安にして、即ち定中了了にして一切の佛を見ることを得、甚深の妙法を説く、聞く事を得已て思惟して則ち法界真如觀に入つて、一縁一相にして平等なること猶し虚空の如し。 ○御加持 不動の真言を用ふ。 勸請 一乘教主釋迦尊、多寶

(二)更に云云之を用ひず。

分身諸如來、普賢文殊諸菩薩、身子目蓮諸賢聖、梵釋多聞十羅刹、靈山界會諸聖衆。 ○禮佛 (二)口傳 (三)自輪五阿字義を觀阿諸法本  
阿靜閣 惡離 囉 巧智 義範の傳に曰く、種子・變・三・塔、(三)羯磨・金・日。仍つて金界の曼荼羅を以つて本尊とす。印は智拳。明は無所不至。云云

(一)口傳云云の次に常の通り其の次に薄の通り其の次に多の通り其の次に法華の通り其の次に持の通り其の次に無の通り其の次に南の通り其の次に無の通り其の次に加へて證すべきことなり。 (二)自輪五阿字と通音なり。 (三)羯磨云云。尊形は一印會の金の尊大目といふこと。

合 蘇、蜜、名香 五寶 金、銀、眞珠、瑠璃、水精 五藥 石  
菖蒲、人參、茯苓、赤箭、天門冬 五香 沈、白檀、丁香、鬱金、龍腦  
五穀 粳米、大麥、小麥、大豆、白芥子 天蓋 一廣長各々七尺。青色。幡二十八流  
三尺二十四流 白黑赤黃各々二流。 五尺四流 懸くる幡竿 尺長七 大壇一基 方六 護摩壇一基  
方五尺 十二天壇、聖天壇各々一基 方三 禮盤二基、半疊四枚 大壇、護摩、十二 脇机四 經机八  
六寸 壇料の燈臺十二 伴僧所切燈臺八 壇敷布四段 大壇二段。護摩壇一 蠟燭布一段 大幕二 油二斗七  
升二合、此の内、大壇八升日別一 護摩壇一斗五合日別一 十二大壇二升御燈明一蠟燭一阿  
闍梨の料七合日別一 伴僧八人の料五升六合人別七合 壇供米十七石、此の内 大壇護摩壇の料  
壇料 二石 阿闍梨一人供四石日別 伴僧八人供十九石二斗人別二 承仕二人食四斗八升人別二 駈  
仕五人食八斗人別一斗六升 二人護摩壇、一人十二天壇 見丁二人食一斗二升人別 各淨衣白 永保元年三  
月十三日

法花經御修法所

奉供 大壇供、護摩供、十二天供、聖天供、諸神供。 奉讀 妙法蓮花經  
奉念 佛眼真言、大日真言、部主真言、本尊真言、無量壽命決定如來真言、法花  
肝心真言、法花補闕真言、護摩真言、一字金輪真言。

右は 金輪聖王玉體安穩增長寶壽御願圓滿の奉爲めに△月△日より始め今月今日に至  
る、一七箇日夜の間、八口の伴侶を率ゐて殊に精誠を致し修し奉ること件の如し。

年月日 行事大法師 阿闍梨、

〇〇〇〇六字經法

〇種子 行可得 〇三・弓 〇尊像 (三)左右第一の手は印、左の第二は戟、右は刀、左の第三は月、右は日。 〇印 觀音大僧 二大指を

指の頭を捻して、定の掌を仰け惠の掌を覆ふて、惠の頭指を以つて定の中の中に入れ、定の小指を以つて惠の大  
中の間に入れ、惠の小指を以つて定の無名指の頭を捻し、惠の無名指を以つて定の頭指を捻す。此印を以つて根  
本の印と爲す。 眞言常の如し 〇又の印 内縛して、二中指を立て二頭指を屈し 眞言常の如し、  
(三)口傳在り。 調伏に之を行す。餘家の説は息災に之を修す、但し然かるべからざる由 (四)僧正之を示

し給ふ。 〇初火天段 常の如し 〇次に部主段 金輪 〇次に本尊段 六字明王、若くは聖觀音、若くは千手。 〇次に諸尊段  
大威徳。不動。 〇次に世天段 常の如し。但し終に呪詛神等の供を加ふべし。

(一)の像は黒字明此  
王の修方なり小野  
勸修寺なり黒字大  
僧正定海も六字雙  
紙には大師御傳を  
肝要となし六觀音  
を本尊となす。此  
(三)左右云々相  
の印は觀音宿都抄  
の注には明王秘抄  
の手に印は三古第一  
に作るといふ合此  
れは兩の手を約さ  
ずして初めに合さ  
て三古印を作ると  
いふ。口傳云々左  
(三)口傳云々左右  
は空水を捻し、左  
りといふ。口傳に  
(四)僧正 範俊な  
り、此の師は調伏  
に修す。息災は  
修す。三寶院僧故  
は息災に修し玉正  
是れ未發と調伏と  
異る也。

〇焼三類形の事

護摩了つて未だ鈴杵を置かざる以前に之を焼く、謂く右の脇机に  
小土器に入れ置ける三類形を取つて、金剛盤の上に置き、先づ不動の慈救呪を以つて  
一百八返之を誦して攪き、次に六足尊の呪を以つて一百八返之を誦して攪く、然して  
後に降三世の眞言を誦して獨股を以つて二十一返加持す。其後爐の椽の上に三類形を  
置いて、佉知の眞言を誦して之を焼く、焼く間觀想せよ、一切衆生は作業に依つて輪  
廻す、此の業を淨除して解脱灌頂の名を得、先づ天狐を焼き、次に地狐、次に人形な  
り、箸に挿んで爐火に焼く、各々七形、器本三類形を入を以て其の灰を受けて蓋を覆ふ  
て件の灰を散せしめざれ、七日了つて後結線に相具して之を檀越に送つて服せしむ、  
是れ怨敵を伏する意なり、湯を以て之を服せ、酒を以て服すべからず。

〇弓箭の事

三類形の事已つて、次に葦の箭、桑の弓を以つて六方を射拂ふ、東南  
西北上下其の次第なり。 上方の矢は天井に之を射立つ、  
爐の前右邊の弓矢之を用ふ。

〇結線の事

供養法已つて後、護摩の間に伴僧一口を以て結線せしむ、一時に一筋  
を以て百八返之を結す、三時に三筋なり、凡そ七日の間、二十一筋なり、本書に曰く、  
三尺五寸を法とす、若し不足ならば四五尺も亦得。文 解線の法有り、悉地成就の後

(一) 御加持云云  
此の次に護摩壇の  
圖あれども之を略  
す、圖後に文あり  
之を出す。

(二) 故僧正云云  
此の次に三類の形  
の圖を出せり、今  
は之を略す。

(三) 此の法は云云  
是れは小野の傳云  
(四) 曼荼羅云云  
此は醍醐の傳なり  
(五) 觀宿僧都の圖  
之を略す。

之を解く、但し故僧正、仁海僧都成は俱に之を行せられず。云云。○伴僧の時間讀  
經は護摩の末に臨んで、各々六觀音の眞言を滿せしむ。○御加持 六字眞  
言か。

(圖後の文)  
嚴覺院の御修法を奉仕す、承仕前に行ひて物の具を備ふ、佛前の大弓此の圖の如く之  
を張り立つ、而るに院、承仕に仰せられて曰く、弓は絃をハツシテ立つべし。故僧  
正もさぞせしと。云云

墨を以て其の呪咀怨家の姓名を書き著く、若し姓名を知らざれば、其の字名イヅナを書き、  
又名を知らざれば其在處乃至國郡郷某宅某條某坊の男女と注すべし。○息災壇の様  
内供の道場 〇禮佛 南無六字章句觀世音。〇勸請 六字章句觀世音、六大八大諸觀  
音。〇本尊の事 (三) 此の法は六字明王を懸け奉る、形像說文初の如し、或は(四) 曼荼  
羅を懸け奉る。說あり。〇(五) 觀宿僧都の圖。

廻はりの小さき月輪の六體の天形は合掌せるを之を書せ、其の内三體は梵字を以て  
名を書す、是れ小野僧正、圖し加へ給ふ所なり、其の意趣委しく口傳に在り、謂く呪  
咀神を畫く等なり、下の小さき月輪は是れ鏡か、瑜祇經に、觀音に鏡を持せしむる事

(一) 明仙僧都の圖  
之を略す。

見えたり。〇(二) 明仙僧都の傳

〇支度 蘇 蜜 名香安息 五寶 金、銀、眞珠、琥珀、瑟瑟

五香 龍腦、鬱金、白檀、丁香、沈香。五藥 赤箭、人參、茯苓、石菖蒲、

牛黃 五穀 稻穀、大麥、小麥、粟豆、油麻 小燈臺伴僧の座讀經の料、其の  
數は人數に隨ふべし。

弓一張佛の右に  
之を立つ 矢十二簇六簇は弓に副へて佛前に之を立つ。  
二簇は鳥居。四簇は櫛の料なり。 已上弓箭に例す。 (三) 大刀一腰

(三) 大刀一腰 此  
の劍は護摩の利劍  
なり、箇様なる法  
には是非共に此の  
劍を持することな  
り。

佛の左に 桑弓七張。葦箭四十九簇弓一張に各々七簇を具す、爐の邊に置き  
之を立つ 華七束箭並に乳木等  
の料。百八並  
に二十一の乳木は皆葦を以つて箭  
の形に造り紙を以つて羽と爲す。 紙五帖三類形並に羽等の料なり、三類とは天  
狐・地狐・人形なり。常の如し。各々紙  
を以つて之  
を彫る。 淨衣純  
色 已上委く子細を注す、支度には此の注有るべからず、書き様別  
紙に在り。

注進 六度經御修法一七箇日支度の事。

合 五色糸三丈五尺、白練糸五尺。 蘇 蜜 名香白檀、沈水、薰陸、  
鬱金、甘松。 五

寶 黃金、白銀、眞珠、瑠璃、琥珀 五藥 石菖蒲、鬼臼、鬼箭、射干、巴

豆。 五香 安息、麝香、甲香、丁香、蘇合 五穀 大麥、小麥、小豆、

胡麻、粉 壇一燈臺  
本 燈臺四脇机  
脚 禮盤一 半疊一 經机三 燈臺三 日別油六合料 壇敷布一 麻

子袋、佛供覆、並に蠟燭料の布、壇供米、油五斗弓一張、箭十二、劔一、紙五、帖、桑弓七張長二尺、革箭四十、九筋

阿闍梨、一伴僧、承仕、駈仕、見丁、淨衣黒色

右注進件の如し。長治二年十月 日 東宮御修法支度 阿闍梨法眼和尚位

○注進 六字經御修法七箇日支度の事

○六字經御修法所

奉供 大壇供六十三箇度、護摩供六十三箇度、諸神供九箇度。奉讀 六字神

呪王經二千三百卷。奉念 佛眼真言六千三百返、大日真言六千三百返、大威

德真言六千三百返、本尊真言六萬三千返、正觀音真言一萬二千六百返、千手真言

一萬二千六百返、如意輪真言一萬二千六百返、十一面真言一萬二千六百返、準胝

真言一萬二千六百返、馬頭真言一萬二千六百返、一字金輪真言四萬三千六百返。

右は 太上天皇御息災安穩增長寶壽御願圓滿の奉爲めに正月二十四日より始め今月今日に至る、並びに三七箇日夜の間六口の伴僧を率ゐ殊に精誠を致し修し奉ること右の如し。保安五年二月十六日 阿闍梨大法師寛信

○注進 此の注進は承徳三年五月二十八日、勝覺和尚の奉爲めに修する處の注進なり、前出の注進と略す。

○仁王經法息災に之 大壇の上に青色の天蓋を張り八色の幡二十四流を懸く。 ○大壇圖 ○本尊五大尊 ○五大尊種・三。 北方に曼茶羅を懸くる。 ○先づ五大尊の○印・真言を用ふること常の如し。 ○次に根本印言○根本印 兩手を以つて背に二頭指二小指掌中に屈して、大母指を以つて各々二頭指二小指を押す。餘の四指を直く立つ。口に曰く是れ經卷の印なり。上に梵篋を置くと思へ。 ○真言 經の陀羅尼を用ふ。呪を用ふ。或は修習般若菩薩の真言之を用ふ。 阿羅嫺、迦羅拏、阿羅拏、迦羅拏、摩訶波羅壤、波羅密帝、娑縛賀 ○梵篋印言 胎藏の如し。 ○念誦 佛眼、大日、修習般若真言、經の陀羅尼、不 ○部主大日 或は般若菩薩 ○本尊不動 ○諸尊五大尊 ○勸請 本尊般若持明王、四大八大諸忿怒。 ○又の説 本尊聖者般若尊、五大忿怒諸眷屬。 ○發願 至心發願 唯願大日 本尊界會 般若明王 五大忿怒 諸大明王 兩部界會 諸尊聖衆等。 ○讚 四智並に不動 下座之 ○禮佛 五大尊梵號 但し不動三尊 ○御加持 慈救呪を用ふ。 ○修習般若真言 口傳に曰く正 曼莫、婆哦縛帝波羅壤波羅密多曳、唵紇里地室利輪嚕多尾惹曳、娑縛賀 ○北方に曼茶羅を懸く。 ○注進 仁王經御修法一七箇日支度の事。



或る本に曰く、保元二年夏の比、上醍醐に於て之を鈔す。次年四四〇に少小之を加ふ。權

已上卷三

國譯玄秘鈔卷四

○北斗法息 或は(二)大法に就て之を修す、但し別に次第を用ふる尤も宜し。

五穀の中には命穀を多く之を加ふ、乳木には命木を加へ用ふべし。子の年の人は貪狼星に屬す、命木は桐キトウの反、命穀は大豆、粟。丑亥は巨門星、槐エンシクワイの反、橙ヤマナバナ、粟、稗。

寅戌は祿存星、榆ニレ、稻イネ、小豆。卯酉は文曲星、桑サウの反、大麥、黍。辰申は廉貞星、棗、小麥、小豆。巳未は武曲星、李スモ、反、大豆。午は破軍星、杏カラモ、小豆、麻子。

○道場觀 「壇の中に惡字有り變じて七寶莊嚴の宮殿と成る、其の中に紇里字有り寶蓮花臺と成る、臺の上に勃嚙ボクカウ字有り、轉じて金輪佛頂と作る、其の後邊の左右に七つの荷葉座有り、座の上に各々嚙字有り、北斗七星と成る、其の前後左右の邊に多くの荷葉座有り、座の上に卍字有り、日月火水木金土、羅計、十二宮神、二十八宿と成る、各々眷屬圍繞せり。」

肝要となす、然も不動と常の不動と異り、索を持せず、二輻輪を持せず、三摩地に入らざる、れ、地に入らざる、ち、不動の尊、即ち、不動の尊、若、合體の尊なり、眞言は慈救の呪なり、  
(三)印、眞言、五印、即外五印なり、眞言は慈救の呪なり、  
(四)曼荼羅、圖を略す、  
(五)大法云云、此の法は先づは大法につぎ行ずる等なれども、散念誦等長き故に大法にては餘り長坐なれば三時は行じ難し、故に十八道別次第に付く、  
(六)大法の答なれば、本は法の處に或れば、字宜しからず、次の別次第とは、十八道に付くとはいふ義なり、  
(七)嚙字、卍字は星の通稱、字は天道部の通稱なり、

(一)別星供 當年星供なり、  
(二)虚空云云 虚空に星現じ連りたる貌に觀ぜよとのこと、  
(三)妙見 七星の外に、七星と同一、武曲星の脇に坐する星なり、  
(四)本命星 是れ生れ年の星なり、  
(五)本命曜 生れ日の曜、  
(六)本命宮 生れ月の曜、  
(七)本命宿 生れ日の宿、  
(八)蠟燭供の圖 之を略す、  
(九)蓮臺の僧正 寬空、  
(一〇)次第云云 此次に護摩五段の圖あり、即第一、火天、第二、命輪、第三、北斗、第四、諸曜宿、第五、世天、第六、之を略す、  
(一一)翻經院の元政 寺の翻經院の元政に此の軌の說なる故に、  
(一二)阿闍梨の灌頂 灌頂の阿闍梨の灌頂

師曰く、利根の人は各別の種子を想へ是れ尤も善し、小智者は普通の字を想ふに亦失無きか、但し(一)別星供には各種子を觀ず、尤も勝れたり。文 或は又(二)虚空の儀式を觀じて之を召請す。  
○一字頂輪王印言 ○北辰 (三)妙見印言 ○召北斗印言 ○北斗惣印言 ○七曜九執十二宮惣印言 ○二十八宿惣印言 ○本命星印言 ○(五)本命曜印言 ○(六)本命宮印言 ○(七)本命宿印言 ○八字文殊印言 ○金剛吉祥印言 ○破諸宿曜印言 ○法施 此の法の結界遮除には、馬頭或は無能勝を用ふ。 ○(八)蠟燭供の圖 天曆年中(九)蓮臺の僧正、内裏御修法の様なり、但し小野の說に依つて妙見を加ふのみ。  
師説に曰く、北斗七星の座此の圖を亂すべからず、但し蠟燭の次第は、妙見本命星より之を始むべし。又の説有り、彼の圖の蠟燭の(一〇)次第に見えたり。  
○勸請 一字金輪遍照尊、北斗七星諸曜宿。 ○禮佛 曩謨多羅 北 訶迦 斗 薩波多 曩迦 星 ○一字頂輪王印言 内轉して、二中指直く立て、釧形にす、二頭指平に屈し、二大指の甲を押す。小野、内供 曩謨三曼多那羅那羅 破左羅 吽 (一)翻經院 ○妙見・印・言 蘇。 施無畏 師 唵 蘇 底 里 瑟 多、娑婆 賀 ○召 北斗印言 虛心合掌して二大指を以つて二無名指の甲を捻して二中指二小指連形の如くして、二頭指少し開き屈して來去す(翻經院) 曩謨三曼多那羅曩 薩 嚩 囉 伊 賀 伊 那 伊 迦 伊 羅 伊 謨 羅 多 羅 迦 羅 含、娑婆 二 賀 引

國譯玄秘鈔

○北斗惣印言

嚙或は吽指尾

左右の二火二空相ひ保けて之を捻し、二小指の前の面を合せて二地

とす。金剛智の軌に曰く、北斗八星の呪又は八女と云ふ、文然らば七星に妙見を具するか

嚙 或は吽 定惠圖にして端を合はせ二空退け 歸命、莫羅合 醯濕縛里合 野鉢羅合 鉢多儒低羅

摩耶、娑縛合 賀の軌胎藏護摩

○二十八宿惣印言 嚙 或は吽、虛心合掌して、二火外に相又へ、二空も亦相又ふ、延命院 歸命、

諾乞灑合 但羅涅蘇那爾曳、娑縛賀護摩

已上、北斗、九執、十二宮、廿八宿、各惣種、印言畢る。

○北斗各別印言 二手合掌して、十指相著けて、二風二空極めて之を相開

金剛合掌を以て、貪は額に當て、巨は面、祿は左眼、文は鼻、廉は右眼、武は口、

破は頤。云々 ○貪狼星 吠指尾 唵陀羅尼陀羅尼吽指尾 歸命、知羅布羅尼迦

他曳、娑縛賀帖 ○巨門星 多羅 唵俱嚙陀羅吽吽。 歸命、多羅多羅多羅賀

尼、娑縛賀 ○祿存星 佉 唵波羅多伽吽 歸命、迦迦迦利賀耶羅尼、

娑縛賀 ○文曲星 波羅 唵伊利陀羅吽吽 歸命、鉢羅鉢羅婆夜羅婆夜羅尼、

娑縛賀

○此の法を用ふる好

娑縛賀

○廉貞星 多嚙 唵吐吒羅尼唵 歸命、迦迦迦引 哩賀哩賀夜利尼、

娑縛賀 ○武曲星 曩 唵 祿都嚙吽 歸命、到到利利迦迦捨利賀哩賀夜哩尼、

莎呵 ○破軍星 縛 唵 娑婆陀哈吽吽 歸命、娑底多羅娑底婆利波利摩訶婆

利捨利尼、娑縛賀 已上北斗七星各別の種印言畢る、梵字の眞言は六帖に在り。

○九執各別印言 當年星と本命曜は其の體は一なりと雖も、内供の七集

○日星 阿合掌して風以下の四指頭相ひ柱へ、前の方を大に開いて二空の

耶、娜莫素哩野薩縛曩乞灑合 但羅二 囉惹野、唵引 阿謨伽寫、名 設底娑婆二 賀撰災決

○日曜 印前 唵阿彌底也室利、娑縛賀 ○月星 素 右の手拳に作つて腰に安す、

つ、少し屈して其の高きこと少し許り肩を過す 唵戰 但羅二 曩 乞灑合 但羅二 囉惹野 名 殺

底、娑縛賀撰災決 ○月曜 印前 唵素摩室利、娑縛賀 ○火星 阿 右の手五指

相著け、空を屈して掌中に納れ著 唵引 阿譏羅迦嚙儼野、名 娑縛賀撰災決 又の眞言 出づ。七集

く、風中節を屈して相招く。 南無三曼多勃他南、唵摩利多、娑縛賀。 ○火曜 印前 唵引 央譏羅迦室

利、娑縛賀 ○水星 母 二羽内縛して二頭を立て合 唵引 母駄曩乞殺合 但羅二 娑縛合

弭曩位契弩摩、娑縛賀撰災決 ○又の眞言 七集に之を取る 唵俱悉陀他姪他利多姪姪紫紫

(一) 撰災云云 書  
(二) 撰災云云 書  
(三) 撰災云云 書  
火羅の圖  
行の作

(三) 十二宮云云  
諸尊要鈔所出に同

異には此に産備帝、娑縛賀 ○水曜 印同 唵沒陀室利、娑縛賀 ○木星  
毘利 印 唵 娑羅合 訶薩鉢合 底曩摩比跡縛曩合 野位 摩羅縛羅 引 馱寧、娑婆賀  
撰災訣 ○又の眞言 火羅の圖に出づ。 曩謨三曼多沒馱南、唵印那羅野、娑縛賀 ○木  
曜 印同 唵沒羅賀娑跋底室利、娑縛賀 ○金星 戌二羽内縛して二中指を舒べ立て  
屈す。 唵戌 羯羅合 誡駝縛羅縛合 邏惹野位 室利合 迦里、娑縛二賀撰災訣 ○又の眞言  
火羅の圖に出づ。 唵吠尾野、娑縛賀 ○金曜 印同 唵戌羯羅室利、娑縛賀  
○土星 捨 鉢印 地天 唵 捨泥殺備二羅曩乞殺合 但羅二 跋羅合 訶引 摩曩引 魯  
波野位 普瑟底合 迦里、莎呵 ○撰災決 ○又の眞言 七集に之を取。 唵贊曰 爾にはは日。 訓  
野には訓を 曳、娑婆賀 ○土曜 印同 唵舍備始者羅始制帝室利、娑縛賀  
○羅喉星 囉 二手各々五指を展 唵囉 戶曩、阿素羅合 囉惹野、塞摩捨都曩野位 扇底  
迦哩、娑縛賀 ○又の眞言 唵羅喉室利、娑婆賀 ○計都星 計二手内に又へ縛  
を以つて右の中指の 唵縛曰羅合 計都曩 曩乞殺合 但羅二 囉惹野位 咩、娑縛二賀撰災決  
○又の眞言 傳 唵計都室利、娑婆賀 以上九執各別の種印言畢る、九執  
○十二宮各別種印言 各別も亦惣印を用ふ、堅合にして二空を建つ幢に同じ。

或る師の説にしに尤も優れ  
り、依て之を用ふ。

師子。計 曩莫三曼多母馱南、引 綜訶婆多曳、娑縛賀 雙女。憾。 歸命、迦惹婆  
多曳、娑縛賀 秤。 嚩 歸命、誡智捨洛婆多曳、莎呵 蝸。 毘利 歸命、毘  
利嗜迦婆多曳、莎呵 弓。 馱 歸命、檀菟婆多曳、莎呵 麼竭。 麼 歸命、  
摩迦羅婆多曳、莎呵 寶瓶。 鳩 歸命、鳩槃婆多曳、莎呵 魚。 彌 歸命、  
彌那婆多曳、莎呵 羊。 迷 歸命、迷娑婆多曳、莎呵 牛。 迦 歸命、毘  
梨沙婆多曳、莎呵 男女。 迦 歸命、彌陀那婆多曳、莎呵 蟹。 迦 歸命、  
羯羅迦吒婆多曳、莎呵 已上十二宮各別の種印言畢る、件の眞言は石山の七集に  
出づ、同集の中に更に眞言有り見るべし。  
○二十八宿各別の種印言 諸家の次第に惣印を用ふ。 如し有人曰く、奮然請來胎藏  
の軌に各別の印有り。 文之を考ふべし。  
昂。 嚩 曩莫三曼多母馱南、引 基栗底訶曩 乞灑入 但羅、莎呵 畢。 盧 歸  
命、盧喜尼、曩乞灑但羅莎呵 皆。 盧 歸命、普 尸羅、曩乞灑但羅莎呵 參。  
阿歸命、阿陀羅、曩乞灑但羅莎呵 井。 補 歸命、補捺伐蘇、曩乞灑但羅莎呵

鬼<sup>\*</sup>補<sup>\*</sup> 歸命、佛沙耶、曩乞灑怛羅莎呵」 柳<sup>リウ</sup>阿<sup>ア</sup> 歸命、阿誓羅、曩乞灑怛羅莎呵」 已上東方

星<sup>セイ</sup>摩<sup>マ</sup> 歸命、摩摩、曩乞灑怛羅莎呵」 張<sup>チヤウ</sup>普<sup>ホ</sup> 歸命、普羅婆婆羅俱、曩乞灑怛羅莎呵」 翼<sup>ヨウ</sup>弭<sup>ビ</sup> 歸命、鳴多羅頗勒婆、曩乞灑怛羅莎呵」 軫<sup>シン</sup>訶<sup>カ</sup> 歸命、訶莎多、曩乞灑怛羅莎呵」 角<sup>カク</sup>質<sup>シツ</sup> 歸命、質多羅、曩乞灑怛羅莎呵」 亢<sup>カウ</sup>薩婆<sup>ソバ</sup> 歸命、薩婆<sup>ニ</sup>底、曩乞灑怛羅莎呵」 氏<sup>テイ</sup>蘇<sup>ソ</sup> 歸命、蘇舍佉、曩乞灑怛羅莎呵」 已上南方

房<sup>バウ</sup>阿<sup>ア</sup> 歸命、阿菟羅他、曩乞灑怛羅莎呵」 心<sup>シン</sup>瑟<sup>シユ</sup> 歸命、折瑟他、曩乞灑怛羅莎呵」 尾<sup>ビ</sup>慕羅<sup>ボラ</sup> 歸命、慕羅、曩乞灑怛羅莎呵」 箕<sup>キ</sup>阿<sup>ア</sup> 歸命、補魯縛阿沙弩、曩乞灑怛羅莎呵」 斗<sup>ト</sup>摩<sup>マ</sup> 歸命、鬱多羅阿沙弩、曩乞灑怛羅莎呵」 牛<sup>ギウ</sup>阿<sup>ア</sup> 歸命、阿毘沙、曩乞灑怛羅莎呵」 女<sup>メ</sup>沙羅<sup>シャラ</sup> 歸命、沙羅波那、曩乞灑怛羅莎呵」 已上西方

虛<sup>キョ</sup>陀<sup>ダ</sup> 歸命、陀憍瑟他、曩乞灑怛羅莎呵」 危<sup>キ</sup>捨<sup>シヤ</sup> 歸命、捨多毘沙、曩乞灑怛羅莎呵」 室<sup>シツ</sup>婆<sup>バ</sup> 歸命、發羅縛跋陀羅婆、曩乞灑怛羅莎呵」 壁<sup>ヘキ</sup>鳴<sup>メイ</sup> 歸命、鳴多那跋陀羅婆、曩乞灑怛羅莎呵」 奎<sup>クイ</sup>麗<sup>レイ</sup> 歸命、麗婆底、曩乞灑怛羅莎呵」 婁<sup>ロウ</sup>阿<sup>ア</sup> 歸命、波羅尼、曩乞灑怛羅莎呵」 胃<sup>グイ</sup>奢<sup>シャ</sup> 歸命、阿訶毘、曩乞灑怛羅莎呵」 已上

曼茶羅 星曼茶羅の圖あるも之を略す。

北方の眞言は六帖に在り。但し梵字なり。 曩<sup>ニ</sup>引<sup>イ</sup>乞<sup>キ</sup>灑<sup>セ</sup>合<sup>カ</sup>怛<sup>タン</sup>羅<sup>ラ</sup>とは宿の梵語なり。

○金剛吉祥明 唵縛曰羅<sup>剛</sup>室利<sup>佛</sup>摩訶<sup>大</sup>室利<sup>吉祥</sup>衣<sup>白</sup>觀<sup>音</sup> 阿憍底也室利<sup>日</sup>素摩室利<sup>月</sup>央<sup>誡</sup>羅迦室利<sup>火</sup>沒陀室利<sup>水</sup>沒羅賀沙跋底室利<sup>木</sup>戊羯羅室利<sup>金</sup>舍憍始者羅始制帝室利<sup>土</sup>摩賀<sup>三</sup>摩也<sup>普</sup>曳室利<sup>諸</sup>娑縛賀<sup>去</sup> 一行の意は縛曰羅室利、此には金剛吉祥と云ふ、是れ虚空藏の別名なり。金剛智の意は義を以て之を言ふ、是れ佛眼菩薩なり。文 兩義雙べて之を擧ぐ、此の呪の中に羅睺計斗の二星無し、是れ七曜の惣名なり。 ○妙吉祥破諸宿曜明 唵薩縛怛羅三摩曳室利曳、娑縛賀 ○曼茶羅

三院の諸星を分つて、並に内院の四隅に十二宮を安すること等は、香隆寺の傳に依る、即ち天曆年中、内裏に於て勤行せらるゝ曼茶羅の大略は此の如し。但し二十八宿の次第は孔雀經に依つて之を圖す。 已上卷四

此の鈔四帖は方さに安養院舊跡聚樂亭にて遂に寫功訖る。

享保十稔八月 日 權僧正運助

國譯玄秘鈔終

# 國譯作法集

## 國譯作法集目次

- 護供養略作法
- 十度異名
- 瘡病法
- 帶加持等
- 手水等
- 衣服
- 加持付飯
- 沐浴
- 五色
- 病者湯加持
- 土砂加持
- 眠臥等
- 鎮讀導師法
- 印佛法
- 隱所作法
- 施食作法
- 同略作法
- 御衣
- 木加持
- 曼供金打事
- 護摩焚燒義
- 泥塔供
- 內護摩
- 三衣法
- 作壇作法
- 加持香水
- 兩部合行作法
- 四種護摩記
- 土公供
- 行法中間立座
- 字輪觀
- 小野廣澤相違
- 孔雀經發願作法一日
- 護摩作壇略作法等
- 大法護摩壇作法
- 呪願
- 泥塔供養作法
- 修學士代
- 驗者作法
- 十五童子法帖二
- 同略作法
- 同寫經供養作法
- 童子經大薄
- 同供養略作法
- 壽延經護事
- 壽延經
- 清瀧宮祈雨發願
- 同御讀經
- 後加持等法則
- 大法外儀
- 付兩界行別尊事
- 智元辰法
- 亡者曳覆書樣
- 爲亡者行法事通智院
- 無緣葬作法
- 以上五十四帖

此の作法は、法門の集り、化の授、人に依りて、集りて、授けり。此の作法は、法門の集り、化の授、人に依りて、集りて、授けり。此の作法は、法門の集り、化の授、人に依りて、集りて、授けり。

## 國譯作法集

### ○護諸真言供養略作法

○先づ三禮○次に唄○次に表白 敬て真言教主三世常住大日如來、兩部界會諸尊聖衆、乃至帝網重重一切三寶に驚し白して言く、夫れ諸法の本源を尋ねれば一實真如に非ざること無し、一切衆生を訪ふに皆是れ生生の恩所なり、是を以て三世の諸佛は悉く智光を和げて刹塵に同じ、十方の薩埵は同じく本地を捨て、苦器に代る、爰に佛子、情々惟れば受け難き上の男身を受けて幸に遺法の弟子と爲り、遇ひ難き中の正教に遇ひ忝くも密教の末流爲り、若し今生に利生の心願を發さざれば何れの世にか諸佛の本懐に類同せんや、之に依つて種子真言等を書寫して普く貴賤の檀那に施す、願くは此功德の力を以て同じく上下の四衆を利し、現世には短命天死トカの怖を除いて悉く内外無邊の各願を成し、後生には三途八難の患を免れて往生淨刹の希望を遂げしめん、縦ひ事業限り有りとも寧ろ普及の功無けんや、誓願際り無し、豈に得益に終盡有らんや、彼の三俱縛邪人の一字の益に依つて頓に無間の若器を免れ、又善住天子一聞の徳に依つて速に五衰の業報を轉するなり、加之らず、真言の妙力は即身に正覺を成し、

此の作法は、法門の集り、化の授、人に依りて、集りて、授けり。此の作法は、法門の集り、化の授、人に依りて、集りて、授けり。此の作法は、法門の集り、化の授、人に依りて、集りて、授けり。



定頭 惠大、此れは金剛童子持

念經に出たり。

五根 或は五力と名づく

色地 受水 想火 行風 識空、小より大に至る、此れは金智の毘沙門儀軌に

出た。又手を二招と名づくるは二掌なり、左手を内と云ひ、右手を外と云ふ。鉢頭摩花

青蓮 優鉢羅花黃蓮花 狗物頭花赤蓮花 芬陀利花白蓮花 金記の三に曰く狗物頭花

黃蓮 優鉢羅花赤蓮花 餘二種は前に同じ。

〇〇〇瘡病法

先づ病者を南に向けて居せよ、其後に行者居る可し。

〇先づ護身〇次に〇〇〇結界常の如し

〇次に彌陀の定印を結んで觀せよ、病者の心月輪に鍔・卍・恒洛・紇哩・惡の五字有り、鍔字變じて塔婆と成る、塔婆變じて大日尊と成る、卍字變じて五股と成る、五股變じて阿閼如來と成る、恒洛字變じて如意寶珠と成る、寶珠變じて寶生尊と成る、紇哩字變じて八葉の紅蓮華と成る、蓮華變じて阿彌陀如來と成る、惡字變じて十字の羯磨と成る、十字の羯磨變じて不空成就佛と成る、此の五智の如來五大明王と成る、卍字變じて劍と成る、劍變じて不動明王と成る、卍字變じて五股と成る、五股變じて降三世明王と成る、次に卍字變じて三股と成る、三股變じて軍荼利明王と成る、紇哩字變じて寶棒と成る、寶棒變じて大威德明王と成る、卍字變じて金剛牙と成る、牙變じて

〇〇瘡 毎日隔日又は二日、三日を隔て、起り又一年二年も病むことあり、其の時の加持の様なり。  
〇〇〇結果 不動又は降三世。

金剛夜叉明王と成る、不動明王は一切諸魔を降伏し、降三世は天魔を降伏し、軍荼利は〇〇身魔を降伏し、大威德は人魔を降伏し、金剛夜叉明王は地魔を降伏す。

〇次に慈救呪百遍滿ちて病者を加持せよ、次に立つて行者は病者の頂に頭指を以て

〇〇身魔 此は我等の事、軍荼利は平等性智なれば不平の我を治すこと。  
〇〇不動明王 此字を書くこと。

〇不動明王を書け、次に病者の肩を抜がせて左の肩に降三世明王を書け、胸に軍荼利明

王を書け、右の肩に大威德明王を書け、頂に金剛夜叉明王を書け、背に五羯の字を書

け、中に考、考字の上に刃字、考字の左に刃字、下刃字、考字の右に考字なり、前

にオホネ蘇我の五字を書け、左の臂に唵三摩耶薩埵を書け、右の腕に阿闍梨位の眞

言を書け、額にオを書け、左に蘇、右にえを書け、後に居して慈救呪百遍滿ちて、

後を見せず立ち行かせよ。 〇阿闍梨位眞言 唵、縛曰羅素乞央麼、摩訶娑怛縛、

卍





〇〇手水作法

(一) 右の手云云  
先づ左の手を明を  
唱へながら水を受  
け次に口に入れた  
り次に口頭とを以  
て洗ふも宜しとな  
す此れ秘抄に出る  
通りなり

(二) 次に目云云  
是は左手に水を受  
け明を唱へ次に洗  
ふこと

〇先づ二手を定恵と観ず、左定 右恵 十指は十法界十波羅蜜なり、即ち是を洗淨すと念へ。  
〇次に口を嗽ぐ時、(一) 右の手の大頭指を以つて口に入れ、左右を磨り洗ふ、即ち金剛  
喜の呪を誦して曰く、唵、縛曰羅薩都索、娑縛賀。此の真言を以つて口を嗽ぐ時は、  
其の口清淨にして出す所の言音和雅にして人をして聞かんと樂はしむ、言を出す時、人  
皆歡喜讚歎す。〇(二) 次に目を洗ふ時、佛眼の真言を以つて加持して之を洗ふ、呪に曰  
く、曩莫三滿多、勃陀南、栴陀婆盧舍那、娑縛賀。此の真言を以つて水を加持して  
目を洗ふ時に、目眼に病無ふして見る所分明にして遂に十方の諸尊等を見ることを  
得。〇(三) 次に面を洗ふ時、金剛笑の真言を以つて加持して之を洗ふ。唵、縛曰羅、  
阿薩覺。此の真言を以つて水を加持して面を洗ふ時は、其の面清潔鮮白等なり。

已上高雄口決

〇大御室御傳に曰く、朝、先づ起きて手口を洗ふ法大師 御傳 文殊の真言七返  
誦して手を洗ひ口を洗ふこと  
一度了つて此印明を用ふ。

〇八字文殊真言

唵、惡尾羅吽欠、遮落淡。若し手面を洗ふ時は、淨水を  
加持すること七返、然して手面能く衆生をして貴び仰がしむ、所有の諸の惡見の者、

悉く降伏すべし。或記に云はく、大御室の御説に云く、右の手三股の印にして藥師の  
大呪七返。

〇〇柴手水法別に在り

(一) 圓城寺云く、若し楊枝を嚼まんときは、先づ一切如來金剛微咲の密語七返を誦  
し已つて之を嚼めば、能く一切の煩惱を破す、密語に曰く、唵、跋折羅合賀莎訶

已上 五分律に云く、楊枝を嚼み已つて清淨に洗ふて弃つべし、蟲の食して死する  
を以つての故に。文 四分律に云く、楊枝極めて長きは標指チヤクシ。文 或る抄に云く、(一) 洗

手頰 當願衆生、得清淨手、受持佛法。〇嗽口頰 當願衆生、得清淨口、誦持佛

法。〇楊枝頰 當願衆生、得身正法、究竟清淨。

〇〇柴手水法。先づ右の手を以つて草若しくは木の葉一葉を取る、口に云く、蓮華

合掌の中に之を入れて押し磨つて、唵、尾皆帝、莎呵の言を誦し、次に右の手を以つ

て葉を取つて口に入れて之を嚼んで、唵、迦羅目、娑婆賀を誦す。十誦律に云く、大

衣近村に池水有らば即ち手足を洗へ、水無くんば草木の葉を以て塵土を拭ふて然して

後著衣せよ。文 大師槇尾の柴手水の因縁、遍照寺の御傳に有り見るべし、口決に

(一) 圓城寺 益信

(二) 洗手頰及  
び華嚴  
經に出づ

(三) 柴手水法此  
の作法は水盞に  
て近き水なき時  
作法なり此の作  
法は次に引く十誦  
律の文に由りて大  
師此の法を初め玉  
ふなり

(四) 遍照寺 寬朝

曰く、水邊之を隔つる事、三十町に及ぶ時は之を用ふ、輒く之を用ふべからず。」  
柴手水法後日之を書入る。

○〇〇衣服加持施主衣服を以つて師の所に送れ。 ○並に飯食加持 ○先づ三股の印、枳里枳里の明を以つて之を加持す。逆順三返許り。 ○降三世、金輪等の印言にて之を加持すべし、然して後に之を送る、凡そ衣服を加持すべき功能ある眞言等にて之を加持すべし、別の習ひ事無し、建保六年三月二十六日、六條の宮御衣加持の時、〇〇御手代りの時に勤む。 御口に任せて之を記す。

金剛佛子憲

○〇〇飲食加持施主、所食の物を以つて師の許に送る。或は飲等の上分を以つて之を送る。

○先づ三股の印、軍荼利の小呪を以つて之を加持す。逆順 ○次に火輪印 唵、覽娑

縛訶或が云く、想へ食の上に覽字有り、諸の不淨を燒滅す、之を食縛訶するに依つて諸の不祥病患等を除き心中の所願を成すなり。 ○次に金剛夜叉印金剛界牙菩薩の如し。

○次に愛染王眞言師子口の印、私に云はく、内縛して神智を立つ。 ○次に之を送つて食せしむ。

○沐浴作法、湯屋に行かん時は、先づ三部護身、香水を以て身に灑ぎ、然して後行くべし、又湯屋にて〇〇闍伽燒香を奉るべし、其の後衣裳を脱ぎ了つて、先づ眞言三返を誦す。 唵、訶里、娑縛賀 湯船の湯を加持するに枳里枳里の呪を用ふ、然して

(一) 衣服加持 施主の衣服は施主の請ふ時のことなり。先づ衣服を机上に置き、護身法次に三股の常法に如し。  
(二) 御手代り 賢の御手代りに成深勤めしなり。  
(三) 飯食加持 施主より食器物に入れて送るなり。護身法次に作法す。  
(四) 沐浴作法 以下作法三通即ち小野と檜尾と古方と野と通あるも檜尾の三通あるも常尾を勝となす。常尾を勝となす。常尾を勝となす。常尾を勝となす。  
(五) 闍伽云云 湯屋の本尊には跋摩の僧形なりして大陀

(一) 阿耨壇 阿耨達池と觀ずべし。

(二) 沐浴の時云云 以下檜尾の説。  
(三) 覽字 覽字も次の畔字も白色と觀ず。二字より火を放ち不淨を燒き盡す。  
(四) 烏樞沙摩 不淨を淨むるなり。此を用ふる心は毘那夜迦の障を除く。佛法は不淨を除く。故に必ず不淨の處にて障を成すことなり。  
(五) 歡喜地 切利天なり。  
(六) 淨湯 浴したるりて力、リ湯すること行水のことなり。

(七) 三度云云 本尊に供養するなり。

後沐浴すべし、湯船をば〇〇阿耨壇と觀すべし、其の船の中に蓮華有り、蓮華の廻りに又多くの蓮華葉有り、其の上に本尊佛菩薩、無量の天衆護法共に沐浴し給ふと念じ了る。 已上小野僧正

○沐浴の時「觀想せよ、頂の上に〇〇覽字有り、左右の脇に長の畔字有り、皆火焰圍繞す。」即ち左の手を以つて金剛拳に作り、右の手を以つて蓮華拳に作る、謂く握つて五指を拳にす、但し大指を堅つる是れなり、五處〇〇加持す、謂く額、左右の肩、心、喉なり、即ち〇〇烏樞沙摩の眞言を誦す。唵、矩嚕駄曩吽弱ナラウシヤク 次に軍荼利の小心印呪を以つて、槽ネの湯水を加持して、水の種子鍔字を觀じて天の〇〇歡喜池と想へ、即ち闍伽の印眞言を以つて、其の水湯を酌んで加持すること七返、道場の方に向つて散捨して、本尊に獻じて聖者の無垢の身を洗浴すと想へ、即ち自槽に入つて沐浴し訖て〇〇淨湯の時も亦之を作す、印呪を以つて加持して先の如く散捨せよ、觀想も亦同じ、又の方は本尊を請して槽の湯に入れて浴し奉ると想へ。 已上檜尾口訣 圓城寺云く、義決に云く、水を掬するの法は具に明さず、今以つて具さに述べん、先づ兩手を以つて側めて相ひ著けて物を掬する勢の如くして、二大指を以つて掬の中に入れて〇〇三度











多く悪魔の障礙其の便を伺ふ事を被ひる、或は便轉の處、或は諸の穢惡の處に在つて、皆其の害を爲す、密語契等を以つて加護して便を得せしむる勿るべし、廁に入らんと欲はん時、即ち想へ、己身覽字と爲る左右に卍字を想へ。委説は彼の八卷次第に見えたり 小野僧正云く、穢積金剛の印明、穢所を経ると雖も之を改め解かざれ。又云く廁に入らんと欲する時、即ち「想へ、己身覽字と爲る、左右に卍字を想へ、身に金剛の光炎有り。」師口傳に云く別折紙 隱所の作法の秘事は、自身を覽字と觀せよ、諸の不淨等之を燒き淨むる心なり。次に鍔字を觀ぜよ、此の字の腹より不淨物を出すと、此れ鍔字の智水を以つて諸の不淨物を洗淨せしむる意なり。」云云

○施食略作法此の作法は灌頂の當日より此の作法を勤むる次第は阿闍梨書き寫し受者に授くるなり。

○施食略作法粥作法之に準ずべし。

○先づ惣じて食物を加持す三股の印、右の手水・空・相捻す。 唵、阿密利帝、吽發吒 ○次に火輪

印 唵、覽、娑婆訶 ○次に金剛夜叉印明金剛界牙菩薩の如し 或は愛染王眞言師子口の印、私に曰く内縛して禪智を立つ。 ○次に三盤之を分つ。各々三匙。但し時の早晚に隨ふ。 ○次に普供養印明 ○次に金剛合掌

して偈を誦して曰く、上獻三寶 中報四恩 下及三途 悉皆飽滿 ○次に不動印明

根本印 ○次に賀利帝母・印明明・金剛合掌 唵、拏拏摩哩迦帝、蘇縛賀 殘食を加持し

施殘食

て明王に施す。云云。然りと雖も上分を取る。 影の如く隨逐して壽力智禪を獲得し、早く苦海を越えて無上道を證せん、賀利帝施食事因縁あり ○食了頌 飯食已訖十方充 依止十方三世雄 廻因轉業不退轉 一切衆生獲神通 ○虫食頌 我身中有八萬戶 一一各有九億虫 濟彼身命受信施 我成佛已先度汝 ○施殘食明 曩莫三曼多縛曰羅喃、但羅吒阿嚩伽替拏、摩訶魯沙拏、娑頗吒也吽但羅摩也、但羅摩也、吽但羅吒憾給御本に曰く、弘長二年八月二十一日報恩院に於て此本を傳授し奉る左大臣法眼御房書寫して予に賜ふ本なり。

○施食略作法粥の作法之に準ず。

○先づ惣食物加持三股印、眞言 唵、阿密利帝吽發吒 ○次に三盤之を分

つ。各々三匙時の早晚に隨ふ。 ○次に普供養印明常の如し ○次に合掌して偈を誦して曰く、上獻三

寶 中報四恩 下及三途 悉皆飽滿 ○次に三不動を念す、施食 ○次に念加利帝母施食

○施殘食明 曩莫、三曼多縛曰羅喃、但羅吒阿嚩伽替拏、摩訶路沙拏、娑頗吒也

吽但羅摩也、但羅摩也、吽但羅吒憾給 ○賀利帝母眞言 唵、拏拏摩哩迦帝、蘇

縛賀

○施食云云此の作法は未灌頂の人に授くるなり。  
○三股印 小指の甲を押すなり、食時の時は護身法に及ばず。  
○不動云云 獨股の印。



(一) 御衣木加持  
此の作法は大裏又  
は院中へ参り勤む  
る法なり。  
(二) 私所  
大名衆にて勤むる  
もの此通りなり。  
(三) 奉行  
奉行なり、御法事  
むる役なり、辨の勤  
むる役なり。  
(四) 華机  
檜の花  
を立つるなり。

(五) 啓白 秘鈔に  
は此の啓白なし。

〇〇(一) 御衣木加持房中作法、(二)私所  
請を蒙る事兼日或は當日、尅限(三)奉行の催しに随つて参上す、御佛始めらる所に於  
て、御所の便宜を伺ふて著座す、装束は鈍色甲の袈裟、或は五條、香爐箱之を具す、  
是れより先に佛師参して御衣木、並に布敷筵等之を儲く、其の間に於ける事は一向佛  
師の沙汰なり、御導師口入に及ぶべからざるか。(四)華机一前、火舎、花瓶一口、瀧  
水、塗香器之を居う、磬、半疊一枚、已上皆本所に之を儲けらる、兼日支度を進すべ  
し。  
〇次に佛師等導師の右方に當つて、淨筵を敷き其の上に一の御衣木を置き奉る、  
其の時導師木の本末を佛師に尋ね問ふ、木の末を以つて導師の右方に當つて之を臥せ  
置かしむ。必ず本末を認らざ末 〇次に導師座を立つて進み寄つて香爐を取つて三禮し  
て著座す。 〇次に淨三業〇次に三部被甲〇次に加持香水常の如 〇次に瀧水先づ御衣  
師主、次に自身、次に佛 〇次に獨股を取つて木を加持す。不動、降三世、 〇次に金打  
師各々三度之を瀧ぐ。 〇次に佛師を召して先づ塗香を授けて手腕に塗  
じては盡空法界一切三寶に驚かし白して言く、夫れ以れば、凡そ造立佛像の功德は成  
佛得果の要門、大悲利他の妙術なり、之に依つて巧匠に語つて以つて端嚴の尊容を刻

(一) 大日法身此  
の由本尊に由て替  
る。  
(二) 神分云云抑  
も尊像造立の場  
には御願成就の砌な  
れば冥衆定んで降  
臨影向し玉ふら  
人、爾れば則ち外  
金剛部等を始め奉  
り等、祈願は念珠  
を擲り本尊の句を  
入る。  
(三) 佛師 古は佛  
師皆剃髮なり。  
(四) 普賢云云 金  
剛合掌。

み、金銀を鋸め鋸ふて將に法身の妙體を鑿んとす、昔し于填王釋尊生身の像を刻じ、  
毘首羯磨の斧の音、上天の聽に徹す、今大法主(一)大日法身の姿を顯し給ふ、威應道交の  
新なる響き滿空の尊を驚かす、若し爾らば貴體恙く遙に金剛の慧命を保ち、先考先妣早  
く蓮臺の聖衆に列ならん、乃至法界平等利益敬て白す。 〇(二)神分・祈願等、其の詞  
要を取り略を考へて委細ならず。 〇次に(三)佛師を召して先づ塗香を授けて手腕に塗  
らしむ。 〇次に三昧耶戒印明を授く。佛師本より淨衣を著す、若し八齊戒を授くる時は印明を略  
彌々丁寧となるか、用否意に任すべ 印は(四)普賢三昧耶印、常の明は唵三摩耶薩怛饒三なり。  
〇次に佛師筆を染めて形像を繪く。 〇次に鑿槌を取つて之を始め作る。 〇次に又  
斧を取つて之を作る、此の間導師、先づ定印を結んで御衣木の中に本尊の種子、並に  
三形尊形等を觀ず、即ち本尊の印を結び眞言を誦して、其の後は遍數を限らず本尊の  
眞言之を念誦す、佛師の作法畢つて後退き立つ。 〇次に導師退下 〇次に御布施有  
り、其の後退出し了る、本説は瑜祇素怛覽序品に云く、若し曼荼羅を作り及び瑜伽の  
像を畫かんには、率都婆の印を結び明を誦して四處を加す。云云 兼闍梨云く、御衣木  
加持の本説は此の經文なり、醍醐の賢覺法眼之に同じ、仁和寺覺印闍梨、之を肯はず

○二手金剛縛  
慈覺大師の傳。

○香汁云云此  
れ灑水加持のこ  
と。

して曰く、此の文は只開眼の事なり、御衣木加持に非ず。云云 山王院母多羅に云く、經に云く、○二手金剛縛にして忍願を豎て相合はせ、二風鉤形の如く、檀・惠と禪・智と豎て合せ五峰の如し、是を羯磨印と名づけ亦三昧耶印と名づく。云云 鏝・吽・但洛・絃哩・惡、阿・阿・暗・惡・惡・非情草木悉皆成佛の印と名づく、理趣會五秘密段の如し、始めて佛菩薩開眼の時は、此の印を結び報身の密言七返、若しくは二十一返を誦す、若し又此の印を作し其の尊の眞言を誦するを古とす、秘惜すべし、非器に知らしむべからず。文 八齊戒法如向方の事、陀羅尼集經第二に云く、阿彌陀佛の像を作らば、先づ○香汁を以つて其の畫師に與へ八齊戒を授けよ、薰陸安息等の香汁を以つて之を和して皮膠を用ふることを得ず、呪師の座は壇の外面に於て西に向ふ、畫師は面を東に向ふ、呪師の前に一の香爐を著て種々の香を焼き、及び諸華を散す、夜は即ち燈を燃し、呪師阿彌陀の身印を作せ。已上の文、大略心師別抄に之を載す、私に粗之を取捨す。尋て云く今は阿彌陀に付く故に、呪師西に向ふ何ぞ通用向方の證と爲んや、故に或師の傳には四種法に隨ふ。云云

○曼荼羅供金打の事並に堂達の事

○驚覺の鈴の後、法用の前に金二打 ○次に唄○散華○對揚等了つて金一打  
○次に開眼の金二打佛眼・大日・阿闍梨の詞 ○次に表白・願文・經題等了つて、發願の金一打 ○次に發願の金一打用意 ○次に發願四弘了つて祈願の金佛號に隨つて數三許 ○次に佛名教化了つて金一打堂達祈願の金の後、座を立つて誦誦文を給ふ、呪願を乞ひ後還つて著座して金を打つなり。 ○次に說法以後、神分の金祈願等の金大阿闍梨の詞に隨つて之を打つ。 ○次に供養法三力の金一打 ○次に一字の金一打散念誦終の程、大阿闍梨の氣色を見て、之を打つ。 ○次に廻向金一打 ○次に供養法了つて金一打 ○堂達、止經の金の後、座を立つて、禮盤の下に進んで蹲踞して誦誦文を獻す、即ち還つて著座して誦誦の金等之を打つ、次に佛名教化等了つて、又座を立つて禮盤の下に進んで、蹲踞して誦誦文を給ふて呪願を乞ふ諸僧の一黨に向つて蹲居して之を乞ふ、或は立ち乍ら少損して之を乞ふ、便宜に隨ふべし。諸僧の座遠くば少し行き近くべし。 ○次に佛前に立ち向ひ、少しく誦誦文を披いて之を讀む、音を出さざるなり。 少し損して座に還つて金を打つなり、若し貴人願主の時は誦誦文數多なり、願主を別段に行ふ事有るか、大阿闍梨の命に隨つて之を用意すべし、凡そ堂達の人を行歩緩ならず、少し急

○驚覺の鈴の後、法用の前に金二打 ○次に唄○散華○對揚等了つて金一打  
○次に開眼の金二打佛眼・大日・阿闍梨の詞 ○次に表白・願文・經題等了つて、發願の金一打 ○次に發願の金一打用意 ○次に發願四弘了つて祈願の金佛號に隨つて數三許 ○次に佛名教化了つて金一打堂達祈願の金の後、座を立つて誦誦文を給ふ、呪願を乞ひ後還つて著座して金を打つなり。 ○次に說法以後、神分の金祈願等の金大阿闍梨の詞に隨つて之を打つ。 ○次に供養法三力の金一打 ○次に一字の金一打散念誦終の程、大阿闍梨の氣色を見て、之を打つ。 ○次に廻向金一打 ○次に供養法了つて金一打 ○堂達、止經の金の後、座を立つて、禮盤の下に進んで蹲踞して誦誦文を獻す、即ち還つて著座して誦誦の金等之を打つ、次に佛名教化等了つて、又座を立つて禮盤の下に進んで、蹲踞して誦誦文を給ふて呪願を乞ふ諸僧の一黨に向つて蹲居して之を乞ふ、或は立ち乍ら少損して之を乞ふ、便宜に隨ふべし。諸僧の座遠くば少し行き近くべし。 ○次に佛前に立ち向ひ、少しく誦誦文を披いて之を讀む、音を出さざるなり。 少し損して座に還つて金を打つなり、若し貴人願主の時は誦誦文數多なり、願主を別段に行ふ事有るか、大阿闍梨の命に隨つて之を用意すべし、凡そ堂達の人を行歩緩ならず、少し急

に之を勤むべし。

○護摩焚燒の義、意は中道正觀の智火を以つて煩惱業苦の株杭を燒き、六度四攝の供具を以つて心王心數の諸尊に供するなり、故に大日疏二十に云く、菩提心の火を以つて妄想的薪を燒くなり。文 大杓を定と名づけ、小杓を惠と名づく、即ち佛の三權實の二智なり、權實二智の手を以つて生死の大海を汲んで、不動明王の大馬口に入らしむ。

- 蘇油明無 ○乳木三支三 ○飯食 ○五穀食・飯・糜 ○華數論 ○丸香惣集 ○散香微細
- 百八支乳木百八 ○薪鹿強 ○新煩惱

○三平等觀、定印を結んで「觀想せよ、如來の心は是れ實相、實相は是れ智火、火は即ち如來の惠火なり、是の如來の惠火に照見の性有り、爐は是れ如來の身なり、其の中の火は是れ如來法界身中の實相の智火にして是れ心なり、爐の口は是れ如來の御口なり、是れ世間の火にも又照見の性有り、行者の心中の智光にも又照見の性有り、三火は五大所成にして相離れず、又如來の身口と、並に爐の身口と、及び行者の身口と皆五大所成なり、是の故に五大と五大と相離れず、故に三和なり、如來の三密、

此火と大例なり生燒ののれ形なり薩股に智以後初智初地見道實智は

爐の三密と、行者の三密と、三三平等にして差異ある事無し、

本に云く、弘長元年十二月二十三日、報恩院に於て御自筆の本を以て之を書寫す、師主の仰せに云く此は故僧正成賢、聊か抄出せられしものなり。云云 金剛佛子弘義 抑も今日護摩次第を重ねて之を傳受したてまつるの次で、此の書を取り出さるなり。即ち申し賜ふて日ならず之を書寫せる者なり、左大臣法眼俊譽、甲斐阿闍梨頼瑜並びに弘義兩三人同時に護摩を傳受し奉り了る皆重受なり。

○泥塔供作法

房中より佛前に至る作法常の如し。

- 壇前普禮親り八萬四千の法身妙塔に對して、一恭敬禮拜し奉ると想へ。 ○著座普禮 ○塗香 ○三密 ○淨三業 ○三部 ○被
- 甲 ○加持香水 ○加持供物枳里 ○覽字觀 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○神分 ○祈願 ○五
- 悔 ○發菩提 ○三昧耶 ○發願本尊界會、法界塔婆、本有隨緣、諸尊聖衆、乃至護持施主壽命長遠、御願圓滿々々々々 ○五大願 ○普供養 ○
- 三力 ○四無量觀 ○大金剛輪 ○地結 ○四方結 ○金剛眼 ○召罪 ○摧罪 ○業障除 ○
- 成菩提 ○道場觀 「觀想せよ、我が身の前の大地の上に阿字有り、瑠璃寶地と成る、地の上に阿鑊覽輪欠の五字有り、變じて五輪法界七寶の妙塔と成る、其の數八萬

此の法は一日七ケ日  
或は三日九時或は  
一或は三日九時或は  
此の法は一日七ケ日  
或は三日九時或は  
一或は三日九時或は

四千、其の量各々高廣、今は十二基を用ふ十二月を守り、百二十歳を保たんが爲めなり。無量無邊の莊嚴微妙なり、虚空の諸天華を雨してふら供養す、寶瓶・闍伽・塗香・花鬘・燒香・飲食・悉く皆周遍せり、摩尼を燈燭と爲す、是の如く廣大莊嚴勝計すべからず、是の如くの妙塔は皆是れ大施主所造の泥土の小塔、諸佛の加持力眞言の功德力に依つて、變じて微妙廣大の塔婆と成る、理智法身内證隨縁の諸尊聖衆皆此の中に住す、壽命長遠所願成就速疾利益獲得圓滿せしむ。七處常の如し○大虚空藏○小金剛輪○送車輅○請車輅○召請大鉤○四明○拍掌○結界馬頭○虚空網○火院○大三昧耶○闍伽○華座○振鈴○理供○事供○讚四○普供養○三力○祈願 ○禮佛南無六大所成法、界塔婆、三返 ○入我我入 妙觀察智の定印を結んで、目を閉ぢ心を澄して觀せよ、我れ並に大施主の身に阿字下體に有り、黄色方形にして地輪なり、鑲字臍輪に有り、白色圓形にして水輪なり、覽字心位に有り、赤色にして三角火輪なり、輪字眉間に有り、黒色にして半月風輪なり、欠字頂上に有り、衆色圓形にして空輪なり、我れ及び大施主の身既に五大所成遍法界の大神なり、身の前の衆多の妙塔と無二無別なり、是れ則ち法性内の五大と世界外の五大と無二無別なり、法界即ち自身、自身即ち大施主、大施主即ち法界なり、又一切衆生、乃至非情草木も毘盧遮那法界性の率都婆

に非ざること無し、是の如く五大互相に涉入し加持資助して違反あること無し、過患有ること無く、遍増有ること無く、遍減有ること無く、五力五德具足圓滿して、世間出世の所求の悉地成滿せざること無し。」良久しふして之を觀ずべし。

○本尊加持○先づ五大各別印 ○地五段・内、歸命・阿、歸命・寶、歸命・寶 ○火火輪、歸命・寶 ○風轉法輪、歸命・寶 ○空

大惠刀 ○次に同じき惣印明塔印、五輪明 ○散念誦 佛眼、大日五輪明千返、或は三百返 延命、大金、一字、

歸命・欠 ○後供養事供 ○後鈴 ○讚 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻

讀經用否時に隨ふ。 ○後供養 ○後鈴 ○讚 ○普供養 ○三力 ○祈願 ○禮佛 ○廻向 ○至心廻

向 ○解界 ○撥遣 ○三部 ○被甲 ○普禮 ○出堂 ○祈願詞 令法久住利益人天、護持大施

主左近衛大將軍殿下、壽命長遠御願圓滿の爲め等云 仰乞等、殊には六大無碍法界塔

婆本有隨縁諸尊聖衆、各々大悲の本誓を還念して所設の供具を哀感納受し、無二の信心を知見照覽して、護持大施主、御壽命長遠現世當生、一一の願念成就圓滿せしめん

が爲めに。 摩訶毘盧舍那寶號 打 南無六大無礙法界塔婆 打 三返 金剛壽命延命

菩薩 打 兩部界會諸尊聖衆 打 外金剛部金剛天等 打

此の作法は一人の施主の爲めに之を記す、仍つて常途に似ざるなり、恠しむこと莫れ恠しむこと莫れ、此の作法は是れ報恩院僧正御房の御記なり。

近衛内大臣殿御祈禱の爲めに之を記す、金剛佛子頼瑜

(一)瑜祇經に云く、内護摩は之を誡む、(二)金剛手善く聴け、諸の眞言師の爲めに廣く利益を成すことを説く、妄りに傳へて未だ具誓を成さざる者と、兼ては無智惠の人とに授與すること勿れ。

○(三)内護摩略次第 金剛合掌を頂上に安して、(四)心王心數の諸尊を禮し上ると想へ。唵、薩縛勃駄勿 外金剛縛を開いて心上に塗る。返「五分法身を磨瑩すと想へ」唵、縛曰羅獻弟虐。

定印陀に住して觀せよ、心の上に鑲字有り、甘露水を流出して菩提心の大地に灑ぎ、一切戲論の垢を淨む。次に想へ、心月輪にも恒洛字有り、如意珠と成る、變じて寶生如來と成る、其の心の上に鑲字有り、淨月輪と成る、上にも暗字有り、日輪と成る、猛焰を流出す、其の中に三十七尊住し給へり、各々に猛火を出生して一切の業惱を焚燒す、是れ即ち寶生尊を以つて壇場と爲し、己體を以つて爐形と爲し、口密を以つて爐口と爲し、(五)心智を以つて猛火と爲し、業惱を以つて爐の薪と爲す、(六)自の本誓に違する者をば諸の不詳の怨、乃至等覺の尊等に至る迄、此の本誓の智火を擲つて焚滅し

(一)瑜祇經云内護摩品なり。(二)金剛手等は誠の詞なり。(三)未だ具誓云云未灌頂者をいふ。(四)此の次第は只自行の爲に修するなり。施主等の祈禱等に行する法にあらざる、今般若寺僧正聖寶の口傳に由りて略して記し玉ふ。故に略次第といふ。(五)心王心數の内の本來具足の曼茶羅を禮す。(六)恒洛字如意珠と成る、變じて寶生如來と成る。(七)暗字は南方光菩薩の種子、是れ即ち日光菩薩なり、日光菩薩の體は寶珠なり。

て餘有ること無し、故に速疾に大悉地を獲得すと。

○(二)外縛五股印 唵、縛曰羅獻弟虐、中央吽吽吽吽、四唵唵唵唵、四吽恒洛訶哩惡、東四弱吽鏝斛、西四阿阿阿阿、北四伊伊伊伊、南四斛斛斛斛、内四吽吽吽吽、外四吽吽吽吽、四吽重。(三)虚空庫菩薩の三昧に住して大供養を修すと想へ、金剛合掌して曰く、唵。二十一返念誦す。唵、縛曰羅弟惹阿祇尼暗、百返若く數珠を摺つて祈願す。文 以上三寶院權僧正の次第

○(三)三衣法 大日如來の口密、一切貧窮修行眞言者の爲めに、三部の一切諸佛に勅して縫り置かしむる所の、淨衣平等三衣代りの(四)印・眞言に曰く 歸命・阿。印相は大日如來根本の秘印なり。阿は胎藏界五百尊、慈悲和合して、阿・縛・羅・賀・法・の五條の袈裟を縫り成し給ふなり。鏝は金剛界七百三尊、(五)慈悲忍辱の心和融して、(六)七方便の實理を以つて七條の袈裟を縫り成し給ふなり。眞言 歸命・鏝。吽は蘇悉地の三十七尊、無盡の慈心を(七)九識の機と爲して、森羅萬法の經緯と爲して、有爲有漏の弟子貧弊不幸の行者の爲めの故に、無爲無漏の三輪清淨の袈裟を縫り成し、平等常住に授け置いて、不垢不淨不增不減清淨なり、眞言 歸命吽。

(一)一切の業惱煩惱一切衆生の惡業煩惱の境なり。皆自心の觀想なり。(二)自の本誓、本誓とは菩提心なり、此の菩提心は二乘なるもの、初地已上、等覺の菩薩なり、況んや凡夫をや。(三)外縛五股印、此の印二頭を反らし立つるなり、此れ各具五智の義なり。(四)虚空庫云云、唵字を以て三十七尊に供養するなり、虚空庫は北方の金剛庫菩薩なり、此れ虚空藏と同體なり。(五)三衣法、此は蘇悉地經に説く如く三衣を離せば悉地を成ぜざるなり、故に比丘は三衣を護持するを肝要とす。(六)眞言、無所不至の印。

五 慈悲忍辱 七  
 條を慈悲衣といふ  
 七方便なり。此の  
 提分法なり。此の  
 七方便に功徳集衆  
 して之れあること  
 なり。  
 (七) 九識云云 此  
 は大慈を堅とし九  
 悲を横となし九條  
 の袈裟を出来せし  
 むるなり。  
 (二) 作壇作法 此  
 作法は護摩のみ  
 ならず、今木壇に  
 爾り、今木壇に  
 る故に泥には及ば  
 ず、爾れども護法  
 は作すなり、護法  
 なれば壇は土にて  
 塗る管の事なり。

(三) 慈救呪 是は  
 何の尊にても皆慈  
 救の呪なり。  
 (三) 概を打つ眞言  
 新しき檀にて壇の  
 干かざる節に打つ  
 たり、四方明各々  
 百反宛なり。

〇〇〇〇作壇作法 先づ行者土を取るべきの處に至る。生氣養者の方の土之を取れ、先づ不淨の土を除いて、香水を以つて之を加持して之を取れ、次に鍬の印を結んで其の地を加持すること二十一返、印は金剛外縛して二風二大を並べ立つ、眞言 唵、彌伽那縛蘇提、娑婆訶

〇次に淨き鍬を以つて地を掘り泥を作す。若し新鍬無くんば舊き鍬を洗淨して、辨事の眞言を以つて二十一返之を加持す、辨事とは馬頭の印なり、二手合掌して、二無名指二頭指二の節を内に相ひ合はせて、二大指を並べ立て口の形の如くす。唵、阿密利合都、納婆含縛吽發吒。 〇次に爐の底に五寶・五藥・五香・五穀・之を埋む、或は金銀瓷の壺に盛りて之を埋む、但し降三世忿怒王の儀軌に云く、五穀五香を須ふ、若し無くんば有るに隨つて惱みを得ること勿れ。文 火吽の軌に云く、香藥等難得ならば得るに隨つて辨せよ。文 寶穀之に準ず。次に爐を塗ること伊舍那の方より始めて順に廻つて之を塗れ。 塗泥の眞言 唵、迦羅梨摩訶迦羅梨、莎呵。塗り了る間、遍數を限らず眞言を誦すべし。 〇次に塗り了つて不動の眞言を以つて之を加持すること百八返、  
 (三) 慈救呪又は三種共に 〇次に(三)概を打つ眞言 唵、縛曰羅比里佉、莎呵。東北の角より始めの之を打つ。妙抄に曰く、一角に百返、  
 〇次に五色の糸を引く眞言 東北の角より始め、  
 唵、縛曰羅質多羅三摩耶吽。又曰く、囉覽迦摩訶。 〇阿闍梨暇有らば一一に之を修すべし。若し略を存せば著座の後、三箇の印言を以つて之を加持す。三箇の印言とは鍬の印言、馬頭の印言、大金剛輪の印言なり。委細は護摩口決の如し。 〇次に結願作法、金剛持遍禮の後、  
 (二) 神分祈願を行せず、或は之を行す。常の如し。 〇次に後供養燈明の後、或は闍伽の後、佛布施を二手に捧げ、普供養の眞言を誦し、灑淨を以つて之を加持す、灑淨漱口の傍に之を置く。或は本處に之を置く。次に(金)卷數を讀む。左の脇机に讀み畢つて卷數を杖に付け本尊の左方に之を立つ。 〇次に結願の事由。常の如し。次に破壇作法。妙抄に云く、結願了つて禮盤を起たずして之を行す。或は他人彌陀の定印を結んで、觀想せよ、壇の上に阿字有り、字變じて大壇と成る、法然道理の所作なり、而して又捨字有り、字變じて風輪と成る、即ち吹き破ると思へ、所謂成者は必ず壞するなり、即ち偈を誦して曰く、  
 諸法從緣生 如來說是因 是法隨緣滅 是大沙門說。 〇次に箸を以て爐の縁を引き破る。或は獨股と云云 八字三昧經に云く、壇を塗らんと欲する時は、八字文殊の眞

(二) 佛布施 初の  
 灑淨と漱口との間  
 に置くを用ふ。

國譯作法集



(六) 敬愛法 煩悩  
惡業皆滅して生佛  
不二怨親冥會して  
互相に敬愛するな  
り。西に向ふは入  
日の色は敬愛なり  
(七) 蓮花箭 箭の  
光に蓮花のツボミ  
あるなり。  
(八) 種子 咩 爐底  
に。獨股或は種子な  
り。

(三) 調伏法 煩悩  
已に滅すれば怨念  
邪氣悉く消滅す。  
南に向ふは南は火  
大極陽の方三角火  
輪に相應するな  
り。

(四) 黒色 忿怒の  
色なり。  
(五) 本書次第 各  
々の章法の奥に之  
れあることなり。  
(六) 息災云云 息  
災護摩は通じて用  
ふるなり。

持物 團丸、米の粉を赤く染めて之を丸む、  
心蓮華臺に至つて無量の蓮花箭雲海と成る。一一の毛孔より流出して、虚空法界諸  
佛菩薩に供養す、便ち還へり來つて我れ及び施主の、彼此等の憎惡隔別厭離菩提の心  
を射拂ひ、彼此一體和合して、互に無二敬愛の心を起さしむ。  
○薪花 ○乳木  
合管木、桑木、穀木、花木、  
長さ十指、或は四指  
○本尊 色 ○火天 上同 ○衣服 上同 一切餘物の色皆赤色なり。○入護  
摩の時 先づ大日 ○次に無量壽 ○次に本尊等の印 ○種子 咩 ○芥子加持 馬  
△調伏法 南に向つて  
○藥種、子 鐵末、荆、酢、鹽 ○相應の句 阿毘舍盧迦、  
咩發吒 ○加持物 黒芥子、供花、薜木。○加持物觀念 此の芥子供、本尊の御口より  
入つて心蓮華臺に至つて無量の利劍雲海と成る、一一の毛孔より流出して、盡虚空法  
界の一切の忿怒尊に供養す、還へり來つて我れ及び施主を加持護念して、厭媚呪咀、  
四大鬼業、惡靈邪氣の病を摧破し消滅して、安穩快樂を得せしむ。○薪木 ○乳木  
恒山木、桃木、榆木、毒木、  
長さ八指、兩頭三角形なり。 ○本尊 忿怒形 ○火天 忿怒形 ○衣服 黒 一切餘物色皆黒  
色なり。 ○入護摩の時、 先づ大日、次に不空成就印等 右梗概を注すのみ、  
委くは(五)本書次第等に在るべし。(六)息災の如し。五寶、五香、五穀、等息災に通用す

(二) 芥子加持 此  
の次に此に三角形  
爐の圖を出すも今  
は之を略す。  
(三) 弱 弱とは弱  
・咩・解の弱字  
なり。  
(四) 彼の人 施主  
の家人なり。

(五) 土供養 甚だ  
略法なり。在家杯  
には是にて可なり  
と。  
(六) 驚發地神 偈  
胎藏の次第の通り  
なり。  
(七) 唵保欠 廿一  
反誦して七處加持  
(八) 姓丸 昔は公  
家方には丸名を付  
けし故なり。

(四) 持寶院 勝賢

(五) 土供養 甚だ  
略法なり。在家杯  
には是にて可なり  
と。  
(六) 驚發地神 偈  
胎藏の次第の通り  
なり。  
(七) 唵保欠 廿一  
反誦して七處加持  
(八) 姓丸 昔は公  
家方には丸名を付  
けし故なり。

○種子覽字 ○芥子加持 降三  
べきなり。  
○鈎召の觀 (三)弱の上に於て(三)彼の人名を加へて即ち想へ、本尊の心外遍身より無  
量の金剛鈎を流出して、盡虚空一切の佛賢聖に供養す。即ち此の鈎は三惡趣の有情を  
召して人天の善所に安置し、即ち此の衆の鈎を以つて彼の人心に入れ、屈婁草を召來  
して、本尊の口より入つて心蓮華臺に至つて、金剛甲冑と成る。一一の毛孔より甲冑  
雲海を流出して、盡虚空界の諸佛・菩薩・綠覺・聲聞・及び一切世天等に供養す、而も彼  
の自他をして金剛の壽命を持たしむ。本尊天の甘露を流出し、自他の五體威光色力を  
増益す。 御本に云く、貞應二年四月二十五日書寫し了る、寫本は(四)持寶院僧正御房  
の所持 云云 同五月七日、三寶院經藏の勝俱胝御本を以て交點し畢る。

○先づ供物加持 小三股の印、棋里 棋  
二十一返。 ○次に地天印 眞言 鉢の印、唵、畢哩體  
抽擲す。 ○次に地神勸請の頌、 金剛合掌 唵、沒駄每底里、縛日羅囉乞叉給  
二十 一返 ○次に如來拳印 (七)唵保欠 二十 當年月日(八)姓丸居住の由祈願す。 ○次



(一)散供 此れ神  
供の通りなり。  
(二)次に有爲法云  
云 其れ金剛經の  
偈なり。  
(三)大日寶號 南  
無大日寶號。

に(一)散供○次に三禮○次に如來唄○次に表白○次に發願○次に四弘○次に心經卷三○次  
に祈願○次に有爲法の文を誦して空觀に入るべし。○次に地天真言返○次に如來慈  
護真言返唵、母駄摩訶妹奈羅阿乞叉給○次に(三)大日寶號返○次に釋迦寶號返○次に地  
藏寶號返○次に觀音寶號返○次に地天寶號返○次に祈願○次に三力○次に廻向○次に  
撥遣 唵、縛日羅保乞灑穆 ○勸請地神偈 汝天親護者 於諸佛道師 修行殊  
勝願 淨地波羅蜜 如破魔軍衆 釋師子救世 我亦降伏魔 我盡曼荼羅 已上土公  
供作法貞觀寺僧正の御傳。

(四)行法中間云云  
此の法は行法中間  
に用事又は二便の  
爲め立つ時の作法  
爲五股外五股  
印、咩三反唱へて  
立座す。念珠云云  
念珠して居る意  
者念誦して居る  
なり。  
(五)定印云云 彌  
陀を幾返も唱へ心  
字を幾返も唱へ心  
に浮ぶ時に字義を  
觀するなり。  
(六)觀ぜよ云云  
此の觀は初心已達  
に通ず。

○(四)行法中間立座作法 行法の間要事に依つて立座の時は、(五)五股の印を結んで咩  
字を誦して、然して後却去。以上作法。 或る傳に曰く、念誦の時要事有つて座を立  
ち出づる時には、(六)念珠を蟠て壇上に安き出づべし。云云  
○(五)字輪觀大 端身正坐して、(七)定印を結んで法界體性三昧に入つて、(八)觀ぜよ、我  
が心月輪の上に阿・縛・羅・訶・佉の五字有り、右に旋つて住す。而も順逆に五字を誦し  
て、次に其の字義を順逆に觀じ廻らせ。即ち阿字諸法本不生なり、阿字諸法本不生な  
るが故に縛字自性離言說なり、縛字自性離言說なるが故に羅字清淨不可得なり、羅字

(一)師主 此の典  
書は意深の奥書な  
り。

(二)右邊云云 無  
言行道也。  
(三)正流 西院流  
也。高座加持此  
も仁和に准じて  
醍醐にも勸む。  
(四)大法伴云云  
醍醐には實名を先  
にし官名を後にす  
澤方は官名を先に  
し官名を後にす。  
(五)小壇 十二天  
聖天壇等。

清淨不可得なるが故に訶字因業不可得なり、訶字因業不可得なるが故に佉字等空不可  
得なり。是を順觀 佉字等空不可得なるが故に訶字因業不可得なり、訶字因業不可得な  
るが故に羅字清淨不可得なり、羅字清淨不可得なるが故に縛字自性離言說なり、縛字  
自性離言說なるが故に阿字諸法本不生不可得なり、是を逆觀 遂に阿字本不生の理に住  
して言妄慮絶す、是れを無分別觀と名づく。此の觀に住し了つて乃ち定を出づべし。  
(一)師主仰に云く、此の字輪觀は、諸尊の法之を行ずる時自ら用ふ、五大の字輪とは、  
金剛界の如くに之を觀念せしむべしと雖も、廣莫なるに依つて聊か初心行者の爲め  
に、故僧正此の如く略抄せらる。文

- 醍醐仁和の相違
- 灌頂三摩耶戒上堂 醍醐は(二)右邊、仁和は左邊、但  
近代は皆醍醐も左邊、云云 ○無言行道 醍醐は小金剛輪眞言、仁和は  
降三世眞言、(三)正流は無言。
- (四)高座加持 醍醐には之を讀む、但し近代は  
醍醐は讀まず、仁和は之を讀む、但し近代は  
醍醐は讀まず、權僧正は之を用ふ。 ○(五)大法伴僧張文 醍醐には名を先に書し官を次に  
し此事然らず、權僧正は之を用ふ。 ○(六)如金剛  
幢及普賢 ○大法の(七)小壇に仁和は火舎の蓋、醍醐  
は仁、和、之を置く。 ○大法の時法 切り燈臺、仁和は大  
阿闍梨讀經の燈臺支度に之を出す、醍醐は切り燈臺、伴僧二十人ばかりなり、大阿闍

此の作法は一日の  
作法なり然れども  
又は連日にも修す  
法は承元四年十二  
月一日宣陽院門日  
の御製承久三年  
の御製承久三年  
に意深手代りに御  
勤むるなり。云  
云。驚し曰して香  
呂を置く。云  
云。禪定仙院御  
剃髮の故に云ふ  
若し御髮ある時は  
太上と云ふ。

梨は大壇の燈臺を讀經の時之を取り寄するか。○鎮壇の輪鑷醍醐は八なり、仁和は一つ之を用ふ略儀か。

○仁和には供養供の時、左の袖の内に於て結印、醍醐は右の袖の内に於て之を結ぶ。御本に云く、延慶元年十月二十九日夜、遍智院僧正の自筆の御本を賜はりて馳筆し

了る。眞立

○孔雀經御讀經一日の作法なり。

○先づ諸僧參會。○次に道師經の上卷を持して佛前に進み、香爐を取つて三禮して

香爐を置く。○登禮盤○次に金打○次に唄。云○次に散花毘盧○對揚無○次に金

打○次に表白 敬んで眞言教主大日如來、兩部界會諸尊聖衆、殊に別しては、本尊

聖者三世佛母、大孔雀明王摩訶摩曳利耶、甚深妙典八萬十二法界會等流權實正教、惣

じては盡空法界一切三寶の境界に驚し白して言さく、今娑婆世界南瞻部州大日本

國、禪定仙院一心の寂慮を抽て、三業の袖襟を專にし、六口の淨侶を屈して三世佛

母の妙典を轉讀しします事あり、御願の旨趣如何なれば、夫れ以れば轉禍爲福の

計秘密眞言の威力には如かず、息災延命の道は専ら孔雀明王の本誓に在り、之に依つ

て日蝕の厄難を除き天變の災天を拂はんが爲めに、仙洞の佛殿ウチハラを擺つて佛母の妙典を

轉讀し給ふ所なり。今此の經王は種智還年の良藥不老不知の秘方なり、七佛慈氏は同

じく神呪を説いて受持の人を護り、四大天王は共に擁護を致して讀誦の所にたす。

是を以つて晝夜常安と説く、誓多林の金口豈に朽つること有らんや、壽命百年と演べ

給ふ、狐菌の誠諦實に憑しきかな。若し爾らば、禪定仙院玉體堅固にして金石に相ひ同

じく、寶壽長遠にして松柏に異ならず。凡そ院内安穩諸人快樂、乃至法界平等利益。

謹んで發願す。○發願經一打。至心發願 歸命轉讀 大孔雀經王 功德威

力 天衆地類 倍增法樂 倍增威光 護持仙院 消除不淨 不祥災難 天變恠異 未

然解脫 玉體安穩 增長寶壽 無邊御願 決定圓滿 院内安穩 諸人快樂 及以法界

平等利益 ○次に五大願○次に一切諷誦打○次に衆僧讀經導師暫く讀 ○次に卷數

を滿して後卷數を書き、正文は楮くわいに付いて佛の左右に立て、案文は脇机に之を置く○

次に導師佛前に進む、今度は經の下卷を持す。○次に禮盤に著す、小時讀經○次に金

一打、是れ止經の爲めなり。 ○次に卷數の案を讀む○次に香爐を取つて補闕分の由を申して曰く、

五口の僧綱大法師等、殊に精誠を致し經王を轉讀すと雖も、凡夫具縛の身なれば文字

章句謬多く、餘念散亂相ひ交はらむか、依つて如法如理の轉讀と成つて、御願決定成



天の言返 ○次に入護摩、火天段等次第に之を行す。 ○次に世天段、撥遣、三股を本の如く金剛盤の上に置く。 ○次に獨股を取つて下禮盤 ○次に前の如く大壇の方に向つて三度禮したる ○次に本座に著く。

○(一)呪願通用

三寶德海 不可思議 恒沙劫中 讚揚難盡 ○(二)誦經呪願 誦經威力 摩訶施主

消除不詳 消除、災難 心中所願 決定成就 檀波羅蜜 具足圓滿 ○過去の爲めの

呪願 誦經威力 過去幽靈 往生極樂 檀波羅蜜 具足圓滿

○(三)金口 ○登禮盤 ○三禮 ○如來唄 ○表白 ○發願 ○四弘 ○次に金口偈。

○(四)泥塔供養作法

○著座・普禮等常の如し ○塗香 ○三密 ○淨三業 ○三部 ○被甲護身 ○加持香水 ○灑淨 ○加持

供物 ○覽字觀等常の如し ○開眼 ○啓白 ○神分 ○五悔 ○發願 ○五大願 ○普供、三力 ○地

結 ○塔界

○道場觀 如來 觀想せよ、我身の前の大地の上に阿字有り 瑠璃の寶地と成る、地の

上に七寶の妙塔有り、其の數衆多にして其の最高廣なり、無量無邊の莊嚴微妙なり、

(一)呪願 最初の一に息災等四種の通用といふ。故に(二)誦經呪願 誦經師の呪願。誦經を誦するなり。(三)金口 金口の偈を誦するなり。謂く自我の偈、世尊偈、又は法身偈等書寫して供養するなり。(四)泥塔供養云云 此の作法は龜なるも意深の所據の故に其の儘に入れ置くなり。

(一)供養明 大虛空藏。(二)迎請 大鐘石なり。(三)塔印明 外五股印。

虚空の諸天花を雨らして供養す、寶瓶闍伽塗香華鬘燒香飲食悉く皆周遍し摩尼を燈とす、是の如くの廣大の莊嚴勝計すべからず、是の如くの妙塔は皆是れ我が所造の泥土の小塔なり、諸佛の加持力と眞言の功德力とに依つて、變じて微妙廣大の塔婆と成る。

七處 ○(一)供養明 ○送車 ○請車 ○(二)迎請 ○馬頭 ○網界 ○火院 ○闍伽 ○華座 ○振鈴 ○五供

○四智 ○普供養、三力等 ○入我我入 ○(三)塔印明 ○念誦 佛眼、大日、一字。 ○後供 ○廻向 ○撥遣

○又の作法 ○先づ著座 ○三禮 ○如來唄 ○開眼の詞に曰く、造立供養し給へ

り、大日如來法身の三摩耶印形法身泥塔、本有隨緣、五眼五輪の功德具足せしめ奉らんが爲めに。 佛眼の眞言 五智の功德を圓滿せしめ奉らんが爲めに。 大日の眞

言 ○表白 ○神分 ○發願 ○五大願 ○念誦 佛眼、大日、一字。 ○佛名略寶號 ○供養眞言 ○六種

廻向 ○表白 ○發願 ○四弘 ○次に金口偈。

○(四)修學士代 眞言師沙汰あるべき事

○(五)自相 眞言の自相とは、密宗の根本なり、先づ祖師の正流を尋ね相承の口決を

面受すべし。其の上に廣く本書抄物を勘見して所傳を潤色すべし。十八道・兩界護摩・

灌頂結緣、大法・小法・並に諸の作法等、御衣木加持 各々玉を瑩き鏡を懸けよ。 ○教相

等なり。

(四)自相 成賢の云く事と自と普通ずる借音なり。

宗義の教相は、源と大日經の疏、並に大師の御作等より出づ。又諸師の製作多く之れ在り、眞言の義理を探つて専ら大師の意趣に叶はゞ、滅罪生善紹隆密教の要、何事か之に如かんや。○目錄 正教の目錄は、教網の大綱求道の指南なり。貞元の録、八家の秘録、各別の録、所學の録等部類を分ち、時代の事を辨へよ。稽古の本と學道の要なり。中に就いて道具法門佛像舍利等、第第家家の有無彼此の多少分明に之を覺悟すべし、又た譯者請來分明ならざる本書等之れ多し、眞偽未決魚魯混合せり、必ず先達に遇つて不審を聞くべし。又た成尋育然等の新度の書籍目錄之れ有り、委しく之を檢知して眞偽を辨すべきなり。○血脉 密宗の習ひ血脉相承を以つて其の本と爲す、師資の血脉無くんば誰か之を信受すべけんや。大師の付法傳、海雲造玄、並に我朝家家の血脉、東寺・天臺・小野・廣澤・等分明に覺悟すべし。就中然るべき自他宗の先德達の稟承、德行等覺悟せずんば、遺恨の事なり。○支度卷數 末代の眞言師は、先德の支度卷數を以つて規模と爲すべし。但し書き様にも古今相違の事有り之を分別すべきなり。又一法に於て修法・護摩・(二)花水供・各別なり、能く存知すべし。又大法の支度並に用途の支配等、兼て存知せずして、期に臨み迷惑せば甚だ不便の事なり。

(二)花水供 聖天に  
限るにあらざる  
護摩にあらざる  
法はみな花水供な  
り。

り。○日記先例 修法する所の先例御願の旨趣等、國史並に家家の日記普く之を勘ふべし。後代の所修は先例を守るべきが故なり。兼て先代所修の吉凶法驗勸賞等の有無、人人の失亂等尤も之を尋知すべし。前車の覆へるは後車の誠なり。且は賢を見て等しからんと欲ふが故なり。○圖像 圖像の沙汰は、事廣博にして輒く之を極め難し。八家請來の圖像を根本と爲す。先德の證本、並に唐本の佛像等之を集むべし。就中、諸曼荼羅に於ては、委しく本文を勘へ現圖に比較すべし。兼て所所の靈驗、所所の本佛等の由來之を尋知すべし、興有る事はれ多し。○香藥 香藥は悉地成就の相應物なり、功能勝利尤も之を知るべし。香藥の梵名、四種法の相應尤も分別すべし。又香藥の和名は醫家を訪ねて之を沙汰すべし。○梵字悉曇 梵字は是れ諸佛の本源密藏の源底なり。故に先德云く、悉曇を知らざる人は半眞言師なり。云云 此道已に斷絶せり、密示の凌遲何事か之に如かんや。悲しむべし。○聲明法則 密宗の習ひは内德に有りと雖も外儀を闕けば遺恨の事なり、聲明法則尤も具足すべし。内外相ひ備ふるは法成就の相なり、就中御前の修法等の時には外儀尤も大切なり、見聞仰信の因縁なり、能く習學すべきのみ。○持戒行業 縦ひ智博覽の人有りと雖も、戒行

無くんば冥の加護無く效驗無し。故に大師曰く、若し病人に對して方經を披談するに、救療に由し無し。文 鎮國利民の本、斷惑證理の要、戒行に如くべからざる者か。故に戒惠兼備智行具足、尤も人師にして國寶たるべし。已上の條條、初心の人

の爲めに思出に隨つて之を記す。東寺沙門 成賢

建保六年五月十八日遍智院に於て之を書す。

○先づ病人を加持する時、我が

身本尊の性となる、謂く、想へ我身本來清淨にして世尊の性を具す。又、觀ぜよ、

自心の月輪の上に本尊の種子有り、光明遍く照曜して自身本尊と成る。又、觀ぜよ、

羅字有りと、病人の心月輪の上に於て火焰熾然にして、病人の罪障病患を焚燒すと觀

じ畢る。但し本尊の身と成つて本尊の印を用ふ。契相を以つて五處を印す。額、右の肩、左の肩、心、

又火炎發生の印、法界生の印を用ふ。眞言を誦して病者の身上に投ぐ、次に本尊の印を作し

て心に當て、金剛眼を以つて而も病人を觀ぜよ。先づ右方次に左方、是の如く見已つて

本尊の眞言を誦し、印を以つて左に轉ずること三匝。次に印を以つて靈魂を招く。

同印明を用ふ、若し夜病人を見れば、先づ左方次に右方、次に下次に上なり、是の如く

(二) 驗者作法 此の作法秘鈔に出ると全く同じ、此れ慈覺の傳なり、此れ(三) 又、觀ぜよ云云 觀文は定印に住し觀ずること

(三) 法界生云云 文字三返誦して病人の身上に投ぐると觀ぜよ (四) 金剛眼 忿怒眼なり (五) 左に轉ずる 辟除なり

(二) 字あり 文字觀なり

(三) 囉俱吒座 跏趺座なり

(三) 善惡云云 是の如く念誦し了りて病人に心持し如何と問ふ、若し惡すと云はば、搬遣するなり (四) 次に自身云云 此れ惡鬼去る時、口惜しく思ふて行者を憐れし故なり (五) 外五股 五股の印なり

見已つて印を轉ずること亦前の如し、又眼に置く(二)字あり眞言印も亦前の如し、

○次に行者發願して曰く、至心發願 唯願大日 本尊聖者 三部五部 兩部界會

諸尊聖衆 四大八大 教令輪身 諸大明王 外金剛部 威德天等 一切三寶 哀愍於

我 佛法靈驗 決定現前 於此病者 消除苦患 令得安穩 若有勢神 作惱亂者 我

以法施 令離業道 若靈鬼者 我降伏彼 令入正見 以法水味 令得飽滿 我爲佛使

作阿尾捨 護法天等 助我威力 同心加護 是以爲善 爲佛種子 非我所能 是佛

法力 ○次に五大願 ○次に般若心經 ○次に座所を改む、囉俱吒座なり、坐し已つて

瞋怒の眼を以つて坐の眞言を誦す。唵、句盧吒、濕哩瑟底的反奚、の反吽發吒 ○

次に念珠を持ち、並に金剛杵を執つて聲を擧げて呪本尊を誦す。先づ本尊の名號を稱

して後に呪を誦す、吽發吒の字を加ふ。若し男を加持せば杵を以つて右に轉ぜよ、若し女を加持せば左に轉ぜよ、吽發吒の字を出す時、摧破の勢を作す。

○次に善惡を問ひて後に撥遣せよ。本尊の印を用ふ、左轉 而して後に彈指せよ、藥車藥車、

莎呵 ○次に自身護身結界のみ。或説に云く、五大尊の惣印(五)外五股の印なりを以つて

慈悲呪を誦じて、呪を持って行者阿尾捨加持秘密の呪法を作す、今聖意を蒙つて云

く、夫れ道の所趣を知らずして、妄に作障の靈鬼を縛せば、後に必ず破損を蒙る、是

の故に自の呪力を恃んで誤つて他を破すること勿れ、所以へに解結の時は鬼の爲めに取らる、或は臨終の時は心寂靜ならず、佛法は慈悲を以つて本と爲す故に。若し顯宗に依らば四弘願を發し、若し密宗に依らば五大願を發して其の所誓と爲す。既に衆生無邊誓願度等と云ふ、豈に一人を愍んで他の類を捨てんや。恣に瞋害惡厭の心を發すは是れ慈悲に非らず、此の人永く佛道に背く者なり、是の故に行者若し救護の請を受けて、阿尾捨の法を作さんと欲は、是の念を作すべし、我れ宿福に由つて佛子と作る、佛の聖意に隨て化他を以つて我所行と爲す、唯願くは秘密一切の聖業我が呪力を助け給へ。然る所以へは、今是の病者の病を除き安きを得ば、又靈鬼をして業を除き慈みを得せしむ。即ち應呵して云く、汝執心をして猶惡道に廻ぐり、汝が苦を以つて更に他人を燒ます、彌々苦患を増して何の益有らん、何れの時か脱を得ん。夫れ人を安すれば亦我も安し、菩薩は他の苦に代つて自の樂を増す。汝理に迷へり我れ纔に其の端を悟る。大苦の源は他を燒すに依るのみ。我今汝を責む、但し是れ一人の病者を愍んで汝靈鬼を厭ふに非らず。然れば則ち我れ佛法の威力を以つて、此の病者をして汝が靈鬼と共に安穩を得、即ち正見に入れしむ。乃至一切亦復た是の如し、行者是の如

(二) 童身云云 四  
明の明を縛入する  
なり。

(三) 問訊せよ 童  
身に對して、何も  
の、障り何故に惱  
すや又何の怨ぞや  
と問訊するなり。

く誓ひ已つて、先徳の作法に依つて儀則に違せず。若し作法せずんば魔衆便を得ん、是の故に慎んで此の如くすべし、行者先づ未開の女及び童男を呼んで隨つて一人を用ふ、彼をして手を洗ひ口を漱いで内外清淨ならしむ。上の如く香水を頂に灑いで後行者、彼の五輪清淨の儀を觀じ、印を結び大日の五字眞言を誦して、彼の童の頂を印して堅固ならしめよ。次に守護者を勸請して童の身を招き入れ、四字の明を用ふ、謂、善惡弱、昨、護解なり。 死生等を説かしむ、而して後更に本尊の明を誦す。先づ病を作す靈鬼を呼んで(二)童身に縛入せよ、若し身に入らば童即ち舉動す、若しくは不實、若しくは實、若しくは魔、若しくは靈其相各々異なり、蘇磨呼童子經を視るべし、若し實に移れば病者微く安し、爾る時に印を以つて病人を加持して堅固ならしめ已つて、而して後に童に對つて種種に(三)問訊せよ。覆護人身の眞言 唵、度比度比、迦耶度比、鉢羅耶縛里寧、莎訶。守護者及び靈鬼に對して問訊の時は、行者の左右眼に摩吒の二字を觀じ置き、日月輪と爲つて大光明を放つ。摩字より火光を放つて彼をして業障の執心を燒かしめ、吒字より清淨の光を出して彼をして法樂を得せしむ。其の印相は二手金剛拳にして、各々腰の側に安す。眞言 唵、縛日羅<sub>合</sub>地<sub>合</sub>里<sub>合</sub>瑟<sub>合</sub>致<sub>合</sub>摩<sub>合</sub>吒。病者の死生を知る法なり、或

(二)自ら護身云云  
病家に行く時は護  
身法して不動なり  
とも降三世なりと  
も自身結界して至  
るを宜しとす。  
(三)得て云云此  
は早く歸れといふ  
こと。

(三)入堂呼字云云  
門前の作法なり  
金剛薩埵の三摩地  
唱ふるに呼字三反

る口傳に云く、諸の使來り迎ふる時、右の手を以つて頂に擧げ面を掩ふは是れ不死の相  
なり、左の手を以つて掩ふは是れ必死の相なり。若し此の相を見ざれば、呪を誦して出  
行するに、多くは惡獸惡禽裸形の人不善の者に遇はんは、必死の相なり。若し好人の類  
に遇はば不死の相なり。若し是の相を見ずんば病者の所に往くに、若し左を著けて臥  
せば必死の相なり。若し右に臥さば不死の相なり。此れ等は皆呪を誦して其の相を見  
る。文 集經の八に云く、病人の家の使ひ、乃至若し其の面を東南西北に向はば此の病瘥  
えず、亦吉きことを得ず、呪師去くこと莫れ、若し貴人に喚ばれ去かざるを得ざれば、  
自ら護身を作し彼所に到つて即ち還れ、<sup>(三)</sup>得て留らざれ、若し使左の手を擧げて數々面  
を摩づれば呪師去くこと莫れ、去かば吉からず、貴人賤人同じく前法の如し。」略抄  
〇護諸童子供  
先づ清淨の處に於て供物等を辨備す。 五穀の粥蘇蜜を入る、 大土器二杯、小土器十五  
杯に各々之を盛る、洗米、大土器二杯、小土器十五杯各々之を盛る、菓子二杯、小土  
餅二杯同幣帛二棒、各々銀錢 以上の供物、壇上に新薦一枚を敷き其の上に次第に之  
を置け。 〇次に行者沐浴清淨にして新淨の衣を着て、<sup>(三)</sup>入堂呼字の印等。常の 〇

(二)各々種子十  
五童子各眞言あり  
其の眞言の初の字  
種なり。  
(三)天王 梵天王  
(三)智拳印 如來  
(三)勸請眞言の  
末に梅檀乾闥婆王  
大梵天王を召する  
なり。

次に佛前に至つて合掌禮佛大日、釋迦、不動、大梵 〇次に著座 塗香・淨三業・三部。  
被甲等。 〇次に壇を加持す。三股印 積里等 〇次に加持香水 〇次に加持供物施無畏の印。 〇次  
に覽字觀 〇次に淨地 〇淨身 〇次に啓白 〇次に神分 〇五悔 〇次に發願 至心發願 大梵  
天王 梅檀乾闥婆王 十五鬼神 彌迦醜鬼 彌迦王鬼 鶯駝鬼 阿波悉摩羅鬼 牟致  
迦鬼 摩致迦鬼 閻彌迦鬼 迦彌尼鬼 利波捉鬼 富多那鬼 曼荼羅提鬼 舍究尼鬼  
健吒波尼鬼 目佉曼茶鬼 藍波鬼 來降於此 所設供物 哀愍納受 護持女大施主  
守護嬰兒 增長福壽 恒受快樂 決定圓滿 殿內安穩 諸人快樂 及以法界 平等  
利益。 〇次に五大願 〇次に三力 〇次に三部 〇次に被甲 〇地結 〇墻界。  
〇道場觀 想へ、心の前に阿字有り七寶莊嚴の宮殿と成る、繒綵網等を垂れたり、  
其の中に二の荷葉座有り、一の座の上に曼字三摩 三摩 三摩あり、大梵天と成る、一の座の上に  
字有り、三昧耶形異本 梅檀乾闥婆王と成る、眷屬十五鬼神圍繞周匝せり。<sup>(二)</sup>各々種子有  
り之を觀ぜよ。  
天王並に鬼神の座の料に新薦一枚を敷き、其の上にて觀を作す。  
〇次に淨上變智拳印 眞言 唵歩欠。 〇次に勸請大鈎 乾闥婆王之を召請す、大梵天  
王なり。 〇次に十五鬼神右の手、空火捻して 普集の眞言 唵、補保里迦里但里恒他識



多耶 ○次に四明○次に閻伽○次に獻座私に曰く、荷葉座か ○塗香印常の 唵、微葉羅微葉羅、  
 吽泮吒 ○華 唵、部哩惹縛蘭多詣、娑婆賀。 ○燒言は塗の ○飲 唵、縛曰里二  
 尾縛曰藍合二 娑婆賀 ○燈 唵、尾縛栗多合二 路者曩、吽發吒。 唵、蘇嚕婆耶他葉多  
 耶。 唵、蘇嚕蘇嚕鉢羅蘇盧蘇盧、莎呵。 ○飽滿印呪に置いて仰く。右の膝 南摩、三曼多勃駄  
 南、唵訶利訶利藥乞及尾爾夜達履比旨比旨羅吒羅吒葉羅藍羅藍訶散難微訶散難、弱  
 吽鑊斛。 ○次に三歸を授く印呪、八葉印、唵、三昧耶薩怛梵 ○次に讚金唵、比旨比  
 旨、南無率都帝、莎呵 ○次に普供養○三力 普供養大日如來 釋迦世尊 延命菩  
 薩 不動明王 大梵天王 栴檀乾闥婆王 十五神鬼 護持女大施主 守護嬰兒 身體  
 安穩 增長福壽 恒受快樂 決定圓滿 ○次に禮佛 南無大日如來 南無釋迦牟  
 尼佛 南無延命菩薩 南無不動明王 南無大梵天王 南無栴檀乾闥婆王諸大眷屬  
 ○次に念誦(二)施轉の明無し、佛眼・大日・釋迦種智・延命・梵天・結練・乾闥婆王・心經三卷・一字。 ○次に諸供養等 香花 ○次に讚先の  
 ○次に普供養三力偈 普供養大日如來 釋迦世尊 延命菩薩 不動明王 大梵天王  
 栴檀乾闥婆王 十五鬼神 護持女大施主 守護嬰兒 增長福壽 恒受快樂 決定圓滿。  
 南無寶勝如來 南無離怖畏如來 南無廣博身如來 南無甘露王如來 南無妙

(二)施轉云云 正  
 念誦なき故に。

(二)懺謝 金剛合

(三)十五童子供作法  
 此の作法と前  
 作法と見合せて行  
 ずるを宜しとす。  
 (三)衣服嚴麗云云  
 此の形像を印刻し  
 て諸人に施し玉ふ  
 こと。

色身如來 南無多寶如來 南無無量壽如來  
 ○次に懺謝の偈所設供具 可咲齋惡 冥道神等 布施歡喜 ○次に發菩提心印呪合 唵、胃地唧多、母怛跋  
 娜夜弭 ○次に廻向偈 應隨作神變 隨所利衆生 利益諸群生 乃至令一切 隨  
 恩願生起 願以此功德等 ○次に撥遣彈指 三度 眞言。  
 ○(三)十五童子供作法  
 壇の上に惡字有り、變じて宮殿と成る、其の中に亦惡字有り、變じて荷葉座と成  
 る、座の上に吽字有り變じて筵策と成る、筵策變じて栴檀乾達婆王と成る、(三)衣服嚴  
 麗にして身に甲冑を著す、左の手は左の膝を押し、右の手には三戟の鋒を持す、前後  
 左右に十五鬼神及び衆多の眷屬有り、前後に圍繞せり。此の如く觀じ了つて七處を加持  
 す。 ○乾闥婆王印内縛して二無名を 立て著る勿れ。 眞言に曰く 歸命尾戍駄、薩縛羅縛引ケイニ 係爾、娑縛  
 訶。 ○羅刹衆印 金剛合掌 眞言に曰く 歸命、落乞叉合、二細吽藥合、二蘇婆賀  
 ○諸藥又印外縛、二無名を立て合はせ二頭共に 立て、相ひ鉤して著くる勿れ。 眞言に曰く 歸命、藥乞叉濕縛羅、娑縛賀  
 ○禮佛不動・栴檀乾達婆王・十 五童子・之を禮すべし。 ○散念誦佛、大、釋迦、光明、不動、大梵王、乾達婆、 童子經、結練呪、羅刹、藥叉、大、一、法施。 ○後供  
 養等 童子經書寫供養の時、散念誦の後讀經。 ○次に眞言を誦して結練○次に後

(一)壇圖 圖あれども今此を略す。  
(二)童子經云云此法薄雲紙に出る通りなり。

供養○次に封經し畢る ○(一)壇圖十五童子、佛供圖師説なり。

○(二)童子經書寫供養作法

○先づ支度 注進 童子經書寫供養支度の事

合 五色糸各三尺 名香沈白 壇一面二尺三寸 燈臺二 脇机前 半疊一枚 薦一枚 米一 油二升 五穀各一色紙三枚 硯一枚 墨一 筆一 小刀柄一枚 折紙二 淨衣一領

右注進件の如し 年月日 某

○相應日白月八日、十五日、若しくは他の吉日。七卷鈔に曰く、白黒月、八日、十五日。云云。

○曇朝に花水を酌んで則ち加持す、除垢の明

供料等に用ふ。○次に手を洗ひ口を漱いで法衣を整へ、三部・護身等○次に東方に向

つて立て梅檀乾達婆の號を唱ふること百返。○次に十五鬼の名を唱ふること各七

返。○次に小兒の生氣ウの方の泉流水或は井を汲んで硯水と爲す、未明に之を取硯に水を入れて

加持す、除垢の印小兒生氣の方の、桑の木の東に差したる枝を取つて、硯の上に置いて之

を用ふ。或説には、細に刻み硯水に入るべし。一歳の生氣の方は東方なり、或説に曰く、墨再び磨らず、

筆再び取る可からず、(三)一座に之を書す。文 ○次に筆を取て、覽・鏝・を誦して加持す。常の如し、或は之を用ひず。 ○次に(五)寫經、或は白米一斗の上に之を置いて書寫す、寫經の間

(三)一座云云此の經は書き始めてより筆を置かざるなり。  
(四)覽鏝 筆を以て散杖の如くにして硯水を加持するなり。  
(五)寫經云云米の上にて書くは米は清淨の物なれば

(一)食前 小食以前なり、然れば夜の中書寫し了ることなり。

燒香一杯名香を燒いて煙を絶やさず、(二)食前に書寫し了れ、料紙の長け二寸許りに切るべし或は二寸三分、小兒を坐せしめよ。乳母に抱かしむ、但し生に入齊戒を受持せしむ。以上或る説私に曰く、今の母とは生母か、經文を見るべし。 ○作壇方圓大 ○壇

圖洗米十六杯の内、大一、小十五杯 ○行法次第

○著座普禮 ○塗香 ○三密觀 ○淨三業 ○三部 ○被甲 ○灑淨壇場の供具及び小兒等に灑ぐ。 ○加持供物

小三股印契 里枳里言 ○覽字觀 ○淨地 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白 ○題名 ○發願 ○五大願 ○讀經

○釋經 今將に此の經を釋せんとするに、大意釋名入文判釋の三の意有り、初めに

大意とは、教主釋迦牟尼善逝、機根の淺深しんがに返つて權實の教門を説き給ふ、皆一切衆生

を利益し安樂せんが爲めなり。然るに此の經は佛初め正覺を成じ給ふ時、一の梵天王

有り、南閻浮提の一切嬰孩の小兒を守護せんが爲めに、十五鬼神の名號を擧げて、乃至

結線の神呪を説き、諸の女人所生の男女をして、保命長壽安穩にして恙無からしむ、

世尊又之を印可して、重ねて神呪を説いて諸の童子をして、恐怖を離れ安穩保壽を得

せしむ此れ經の大意なり。次に題目を釋せば、佛とは能説の教主にして即ち自覺他覺

行圓滿の義なり。説とは所説の法門是れ今の修多羅なり。護諸童子とは、諸の童子小

國譯作法集 五〇七

兒を護ることを説くが故に以つて名と爲すなり。陀羅尼とは、遮惡持善の義なり。呪とは軍中の密號なり。若し呪に順せざる者は頭を七分に破せん、若し呪に順する有れば九横を離る。經とは聖教の都名なり、故に佛說護諸童子陀羅尼呪經と云ふなり。第三入文判釋せば、大に分つて三とす。爾時如來と云ふより、歸命三寶等の偈に至るまで序分とす。世尊諸如來等より以下は是れ正宗分なり。時此梵天王等より以下は流通分なり。細細の文段重重的の起盡、具には經文の如し。○次に神分○祈願○五悔○發願 乾達婆王、十五鬼神○大金剛輪。

○道場觀 秘鈔に依らば、先づ釋迦牟尼尊を觀すべきか。 壇の上に阿字有り變じて宮殿と成る、其の中に亦惡字有り變じて荷葉の座と成る、座の上に卍字有り變じて筆筭と成る、筆筭變じて栴檀乾闥婆王と成る、衣服嚴麗にして甲冑を著す、左の手は左の膝を押し、右の手に三戟の鉞を持す、前後左右に十五鬼神及び衆多の眷屬有りて、恭敬圍繞せり。此の如く觀じ已つて七處を加持せよ。常の如し。

○大虛空藏○小金剛輪○送車輅○請車輅○召請 大鈎召印言、異說に之を出す。 ○四明○拍掌○闕伽 ○荷葉座○五供 理供、蘇都帝、婆娑賀。 ○普供養・三力・小祈願

○大鬼神王 南無一切三寶 ○印言 先づ大日印言次に釋迦印言 ○梵天印 右の手に拳を作り腰に安す、左の手五指相ひ著けて之を立つ少し 歸命、沒羅摩寧、娑縛賀 ○乾闥婆王印 内縛して水輪を申べ 眞言に曰く 歸命、尾成馱薩縛、羅縛係爾、娑縛賀 ○羅刹主印 右の掌を仰けて少し屈して心に當て、左の手を刀印に作して左の腰に安す。 眞言に曰く 歸命、囉唎、吃察、地跋路曳、娑婆賀 秘鈔には羅刹衆。云々 然らば印明替るべきか、曰く、印は金合、明は歸命、囉唎又勢弊、娑婆賀なり。 ○諸藥又印

(一)召請 又十五鬼神の名を各各に呼んで召請する事もあるなり。

哀愍所獻 除病延命 ○禮佛 南無摩訶毘盧遮那佛 南無釋迦牟尼佛 南無大梵天土 南無栴檀

大鬼神王 南無一切三寶 ○印言 先づ大日印言次に釋迦印言 ○梵天印 右の手に拳を作り腰に安す、左の手五指相ひ著けて之を立つ少し 歸命、沒羅摩寧、娑縛賀 ○乾闥婆王印 内縛して水輪を申べ 眞言に曰く 歸命、尾成馱薩縛、羅縛係爾、娑縛賀 ○羅刹主印 右の掌を仰けて少し屈して心に當て、左の手を刀印に作して左の腰に安す。 眞言に曰く 歸命、囉唎、吃察、地跋路曳、娑婆賀 秘鈔には羅刹衆。云々 然らば印

明替るべきか、曰く、印は金合、明は歸命、囉唎又勢弊、娑婆賀なり。 ○諸藥又印外縛して水を立て合はせ風を扇して鈎の如くす。 眞言に曰く 歸命、藥又濕縛羅、娑婆賀。 ○散念誦 佛眼二十一返、大梵。各々百返、乾闥婆千返、童子經、結線各々二十一返、但し ○用法 先づ密次に顯 ○後供 理供 ○讚

○普供養○三力○祈願○禮佛 前の如し ○廻向○普賢行願 ○撥遣 右の手を以つて彈指す、唯唯曰囉穆を又穆 ○三部被甲等 ○次に結線 行法以後か若しくは散念誦の時か不審云云 ○五色糸 長六尺許 念珠を取つて五色の糸

等 經中の後の眞言を以つて五色の糸を加持す、二十一返、或は之を用ひず。 眞言に曰く 多姪他苦

提菩提菟摩帝菩提菩提摩隸式又夜婆舍利婆多彌婆羅陀頭隸婆多頭隸舍摩膩收隸收隸求隸婆蘭帝收藍舍彌帝盤締婆訶膩祇摩膩陀婆膩蘇婆訶膩婆膩蘇婆訶。 ○次に

經の初の眞言を以つて結線を加持すること百八返 或は二十返 誦する毎に一結、縦の片端を

(一)光明 光明眞言。(二)童子經 一卷讀み結線呪廿一反。(三)用否云云 結線の呪のこと。(四)法施 密とは心經と陀羅尼、顯とは金剛般若偈なり。(五)廻向 五悔を唱ふ、然れども今は懺悔隨喜計りなり。(六)五色糸 是等は吉日を撰み前方に調へ加持し置くに當り、當日は經に書寫等あるが故に

(一) 汝今云云此を唱へ加ふるなり。次の作法に出づ。  
(二) 六字五縛此を入るは宜しからず。此は六字經の行法に入用なり。  
(三) 母に云云經を讀み聞かせるにあらず頂戴するなり。  
(四) 天一太伯薄並に秘鈔に出づ。

以つて乳母に取らしむ、百八返結了つて即ち種種に祈誓す、眞言に曰く 多姪他阿伽羅伽寧那伽伽寧婆漏隸祇隸伽婆隸不隸羅收隸修羅俾遮羅俾婆陀尼婆羅訶胃利沙尼那尼易彌那尼易彌那易蘇婆賀。 ○次に大鬼王の名號を唱へて 結或は之を用ひず。 ○次に十

五鬼王の名號を呼んで十五結す。各々一結一誦。(一) 汝今疾去 行速於四方の句を加ふ云云 或説に、(二) 六字五縛の呪を以つて結線す云云 眞言に曰く 知醜利知利收利摩登耆梅檀利羅又羅又羅耶悉婆賀。

○次に封經口傳に問ふべし。 經の上を封じて又裏んで送るべし封秘の故なり。 或説には、芥子を取つて經の眞言を以つて加持して(三) 母に載かせ經を授く、次に諸供物を取り聚め桶に入れて、小兒生氣の養者の方に穴を掘つて深く之を埋むべし、鳥犬に噉はすべからず、但し(四) 天一太伯の方を避くべし。文

○佛説護諸童子陀羅尼呪經 太唐菩提流支 詔を奉じて譯す

爾の時に如來初めて正覺を成じ給ひし時、一の大梵天王有つて、佛の所に來詣して佛足を敬禮して而も是の言を作す。 南無佛陀耶。南無達麼耶。南無僧伽耶。我れ佛世尊、照世の大法王、閻浮提に在まして、最初に神呪の甘露淨勝の法を説き給ふを禮し上る、及び無著の僧を禮す、已に牟尼の足を禮し奉つて、即時に偈を説いて言さく、

世尊と諸の如來と聲聞と及び避支と、諸仙と護世の王と、大刀の龍と天神と、是の如く等の諸衆は、皆人中に於て王たり、夜叉羅刹有つて常に喜んで人胎を噉ふ、人王の境界に非ず、強力にして制せざる所なり、能く人をして子ハラゴモリ無く、胞胎を傷害して、男女交會の時其の意をして迷亂せしめ、懷妊成就せざらしむ。或は歌羅安浮ハラゴまで子も無くして胎を傷く、及び生るゝ時、命を奪ふ、皆是れ諸の惡鬼其れが爲めに燒害を作す。我今彼の名を説かん、願くは佛我が説を聽し給へ、第一をば彌伽迦と名づけ、第二をば彌迦王と名づけ、第三をば鶩陀と名づけ、第四をば阿波志摩羅と名づけ、第五をば牟致迦と名づけ、第六をば魔致迦と名づけ、第七をば閻彌迦と名づけ、第八をば迦彌尼と名づけ、第九をば梨波掘と名づけ、第十をば富多那と名づけ、第十一をば曼多難提と名づけ、第十二をば舍究尼と名づけ、第十三をば撻吒波尼と名づけ、第十四をば目佉萬茶と名づけ、第十五をば藍婆と名づく。 此の十五鬼神常に世間に遊行して、諸の嬰孩小兒の爲めに而も恐怖を作す、我今當に此の諸の鬼神恐怖の形相を説くべし、此の形相を以つて諸の小兒をして皆驚畏を生ぜしむ。 彌伽迦は其の形手の如く、彌伽王は其の形師子の如く、鶩陀は其の形鳩魔羅天の如

く、阿波志魔羅は其の形野狐の如く、牟致迦は其の形彌猴の如く、魔致迦は其の形羅刹女の如く、閻彌迦は其の形狗の如く、富多那は其の形猪の如く、曼多難提は其の形猫子の如く、舍究尼は其の形鶏の如く、捷吒波尼は其の形雉の如く、目佉曼茶は其の形麩狐の如く、藍婆は其の形蛇の如し。

此の十五の鬼神は、諸の小兒に著て其をして驚怖せしむ、我れ今當に復た諸の小兒の怖畏の相を説かん、彌酬迦鬼は小兒に著いて眼精廻轉し、彌迦王鬼は小兒に著いて數々嘔し數々吐す、騫陀鬼は小兒に著いて其の兩肩動す、阿志摩羅鬼は小兒に著いて口中より沫を出し、牟致迦鬼は小兒に著いて手を拳るに展びず、魔致迦鬼は小兒に著いて自ら其の舌を嚙はしむ、閻彌迦鬼は小兒の心に著いて喜び啼かし喜び咲はしむ、迦彌尼鬼は小兒に著いて楽しみ喜んで女人に著す、梨婆泥鬼は小兒に著て種種の雜相を見せしむ、富多那鬼は小兒に著いて腹の中に驚怖して啼哭す、曼茶難提鬼は小兒の眠中に喜笑す、舍究尼鬼は小兒に著て肯へて乳を飲まざる、捷吒波尼鬼は小兒に著て咽喉聲塞がる、目佉曼茶鬼は小兒に著て時氣熱病して痢らず、藍婆鬼は小兒に著て噫嚙數々喚ぶ、此の十五鬼神是の如く等の形を以つて諸の小兒を怖れしむ、及び其の小兒驚怖の

相我皆已に説きつ、復た鬼神王有り梅檀乾闥婆と名づく、諸の鬼神に於て最も上首とす、當に五色の縵を以つて此の陀羅尼を誦すること、一返に一結して一百八結を作すべし、並に其の鬼神の名字を書して人をして此の書縵を賣もたしめて彼に語つて言はしむ、汝今疾く行いて速かなること風の如く四方に到るべし、彼の十五鬼神の所住の處に隨つて、梅檀乾闥婆大鬼神王、五縛を以つて彼の鬼神を縛せしむ、兼ねて種種の美味飲食香花燈明と、及び乳の粥とを以つて神王を供養す。

爾の時大梵天王復た佛に白して言く、世尊若し女人有つて男女を生ぜず、或は胎中に在つて失墮し墮落し、或は生れ已つて命を奪ふ、此の諸の女人等、子息を求めて命を保ち長壽ならんことを欲はむ、當に常に念を繋けて善法を修行すべし、月の八日・十五日に於て八齋戒を受持し、清淨に洗浴して新淨の衣を著して十方の佛を禮し、中夜に至つて小芥子を取つて己れが頂上に置いて、我が所説の陀羅尼呪を誦する者は、此の女人をして即ち願の如く得せしむ、所生の童子安穩にして患無く、其の形壽を盡すまで終に中天せず、若し鬼神有つて我が呪に順はずんば、我當に其の頭をして破して七分に作して、阿梨樹枝の如くならしむべし、即ち護諸童子陀羅尼呪を説いて曰く、

多姪他、阿伽羅伽寧、那伽伽本此の伽字異、寧婆漏隸、祇隸婆伽隸婆隸婆隸、不隸、囉收隸、禰修羅、俾遮羅、俾婆陀尼婆羅尼、呵易利沙尼、那易彌那易、蘇婆訶。

世尊我今此の陀羅尼呪を説て、諸の童子を護り安穩を得、其の長壽を獲せしむ、爾の時世尊一切種智、即ち呪を説て曰く、多姪他、善陀善陀、菟摩帝、菩提菩提、摩隸式叉夜、婆舍利波多彌異には、婆利婆多彌同、婆羅陀頭隸頭隸、婆蘭多頭隸舍摩賦收轉求隸婆蘭帝收藍舍彌帝波翅利婆呵賦陀婆賦蘇婆訶。蘇祇摩賦蘇婆訶、賦婆羅賦、蘇婆訶。

此の十五鬼神は常に血食を食す、此の陀羅尼の呪力を以つての故に、悉皆遠離して惡心を生せず、諸の童子をして恐怖を離れしめ、安穩にして患無し、處胎初生に諸の患難無し、此の呪を誦する者は、或は城邑聚落に於てし、其の住處に隨つて亦能く彼の嬰孩の小兒をして、長く安穩を得て終に年壽を保ち、諸の患難無からしむ。

南無佛陀、此の呪を成就して諸の童子を護り、諸の惡鬼神の爲めに燒害せられざらん、一切の諸難、一切の恐怖悉く皆遠離せん、娑縛賀、爾の時此の梵天此の呪を説くを聞いて、歡喜奉行す。佛説護諸童子經。大師御次第に曰く、訓に童子經一返を

讀み、小芥子を取つて、導師頂上に捧げて拜して後壇上に置く。文 大師、御室御傳に曰く、後夜明星出る時之を修す。文

○童子經書寫供養略作法

月の八日若しくは十五日、若しくは他の吉日を以て書寫供養して之を持たしむ。裏書に曰く、此の法は一座に之を行す。師説に曰く、兒の生氣の方の水を、寅の時に之を汲んで硯水並に

閻伽水と爲す、又東方の桑の木の東の枝を切つて硯水に入る。文 ○次に東方に向つて南無梅檀乾達婆王と唱ふ。(二)一百返、裏書に曰く、八部衆の内、大海に住する鬼王なり。 ○次に(三)十五鬼神の名號を

唱ふ。各百返。 ○次に新淨の硯筆を以つて經を書寫し奉る。(三)去垢の明を以つて二

十一返筆硯を加持す、書寫の間名香を燒いて之を斷さず、又子の母洗浴して八齋戒を受けしめ、書寫了つて之を供養す。裏書に曰く、八齋戒を授くる事は、若しくは檀越の所に往き、若しくは彼の母來る時の儀なり。 ○供養法

○先づ三禮、如來唄、表白、經題、發願、四弘、讀經、返一結線、五色の糸、七分許、神分、祈願、六種廻向 ○次に經を封じて之を送る。裏書に曰く、即ち頭に懸けて守とするなり、同じく結線之を送つて守に加入す。

△結線作法 ○先づ十五結十五鬼神 ○次に百八結慈救呪を誦し 裏書に曰く、一鬼の名號を唱へて之を一結す、次第して十五之を結す、鬼神を繫縛せしめて惡心を止る義なり。 ○(四)供物圖裏書に曰く、若しくは洗米之を用ふ、如法ならば五穀の堅

國譯作法集

(一) 一百反 金剛合掌して七反誦して八反日より念誦にて數を取る。(二) 十五鬼神 此も七反は金剛合掌を用ひ八反より念誦を取ら然れども數多き故に廿一反宛にても宜し。(三) 去垢の明 硯筆を獨股を持つ如く黒に持して筆硯を加持す。(四) 供物圖 本次第に圖あるも今之を略し圖後の文を掲ぐ。

(二) 薄様 此經の料幣にして金尺にて一寸八分なり、此の經を卷けたり、此の目の中にし、封じ中へ紙を書き、此を折り返して着け、其の處に字を書き、これに紙を筒の内に入れて、結線とを包み更に薄様に包む。

(三) 壽延經の事 童子經に同じ、異なる所は大人と小兒となり、十五歳迄は童子經の守り、十六歳已上は此の經の守りなり。

(四) 梵釋寺 大唐の寺。

(圖後の文) 佛供二十杯、四角に各々四杯。十五杯は十五鬼神、外一杯は惣じて眷屬の料なり。供物等生兒の生氣、養者の方に之を埋む。但し天一帝白の方を避くべし。

○童子經書寫供養支度元海僧都

- 合 (一) 薄様一枚 五色糸一條長八尺 墨一挺 筆一名 香少 燈油合二 佛供米五升 五穀各五 稻穀大小麥 土器大五口、小廿口、杓二枚 折敷二枚 薦一枚 半疊一枚 淨衣一領 菜豆胡麻 桶二枚 淨衣白衣

右注進件の如し。 年月日

○壽延經の事

右件の經は(三)梵釋寺の經藏に之れ在り、東南院の權大僧都有慶六十餘にして死すべきの夢相之れ有り、仍つて東安寺の別當潮深僧都を以て、明寬座主に延壽の護りを申し請ふ、明寬、壽延經を書して之を送る、有慶七十六迄之を持す。賢覺法眼六十餘にして此の護を書き持して後壽七十七と云云 仁平三年十月の比、賢覺法眼此の護を書して式部少輔ノリカネ範兼を以つて、鳥羽院に進するに甚だ御感有りと云云 同十一月五日專使を差して仰せられて曰く、御夢相有り、此の護りの靈驗揭焉ケツメンなり、尤も感じ思食すと云云

○壽延經書寫供養作法

書寫の間名香を焼いて斷やさず、延命を以て本尊と爲して之を供養す。佛供は本尊に二杯、十七神に各々一杯、五穀の粥十七杯、菓子十七杯、密宗の經供養作法の如く延命の法之を修す。

○十七神印明印は金剛合掌、明は經の如し、但し唵婆娑賀を加ふ。 經の中に延命の像、若しくは畫き若しくは種子を籠めて堅く巻いて黄色の糸を以て、十七神の名を唱へ十七結一返 次に延命の眞言を以て百八結一返 此の結線を以て經を封じて持せしむるなり、作法は大略童子經の如し。

○○佛說壽延經

佛、香華園に在ます時、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・七萬二千人と俱なりき。比丘有り難達と名づく、壽を終盡せんと欲す。佛に從つて壽命を延べん事を求む。十七神の名を説いて、黃纒百枚を結んで即ち十八年を延ぶ、其れ壽を有つ事百歲なる者は、命を延ぶること二十歳にして安穩を得て諸の惡害を離る、病者は癒ゆることを得、啞者は言ふ事を得、四百四病時に應じて消除す。佛の言はく、諸の有病の者の此の十七神名を持って、篤く結纒する者は衆病悉く除く、常に當に此の經を持って清淨の處に著すべし。若し身に隨へて之を離すことを得ずんば、其の人をして無量の福を獲せしむ。

悉薩、比丘遮和、隨沙門、波波那、牛頭陀、金陀頭、那羅達、摩訶和波、呬波利馬頭陀、阿遮達、波陀和、離品頭、摩由羅、阿訶摩、迦遮、遮神、十七神、常に當に擁護して所願即ち得ることを得せしむべし。此の經は梵釋寺の經藏に在り。

○清瀧宮祈雨御讀經發願

○先づ諸僧參會○次に導師經の上卷佛前に進み香爐を取つて三禮。香爐を置いて、禮盤に登る。○次に金。二○次に唱。云何○次に散花。毘盧○對揚。之れ○次に金。一表白。敬て眞言教主大日如來、兩部界會諸尊聖衆、殊に別ては三世佛母大孔雀明王摩訶史利耶、甚深妙典八萬十二法界等流權實聖教、惣じては盡空法界一切三寶の境界に驚し白して言さく、夫れ以れば、應用を神德に訪へば清瀧の波浪普く四海を潤し、功力を經王に尋ぬれば佛母の慈雲廣く三千を熹ふ、靈德已に是の如し誰か仰いで之を信せざらんや。而るに今炎旱蒸すが如く田野に潤を失ふ、油雲久しく斷え溝壑枯れんと欲す、誠に寂慮ちかなること無し民戸愁こ有り。之に依つて累世の嘉例を守り頻りに倫旨を寺門に下す、當社の恒範に任せて終に甘雨を社壇に祈らしむ。爰に珍しき哉二大和尚の再び廟前の砌に臨み給ふ、宜なる哉諸德悉く歡喜の袂を濕ほす、權現靈有らば蓋んぞ納受を垂れざらん。

○大和尚 成賢  
といふ。

ん、龍神誓ひ有らば豈感應を致さざらんや。然れば則ち甘雨を五箇日の中に降らし、稼穡を一天下の間に潤さん、仰ぎ願はくは清瀧權現勸請神等、伏して乞ふ經中所説の龍神八部、精誠を哀感し御願を納受し給へ、謹んで發願す。

○次に取經金一 ○發願 至心發願 歸命轉讀 大孔雀王經 功德威力 清瀧權現 倍增法樂 天衆地類 倍增威光 護持聖主 玉體安穩 增長寶壽 甘露普潤 炎旱消除 無邊御願 決定圓滿 及以法界 平等利益 ○次に五大願 ○次に一切諷誦  
○次に導師暫く之を讀んで後退下す。

寛喜元年八月九日、清瀧祈雨に御讀經す、故に通智院成賢僧正檢校御勤仕の時、師主憲深僧正件の發願導師を勤仕せられ給ふの時權律師云云即ち彼の草本を賜ふて報恩院の西部屋に之を書寫したる。

○次に法用打一 ○次に發願打一 至心發願 歸命轉讀 大孔雀王經 功德威力 清瀧權現 倍增法樂 天衆地類 倍增威光 護持聖主 玉體安穩 增長寶壽 甘露普潤 炎旱消除 無邊御願 決定圓滿 及以法界 平等利益。○次に四弘香爐を置く。 ○次に一切諷誦打一 ○次に三少時讀經打一 ○次に卷數の案を讀む。打一 ○次に香爐を取り、補闕分の由を申べて曰く、二十口の僧綱大法師等、殊に精誠を致して經王を轉讀すと雖

○結願作法 前の作法の結願なり、開白の後雨降りたる時は直に結願もを行ずるなり

○少時讀經 止 經の金なり



(二) 外金剛部 已下常の神分の通りなり。  
(三) 般若心經 此にて衆僧心經を讀む故に導師は讀まざるなり。

も、凡夫具縛の身文字章句謬り多く、餘念散亂相ひ交らんか。仍つて如法如理の轉讀と成つて、御願決定成就の爲めに、摩訶毘盧遮那寶號。打 釋迦牟尼佛。打 大孔雀明王經。打 ○次に神分 何箇日經王轉讀祈願成就の砌なれば、冥衆定めて降臨影向し給ふらん、(二)外金剛部等。常の如し。 (三)般若心經。打 大般若經名。打 金輪聖王御願圓滿の御爲めに、摩訶毘盧遮那佛名。打 釋迦牟尼佛名。打 ○次に小祈願 仰ぎ承り乞ふ、本尊聖者三世佛母大孔雀明王、七佛慈氏諸尊聖衆、乃至經中所説の一切三寶、梵釋諸龍諸鬼神等、至誠懇懃の轉讀哀を感納受し、國土豐饒の御願悉地證明し給へ。夫れ或は降甘雨成就苗稼と説き、或は若早必雨令彼求者隨意満足と述べ給へり。經の現文金言誰か疑はんや、何に況んや聖朝の新なる御願、大和尚の希なる御至誠に答て效驗も誠に速疾に、權現の冥助も殊に掲焉なる故に、未だ兩日を経ざるに、甘雨普潤五穀成就の御願忽ちに満足して、一天歡喜の咲みを含み、諸人渴仰の袂を潤す、彌々四海安穩萬人快樂の爲めに。摩訶毘盧舍那寶號。丁釋迦牟尼佛名。丁大孔雀明王。丁供養淨陀羅尼。丁 ○次に六種 敬禮常住三寶敬禮一切三寶 我今歸依 舍那釋迦 大孔雀明王 今日所獻 香花燈明 恭敬供養 大慈大悲 哀愍攝受 聖朝御願 決定圓滿 決定成

(二) 呪願云云 導師六種了りて直に禮盤を下りて呪願の前に至りて呪願を乞ふなり、香品を壇より持して行くなり。  
(三) 對揚 導師呪願を乞ひ了りて禮盤して則ち對揚を誦す。

(三) 後加持 宮中御院の内御所の加持は御加持といふ、若又其の下の加持には後加持といふ、修法の後には修するが故なり、譬へば日中の修法の後、夜の後等なり。  
(四) 護身法云云 是は御前の事なり。  
(五) 獨股 御請來にあらず、阿闍梨所持の金剛なり。  
(六) 發願 大阿闍梨唱ふ。  
(七) 至心發願 阿闍梨靜に句を唱ふ、伴僧と唱ふ。

就。丁

○次に(二)呪願を乞ふて曰く爐香を持するか。 敬禮常住三寶嘆佛呪願 ○呪願に曰く、三寶境界 不可思議 恒沙劫中 讚揚難盡 ○次に(三)對揚香爐を取つて起居常の如し。 南無逝多林中經王教主釋迦尊

正法威光 護持聖主 十方三世塵刹土 圓滿十二殊勝願 還念本誓來影向 天災地天令消除 甘露普潤成御願 南無聖朝安穩 國家々々々々 國內安穩 五穀成就 天下法界 萬民快樂 ○次に安座 佛名 南無三世佛母大孔雀明王經 威力甘雨普潤 大悲護念成御願丁 ○次に下禮盤一禮 ○○修法(三)後加持作法

○先づ伴僧を率ゐて後加持所に參り、著座して扇の上に(四)獨股を置いて、(五)護身法淨三業・三部・被甲・ ○地結 ○四方結 ○本尊印明 ○降三世 ○虚空網 ○火院 ○大三昧耶 ○次に獨股を取つて右の手に持し念珠を磨つて(六)發願を唱ふ。(七)至心發願 唯願大日本尊界會 不動明王 四大八大 諸大忿怒以上、三召本尊に隨つて之を改むべし。 兩部界會 諸尊聖衆 外金剛部 護法天等 各各還念 慈悲本誓 皆來集會 同心加護 護持聖王・或は仙院。 々々々々 消除不祥 消除災難 惡靈邪氣 三世怨敵 壓魅呪咀 作障難者 惡夢惡相 諸不吉祥 怖畏急難 非時中天 (八)天變恠異隨時 理運非常 年月日時 一切惡事 摧

阿闍梨唯願大目と唱ふ、一句一句毎に伴僧字を唱ふるなり。  
 (八) 天變怪異此の時なり、常に祈り用ゐず、御産除病の句も常に用ゐる。常には薫入玉體より貴體安穩に移るなり。又御産に平安の祈ならば此の前の句々々々といふ。  
 (二) 加持の呪阿闍梨珠を摺りながら、三曼多純曰く、羅敷と寛かに出せば、僧とセンドマカシヤダより何反も唱ふ。此の中阿闍梨は慈悲の呪の中へ観念す。  
 (三) 調伏云云の是は五壇五尊の護摩調伏すことなり。  
 (四) 餘の壇云云は口の中に勤むべきなり。  
 (五) 一切云云は壇にも伴僧ある故に一切等を勤む。天台にては胎藏を行ひ此方は金剛界なる故に五悔、天台は九方便なり。  
 (六) 白音、此は堅き音なり、呂律の中に律の音なり。  
 (七) 不降軍大金御加持の次第なり。  
 (三) 五切許り云云此五邊の事なり。五反目の聲の了る處にて阿闍梨念珠を摺り第二重を擧げさす。  
 (四) 僧法羅の句と此れ天台にすること。

破微塵 皆悉消除 眞言法樂 薰入五體 御産平安産の時此の句を加ふべし。 々々々々 除病延命  
此句 隨時 增長福壽 貴體安穩 恒受快樂 無邊御願 皆令満足 決定成就 決定圓滿  
 ○次に(二)加持の呪を出す、本尊呪加持の間、(三)觀あり。傳口傳に曰く、施主の心蓮花臺の上に本尊の種子を觀じ置き、施主の無明妄想無始の罪障消滅、云云 加持了つて念珠を摺り暫く祈念す。此の間伴 僧退出 ○次に解界大三昧耶・火院・空網・降三世・四方結・地結 ○次に護身法  
 ○次に退出 以上初夜作法 ○後夜の後加持には發願之れ無し、護身法結界等の後念珠を揉みて加持の呪を出す。觀念初夜の如し。 呪返滿て念珠を揉んで祈念す。 ○次に解界○次に退出 師口に曰く、息災等の法には加持の中間の念珠は摺らず、初後に二度摺るなり、調伏には初中後三度摺るなり。 以上は普通の御修法初後夜加持作法なり。  
 ○(三)調伏五壇法の事。 連壇の時は事毎に中壇に隨つて之を行すべし。開白の表白は中壇は高聲常の如く之を作す、(四)餘の壇は表白を用ひず神分のみ。或は微音に表白を唱ふ 一切恭敬等の音の時、餘壇同時に之を出す。若し中壇同一宗ならば始終之に同じかるべし。若し天臺と同行の時は九方便の間勸請等を作す。中壇振鈴の時、餘の壇も同時に振鈴するなり。護摩等皆同時に之を作す。後鈴の時は天臺は早く東寺は遅し、然りと雖も相ひ見合はせて同時に禮盤を下るなり、但し少小の遅速は力に及ばざる事なり。師曰く、中壇一宗ならば五悔の一切に音を出さず、廻向方便も亦然なり、只念珠のみ高聲なり。云云 伴僧の時は陀羅尼は(二)白音にするなり。又佛眼の眞言も之に同じ、天臺には佛眼の眞言無し、但本尊の呪を讀む。  
 ○(三)五壇法後加持の事。 本尊の次第の如く(三)不降軍大金と參るなり、伴僧は中壇には八人、自餘は各々六人なり、一壇に白音は二人若しくは四人、若しくは有るに隨ふなり。後加持は先づ參して、常の如く護身・結界了つて、數珠を磨みて發願を唱へ了つて、伴僧陀羅尼を讀むなり。(三)五切許り讀んで六切讀まん時、五音のスパナチの間に、阿闍梨數珠を磨みて第二重を上げサスルなり。五切れ讀み了つて、又五音のスパナチスル間より、數珠を揉み初めて第三を上げサスルなり。其の間に高聲に(四)僧伽羅の句を上げ了る迄は數珠を止めざるなり、末にはキツメ揉にしてハツルなり。大阿闍梨の念誦は平音にスルナリ。高く讀めば陀羅尼に紛れて惡しきなり、ヨマ／＼に少し差し上げ念珠を摺るなり。陀羅尼は八切、或は十或は十二切或は十五切なり。僧伽の

(四) 餘の壇云云は口の中に勤むべきなり。  
 (五) 一切云云は壇にも伴僧ある故に一切等を勤む。天台にては胎藏を行ひ此方は金剛界なる故に五悔、天台は九方便なり。  
 (六) 白音、此は堅き音なり、呂律の中に律の音なり。  
 (七) 不降軍大金御加持の次第なり。  
 (三) 五切許り云云此五邊の事なり。五反目の聲の了る處にて阿闍梨念珠を摺り第二重を擧げさす。  
 (四) 僧法羅の句と此れ天台にすること。

時に振鈴するなり。護摩等皆同時に之を作す。後鈴の時は天臺は早く東寺は遅し、然りと雖も相ひ見合はせて同時に禮盤を下るなり、但し少小の遅速は力に及ばざる事なり。師曰く、中壇一宗ならば五悔の一切に音を出さず、廻向方便も亦然なり、只念珠のみ高聲なり。云云 伴僧の時は陀羅尼は(二)白音にするなり。又佛眼の眞言も之に同じ、天臺には佛眼の眞言無し、但本尊の呪を讀む。  
 ○(三)五壇法後加持の事。 本尊の次第の如く(三)不降軍大金と參るなり、伴僧は中壇には八人、自餘は各々六人なり、一壇に白音は二人若しくは四人、若しくは有るに隨ふなり。後加持は先づ參して、常の如く護身・結界了つて、數珠を磨みて發願を唱へ了つて、伴僧陀羅尼を讀むなり。(三)五切許り讀んで六切讀まん時、五音のスパナチの間に、阿闍梨數珠を磨みて第二重を上げサスルなり。五切れ讀み了つて、又五音のスパナチスル間より、數珠を揉み初めて第三を上げサスルなり。其の間に高聲に(四)僧伽羅の句を上げ了る迄は數珠を止めざるなり、末にはキツメ揉にしてハツルなり。大阿闍梨の念誦は平音にスルナリ。高く讀めば陀羅尼に紛れて惡しきなり、ヨマ／＼に少し差し上げ念珠を摺るなり。陀羅尼は八切、或は十或は十二切或は十五切なり。僧伽の

句、東寺には上げざるなり、天臺には驗者之を上げ自餘は上げず。云云 若し各々の壇所にて之を修するに、伴僧は念誦陀羅尼後加持と同前なり、息災は北に向ふて之を修し、調伏は南に向ふて之を行す。

(一) 金剛夜叉 五鼓闍等

降三世

丑三刻

口に云く、(三)左の脇は三世、金剛夜叉、右の脇は軍荼利、大威徳、何れの方に向ふと雖も運心の儀は此定めに懸くべきなり。又調伏に之を修すべきなり。仁王孔雀等の大法には、開白・結願・御加持・發願の後に五大願を用ふ、普通の修法には之を用ひず、天臺には普通の法にも開白・結願に之を用ふ。公家歳末の不動御修法は調伏なり、伴僧二十人、御持僧長日不動の御修法は調伏なり、伴僧六人、(三)除目

○北不動

鐘ノ單○

軍荼利

陸茶車

御供養闍伽の後に佛布施を獻じ了つて、卷數案を取つて曰く、一七箇日夜修法結願此の時に當れり、仍つて念誦の數返之を読み奉る

大威徳

鬘ノ單

西に向ふ時は息災の懸け様を用ふべし、東に向ふ時は調伏の懸け様を用ふべし。

は之を用ひず、天臺には普通の法にも開白・結願に之を用ふ。公家歳末の不動御修法は調伏なり、伴僧二十人、御持僧長日不動の御修法は調伏なり、伴僧六人、(三)除目

の御修法は不動の調伏なり、伴僧八口、御衣は大壇の右に置くなり。

○結願作法 御卷數は佛の左邊に之を立つ、卷數の案は脇机に之を置く。 御供養闍伽の後に佛布施を獻じ了つて、卷數案を取つて曰く、一七箇日夜修法結願此の時に當れり、仍つて念誦の數返之を読み奉る

(三) 除目 名を除くといふこと、除目の怨念を調伏すなり。

(一) 金剛夜叉 以下本尊の懸け様なり。(二) 左の脇云云 左の方より左り也

(二) 大法外儀 法は伴僧十六口より廿口迄、外儀は立行法に之を修す、是れ故なり、又成身會にては外儀の事なり。(三) 覺洞院成賢の師の時修し玉ふに異之れあり、末代の誤りとなる故に。

べしと曰ふて卷數の案を讀むなり。讀み了つて脇机に置き、結願の事の由を申すこと常の如し。護摩御修法には、開白・作壇・結願・破壇・必ず之を作すべし。御修法・結願の時に勸請を用ふるは、嚴重の義か 或は常の如く發願を唱ふ。文 修法の伴僧集會の金は一日に百八返なり、三時に各々三十六返づ、打つ、三時合して百八返を成すなり。後夜の時には必ず後夜の偈を讀むなり、禮佛了つて金一打、白衆等各念等了つて金一打、廻向等常の如し。醍醐の人曰く、後夜の偈は仁和寺方に之を讀み、小野方には之を用ひず。文 然れども故權僧正勝覺は之を讀ましむ。文 必ずしも然からざるか。

○二大法外儀

建保七年二月六日、加陽院殿に於て仁王經の法を始行せらる、之に就て之を記す。

(二) 覺洞院の作法は聊か相違の事等有るか。

當日の夕べに道場莊嚴了つて、開白の時始行せらる、時に戌の半なり。 ○伴僧二十人皆參す、

淨衣、表袴、裳、袈裟は五帖、或は平袈裟を著すべきか、今度は五帖なり。

○次に大阿闍梨上堂、三衣箱身に隨ふ、伴僧之を淨衣、平袈、表袴、暫く下座に著く、三衣を持する伴僧、幔内に入り、脇机に之を置く、結願に至るまで之を取らず。 此の時に承仕金を

打つ、金了つて禮盤に登り、前方便等常の如し、三方の金の後、伴僧二十人各々經を

此一字の金も覺洞院と成賢も異なることあり。注に由りて之を示す。

(三)廻向を申ぶ覺洞院の時發願廻向一人なれども成賢は兩人して勤む此も又異を出す。

讀む、佛眼の眞言 暫く讀經の後、下番十人退出す。大阿闍梨振鈴の後、護摩師權大僧都光寶座を起つ。其の作法別に之を記す。 ○次に十二天壇、權少僧都行嚴同じく座を起つて進み寄る、大阿闍梨散念誦の間護摩小壇等の所作了つて本座に著く、大阿闍梨讀經了つて下番の金を催ふす。 鐘木を以つて脇机を鳴らし承仕を召すべし。云云。但し今度は大阿下座に於て讀經す、依つて大阿の形勢を伺ひ伴僧承仕を召すなり。 金を打つの間、下番漸く參る、 証仕の法師を以つて金以下座に漸く之を催すなり。 下番皆參の後、(一)一字の金之を打つ、覺洞院の時此の金之れ無し、伴僧一字の眞言を誦せず、仁和寺には之無きか。今度は此の如く行せらる。此の時伴僧讀經を止めて一字の眞言之を誦す。 ○次に後鈴・讚。 下座之を出す。 廻向方便の後、金一打。下番上薩 覺洞大 經を取つて發願並に四弘一切諷誦。云云。大阿金一打、下番同時に讀經、次に大阿上番退出し了る、 經は皆各々机に置き了る。 下番は座を動せず讀經するなり、次ぎ次の時は大阿神分の時に金一打、其の時上番の下薩尊祐阿遮梨(三)廻向を申ぶ、 覺洞院の時は、發願廻向一人にして之を行すか。 廻向了つて大阿金二打、令法久住等例の如し、其の時下番退出し了る、後夜日中に下番發願。 護摩師立座の後、聖天壇深律師、座を起ち進み寄る。作法常の如し。 至心發願 轉讀般若 功德威力 天衆地類 倍增法樂 聖朝安穩 天下泰平 護持仙院 玉體安穩 增長寶壽 院內安穩 諸人快樂 乃至法界平等利益 ○四弘 一切諷誦 ○上番の廻向 開白の時に之をなし。 所修功德 廻向三寶願海

(二)勤へ計、壇行事の役なり、卷數とは注せども此は銘々の交名を書きたる下へ此迄で讀みたる經の數を書き出す都合して卷數に載せたる故なり。

(三)庇の間云云此は玉體晴れの出仰と云ふなり。

廻向天衆地類 廻向聖朝安穩 所修功德 廻向護持仙院 玉體安穩 增長寶壽 廻向天下 廻施法界 廻向無上菩提。 ○結願作法 當日午の一刻伴僧皆參、 下番に於ては以前に皆參するなり、今度は此の如く、云云。例の如く日中の時を行せらる、作法常の如し、結願後供養に之を行すること常の如し。 但し伴僧皆參の後、承仕張文を放つて硯に相ひ加ふ、大阿より次第に伴僧皆卷數を注せしめ了つて、惣數を(二)勤へ計つて都合の後卷數に書入せしむ、卷數は以前より内々之を書き儲くなり、而して當座に之を封す、又卷數案に部數同じく書き加へて、案文を卷數に挿み承仕に給ふ、 今度は淨尊阿遮梨之を書入す。 承仕大幔の内に入つて卷數を大壇の傍に立て、案文をば脇机に置き了る、其の後時を始められ了る時、大阿平座に著く。 ○次に(三)庇の間の御簾之を上ぐ。 藏人二人之を上ぐるか。 ○次に公卿著座 ○次に出御、 奉行、案内を申すか。 ○次に幔を上ぐる、大阿の傍の ○次に勸賞之を仰ぐ。 今度は當座の賞之れ無し。 ○次に御加持、 作法常の如し。 ○次に御布施並に御馬引かれ了る。 ○次に各々布施を持し退去す。當座の賞無き時は出御の後、後加持之を始む。云云 今度は此の如し、俗名等追て尋ね注すべし、廢忘の



文陰酉年生男女の元辰は寅に在り。 癸  
癸陽戌年生男女の元辰は巳に在り。 武  
丑陰亥年生男女の元辰は辰に在り。 廉

以上此を陽八陰六と曰ふ。

〇〇元辰供作法

假令へば甲子歳生れの人は甲子の日に之を供す。 餘は以つて之に準ず。

〇陽命子、寅、辰、前一衝謂く子年の者は丑を以つて前一と云ふ、衝と〇陰命未、酉、巳、後一衝謂く丑年の者の、後一は子なり、衝とは午

なり、午の方の佛菩薩天等を供養す。 〇二には屬星謂く北斗七星の中の、所屬の星なり、 〇三

には當年行年所屬神なり、火羅の圖に見ゆ。 以上は加司馬の所傳世人の元辰。云云 不同の所

未だ前一衝後一衝を知らず、秘して以つて之を傳ふる勿れ。 凡そ

子年の人は微妙聲菩薩貪狼星に奉仕す。 丑年の人は陀羅尼菩薩巨門星に奉仕す。

寅年の人は龍樹菩薩祿門星に奉仕す。 卯年の人は藥師佛文曲星に奉仕す。 辰年の

人は文殊師利菩薩廉貞星に奉仕す。 巳年の人は地藏菩薩武曲星に奉仕す。 午年の

人は梅檀香佛破軍星に奉仕す。 未年の人は摩利支天菩薩武曲星に奉仕す。 申年の

人は觀世音菩薩廉貞星に奉仕す。 酉年の人は阿彌陀佛文曲星に奉仕す。 戌年の人は得大勢至菩薩祿存星に奉仕す。 亥年の人は彌勒菩薩巨門星に奉仕す。 注する所以は此の如し。云云

〇〇葬法 (一) 眞言宗に付いて葬所を取る事。

先づ其の地を妨り拂ひ、次に三部被甲、次に(二)袈裟の角を解いて地に敷いて袈裟の四角に幣を立つ、即ち袈裟を取つて中の幣を立てよ、次に袈裟を着して申して言さく、夫れ大海に袈裟を浮ぶれば金翅鳥王、龍を害すること莫し、大地に袈裟を敷けば堅牢地神、人に崇ること無し、故に今此の地に解脱幢相の福田衣を敷いて(三)不生寂滅の三摩地を乞ふ、願くは地神並に眷屬必ず祈請に答へ給へ、或は胎藏驚發地神の眞言より持地まで之を行すべし、或は又施甘露の眞言を誦して五穀粥を供すべし。次に散供を加持して普供養の眞言を誦して、運心供養を成して之を祈供すべし。 敬て堅牢地天五帝龍王諸大眷屬に驚し申し七云く、生所死所は、焔魔法王の鏡に浮び、生時死時は五道大神の札に見えたり、我を生ずる所は冥官之を注し、我を埋む墓は死王之を記す、我れ本より墓を好むに非ず人類の甚だ厭ふ所なり、仍つて果報の感ずる所天然の爲す

(一) 眞言宗云云  
此は新しく廟所を取  
取る時のこと。如  
法衣の七條袈裟に  
地を取、袈裟の角  
四方の外へ幣を敷  
次に袈裟を取り去  
りに其の中央に又  
一幣を立て、都  
合幣五本なり。都  
死人の事、故に不  
生死寂滅といふ。

所なり、然れば則ち地神眷屬等正理を察して崇りを止め給へ、堅牢地天とは大日如來の分身、諸佛の導師萬法の根源衆生の父母なり、故に秘密真言の加持力を以て、種種無邊の供養雲海を雨らして、周遍法界の地神に供養す、一子の慈悲を垂れて事理の供養を受け給へ。法樂莊嚴隨喜悅與の下には、弟子眷屬並に葬所安樂太平に守護し給へ。抑々尊靈佛法に遇ふて薰修年尙し。加之らず、曳覆の眞言を以て六道の衢を離れ、呪砂の功力に依つて十方の淨土に生ず、旁々往生極樂頓證菩提更に疑ふべきに非ず。傳へ聞く一切衆生は法性眞如の都を出て、五道生死の泥に入り、阿字本不生の理を悟つて大般涅槃の道に趣く、誠なる哉人の死に歸するは佛の涅槃の相なり、涅槃とは果中の果なり、地を掘つて墓を作すは是れ土塔の形、土塔の上に率都婆を立つるは則ち果中の果なり。率都婆とは五大所成なり、佛界の五大と衆生の五大と差別無きを以て別して一つの率都婆を立つ、是を佛界衆生界一時成佛と名づく、故に三世諸佛は常に亡魂の舍利を守り、十二大天は定めて孝子の頂上を摩て給はん、塔婆の功德を以て自ら沙羅林と成し、眞言の加持力に依つて常寂光を隔てざらん、故に經に曰く、毘盧遮那の性は清淨なり、三界五趣の體は皆同じ。文 之に依つて堅牢地神は之を戴き、

の諸神は之を守る、孝子眷屬子孫孫に至るまで、地味を増長し福德を圓滿せん、仍つて法樂莊嚴離業證果の爲めに、般若心經並に九條錫杖之を誦すべし、祈願して起居し了る。 幣五本・散供一折敷・五穀粥。

以上仁海覺源宮僧正、花山法王の息 覺俊宮阿婆梨、式部卿宮の息 嚴覺勸修寺 相傳なり。

○葬送作法 先づ閉眼の後、著する所の衣服の面、並に綿疊之を取り去け只單物之を覆ふ、疊の面之を放つて薦並に裏之を取り去く、若し本より菴に臥さば下の疊之を取るべし。 ○次に返枕本より頭北面西ならば之を返すに及ばず、或は枕返を沐浴の後に之を作し、或は入棺の時之を作す。 ○次に葬送に至る

までは常の如く膳を供すべし。 ○次に手水 ○次に著服の人吉日時を以つて衣を服す吉日無くば葬送以後、吉日を撰んで之を著す。 ○次に入棺の期に先づ沐浴し、死人の吉方勸文に依るべし。の水を取つ

て大瓦氣に盛つて折敷に之を居えよ、檀一枝之を具す、或は作り枝を用ふ役人は亡者の傍に侍つて水を持つ人の號を召せ二度、其後答へて之を持參す、役人檀を以て之を灑ぐこと三度許り。或記に曰く、先づ二足、次に左右の脇、次に背、次に面なり。 ○次に御棺

に入る、嫡子の吉方より之を持參す、生氣養者の方なり、丑寅の方は頗る憚有るか。 ○次に入棺近習の人之を役菴に臥せながら之を昇いで棺に入る、若し菴廣大ならば之を切り捨てよ。 ○次に淨衣

等を著せしむ。男ならば男の衣服、枕弓箭太刀墨筆、女ならば女の衣服、枕墨筆針宮之  
 を入る、各々衣服に於ては逆に之を入る、當時逆に之を入るれば冥途には順に成る。  
 云云 但し此れ等の物の具は如法の物に非らず、形の如く之を作るなり、又土砂を加へ  
 て引き覆を覆ふ、嫡子の人形之ヒコガタを入れる、或は人の意樂に任かす。頭の方には阿彌陀、  
 隨求、尊勝陀羅尼、左の方には寶篋、寶樓閣眞言、右の方には觀音、勢至の眞言之を  
 書すべし。 ○次に棺の蓋を覆ふ。針を以つて打ち 付くべからず 次に棺に白布二段を以つて之を結  
 ぶ。結び様は 別に在り ○次に嫡子の吉方より之を出す。蓋りの方を 除くべし 後を昇ぐ人足を以つて近邊  
 の疊を反して其の後竹箒を以て之を拂ふ。 ○次に門外に出て素服を著す。吉日無ふして 未だ著服せざらば、今夜素服を著すべからず、嫡子等素服を著する事は必ず門外に出でず、便宜の所に於て之を著せよ、帯には素細を用ふ。 ○次に車を寄す。雨皮、下簾、生絹を用ふ、或は古を用ふ。 棺の頭の方を前にして結び、緒の四の端を前後の前へ板の左右の牙形に結び付け  
 よ。或る記には車の坪 立の穴に付く。 簾は車の簷に之を懸く。 ○次に車を裹むこと雨皮を覆ふが如く  
 せよ、車の輪並に長柄等も同じく之を裹む、次ぎ次の人には之を裹ます、簾を返へして  
 之を懸くることは謬説なり。 ○先づ念佛の僧、次に黄色の幡之を捧ぐ。光明眞言を書 實樓閣の明なり、次次の人 は 棺の前きの方に之を挿む。 ○次に前火の役人藁沓を著けて、御所に入つて御枕の上の

燈を付けて退出。 ○次に御車出門嫡子の吉方よ 嫡子の吉方よ ○次に孝子等 ○次に墓所の鳥居  
 を南に向ふるなり、墓所に至るの時迎火之あり、前駈の炬火之を消す、前駈は十一  
 人、若しくは九人乃至三人なり、若しくは松を外に指し出す、平生の人は各々内に之  
 を炬す、迎への火は同じく引き返し鳥居の許に指して之を消す、前火は一の鳥居の内  
 に入り葬所の良の角に立つ。火の方を北に向ふべし木 二筋之を結て之を懸く。 ○次に鳥居の前に出て、牛を放つ。  
導師は西、呪願 は東に之あり。 牛を以て導師に給ひ、車を以つて呪願に給はる、車を以つて擧げ物と爲  
 る時は、鞞シラガヒを以つて呪願師に給ふ。 ○次に玉殿に渡し奉る、男は棺許り之を渡す、  
 女は車を掻き放つて之を渡す。 ○次に供膳倍膳は女房の役云云、只近習の人之を役むべし、御 膳の體參ること常人の御料倍膳の人の如し、箸を立  
て、持參す、其の人一筋は立て、一筋 は御飯の上に横サマに之を置く。 ○次に御手水、手洗の兩の角を亡者に向つて椽の蓋之  
 を去け水を少し手洗に入る。 ○次に棺を火爐に安す、北 頭 役人 冒額有るべし。 白絹の四方 なるを筋違  
へて額に 當つ。 本より呂の底に薦を敷く。 ○次に枕木三枚。大なる圓る切りなり、 或は二支なり。 其の間に  
 薪炭カキスミツラ其上に延べて之を敷き、其の上に絹を打敷の如くに、三幡ハタハリ兩面にして之を敷  
 き、其の上に棺を居えよ。 ○次に蓋を開いて筵を引き上げ薪を著けて棺の蓋之を覆  
 ふ、棺の蓋と身と相ひ去ること一尺許り ○次に火を著く。先づ丑寅、次に辰巳、次に未申、 次に乾、或は戌亥未申辰巳丑寅凡



○次に葬畢て先づ爐を破却す、次に水を以て火を滅し重て酒を以て火を滅し次に骨を拾ひ了つて瓶子に入る。打取の上に紙を敷き、箸を置いて人人の前に置き、此の瓶子には兼て土砂を入れるべし。 ○次に呪砂を以て其の上に散す。○次に火屋を破り墓を突かしむ。○次に率都婆を立て釘抜き等を作すこと曉の間に及ぶ、擧げ物等を焼かしむ。亡者の身に近き物並に車等なり。 火屋の丑寅の角に於て之を焼き、荒桓アラガキの内に埋めしむ、外の分荒垣烏居絹布ウケヌの悦等ウツトウを分つて近邊の寺に給はり了る。○次に水の便所に於て少しき解除す、人形を以て撫て水に流したる。或説に曰く、草木を以て人形を作り必ず之を撫て捨つるなり。 ○次に葬家に歸つて先づ素服を脱ぎ、頭方に阿彌陀オミト、阿蜜唎多帝アミリタ、阿羅訶羅アロカ、隨求小呪ズイソウ、跋羅跋羅バツラバツラ、三跋羅サンバツラ、印捺哩野尾インナツリノ、成ナツ、頰ケツ、吽ウン、嚕ロ、嚕ロ、左サ、縛バク、賀カ、尊勝ソントウの呪、左方寶篋印サハツホウケツイン、中寶樓閣チュウホウロウカク、右方正觀音ウヘマサタミ、勢至セツシ、破地獄ハツヂゴク、光明真言クワミョウマコト。照曰く、本次第には如上の諸真言各々梵字を以て之を書せり煩を厭て此に略す。慶蓮上人曰く、葬送牛車シウシャの事、牛に輓ヒキ付ケの車には下簾シタを付くると文

○亡者曳覆書様此の法は幸心流には殊の外秘する法なり

○亡者曳覆書様 臨終の時曳覆の作法威儀、顯密の文に依つて聊か此の旨を注す。真言行者は則ち此の文を書して、四威儀六時に身を離すこと勿れ、即ち是れ降魔

並に來迎の爲めの故なり、頂上に大寶樓閣真言を書す、或説には額カドに歩嚕唵フロオン字並に三身真言ミタマコト云云

○眼の間 眉間なり

○樓閣真言。大呪常の如し。 ○法身真言 阿・鍍・覽・憾・欠 ○報身真言 阿・尾・羅・吽・欠 ○化身真言 阿羅波者曩 ○眼の間に 佛眼真言。大呪常の如し 或る説に曰く、紇哩字セツリを書す、又寶樓閣の真言をば腹の間に書す。文 ○左の手に、決定往生の真言 曩莫三滿多勃駄喃、唵阿蜜唎妬納婆吠莎訶 ○右の手、即身成佛真言 阿・阿・暗・惡・惡・惡。或る説には、阿・鍍・覽・憾・欠・文 ○左足、破地獄真言。○右足、滅罪真言。 或説に曰く、胸の間に卍、腹の間に唵、摩尼縛日隸、吽發吒ウンハツク文 ○左脇、不動一字呪。○右脇、大威德真言。 或説は心中心呪文 ○臍上、正觀音真言。○背、得大勢至真言。此の如く等觀じて之を書せば、道俗男女成佛疑ひ無きなり。

○道俗云云本次第に此に幡の出すも今之を略す

以上或る本に依つて之を書寫せしめたる。以上雨の僧正宇治殿の爲めに之を書き出ださるゝ本なり。僧正曰く、未灌頂の人には之を書せしむべからず。文 金剛界根本會圖すべし。文 曳覆を無常衣と名づく、此れ臨終正念決定往生極樂淨土見佛聞法頓證菩提の法衣なり。文





- 守護國界
- 雨寶
- 一山土心水師
- 避蛇法
- 奥砂子平法
- 聖天供
- 焰魔天
- 不動
- 五十天
- 三衣印言
- 八大佛頂
- 灌頂
- 灌頂護摩
- 後七日
- 千手別法
- 五寶
- 小野僧正消息
- 二股鈴四股鈴
- 鈴杵義
- 五色糸
- 五色粉
- 道場觀
- 小野護摩
- 蠟燭事
- 作壇法
- 已上八十七

(一)七寶 觀音經の七寶中の五寶。  
 (二)瑟瑟石 七寶の諸寶海底に集て瑟瑟となる不動の座となるは淨菩提心の堅固を表す。  
 (三)現在云云 實の五寶は天竺にありて日本になし故に現在にあるものを以て五寶に用ふ。

(四)螺 螺貝。

(五)檀香 白檀を用ふ。  
 (六)法に隨云云 四種五種の法にて替るといふ。

國譯厚造紙

- 七寶とは、金、銀、瑠璃、車渠、馬腦、珊瑚、琥珀なり。
- 五寶の事小野僧正の記 瑟瑟石とは不動明王の所座なり、此の國に其の寶無し、眞珠を世間の膠説に佛舍利とも謂へり、是れ志摩の國の所生なり、近來の作法は(三)現在の物を以つて五寶と爲す、即ち金・銀・琥珀・水精・瑠璃・等なり、但し馬腦と見え侍べり、珊瑚は紅赤色の石脂樹アラカキの形に似たり、海中に稀に有る物にして其の實は之れ無し。  
以上五寶のこと飯室中將入道の尋ね申すに小野僧正書き出されし所なり。 瞿醯經に曰く、五寶とは、瑠、頗、金、銀、商法なり。文。法花儀軌に曰く、五寶とは、金、銀、眞珠、瑟瑟、青瑠璃に代ふ 頗梨、水精を代用す 弘法大師御記に曰く、金、銀、瑠璃、車渠、(四)螺に代ふ 馬腦、琥珀を代用す 。
- 五藥 實の五藥は唯だ天竺に在るのみ、故に不空三藏、大唐所出の靈藥を以つて之に代ふ、所謂、赤箭、天門冬、人參、茯苓、石菖蒲なり。
- 五香 護摩儀軌に曰く、沈、(五)檀香、丁香、鬱金、龍腦香。文 但し香藥等、(六)法に隨つて相ひ替へて之を用ふ。
- 五穀 陀羅尼集經一に曰く、大麥、小麥、小豆、稻穀、胡麻。文 建立の軌に曰く、

(一) 五種の善萌  
此れ信進念定慧な  
るべし。  
(二) 五種云云  
五種の過患を斷ては  
五智を得。

(三) 香花云云  
常  
に香花供養の時、  
是の觀念を以て供  
養すべし。  
(四) 廣大供養  
養の中に運心供養  
を以て最大一心を  
す。法界に心を運  
んで供養す。第一  
の供養なり。  
(五) 聖衆の前  
に我一の聖衆の前  
に供養ありと觀念し  
て供養すべき事な  
り。

稻穀、大、小麥、菘豆、胡麻。文

○七穀 胡麻、稻穀、米、大麥、小麥、大豆、小豆。 五寶・五穀・五藥を、疏の第四に釋して曰く、若し深秘の釋は即ち是れ菩提心中の五智の寶を安立するなり、能く(一)五種の善萌を起して(二)五種の過患を滅除す、故に五穀五藥と云ふなり。文 千手の法に曰く、安息香を焼けば菩薩即ち來る。文 然らば觀音の法にも通用すべきか。準胝經に曰く、若し大旱せば中夜に於て安悉香を焼き、印を結び五方龍に勅して速に降雨せしむべし。文

○(三) 香花等供養の觀 金輪の軌の中に、金剛頂等諸秘教契經の説を引いて曰く、(三)廣大供養の具、先づ本尊並に眷屬等に奉獻し已つて、次に周遍十方の諸世界、盡虛空法界微塵刹土の中の、諸佛大海會の(一)聖衆の前に等引して、普く供養して住せ。復た十方を觀察して是の如くの願を發して言く、我れ今諸佛の未だ法輪を轉じ給はざる者を請ふ、願くは速に法輪を轉じて涅槃に入らんと欲ふ者をば、願くは常に世に住らし給へ。  
是の如きの念を興おこさまくのみ 無邊諸の含識 六趣に沈溺することは

(一) 種々の業報云  
云。眞如平等を知らず。  
(二) 我れ云云  
我れ一切衆生と同體  
なれば同體の慈悲  
に住して我が修す  
する功徳を法界に施  
すの觀なり。  
(三) 塗香 清涼の  
徳ある故に煩惱の  
熱惱をさます。  
(四) 妙覺云云  
花を奉て供養すること  
を得。

(五) 苦 五衰の苦

(六) 寒水云云 八  
寒地獄。  
(七) 食を云云 飯  
食供養肝要なり。  
是の時法喜禪悅食  
と觀じて兩部の三  
切衆生と俱に餓鬼  
道の苦を免ると觀  
ず。此の飯と氣と  
付くべし。

自心の虛妄に由つて (一) 種種の業報を感じて 佛性を壞して知らず  
深く悲み傷感すべし (二) 我れ今云何んしてか救はんと 復た是の思惟を作す  
我が積める所の福業を 用ひて彼を拯濟すべし 我れ(三) 塗香を獻するに由つて  
當に五法身を獲べし 願くは此れ從り 五無漏の塗香を等流し  
熱惱の者を磨瑩し 諸の地獄の一切劇炎蒸を奮破す 花を獻する故に  
當に四八大仁の相を得べし 復た此の福を廻向して (四) 妙覺の花臺を成ぜしむ  
光を舒べ遍く照觸して 人天の趣を驚覺せん 諸欲の境に耽着して  
八苦に纏逼せられて 天の樂變して(五) 苦と作る 願くは彼の諸の天人に  
菩提心を敷榮して 普賢の常樂を獲しめん 我れ焚香を奉るに由つて  
佛の無礙智を得て 悅澤して端嚴なることを具し 此の香雲を廻向す  
(六) 寒水の苦を益覆せん (七) 食を獻すれば法喜禪悅解脱の味を獲て  
餓鬼の趣に廻施して 普く諸の微妙 天の甘露の飲食を雨らして  
願くは加持の食を喰し 悉く皆充足することを得て 永く飢渴の苦  
慳貪惡習の業を離れしめん 燈を獻じ五眼を得て 以つて般若の燈と爲して

(二)阿修羅 此に  
畜生を兼ねぬ。

(三)閻伽云云  
水は平等なる故に地  
ある所には水ありし  
是れ五智平等に  
法界に遍満する  
ことなり

(三)清涼の池と成りて  
寒八熱地獄變じて  
清涼の池と成り  
となり  
進も上も 奉も供も  
と點す 嬉も皆奉  
り 三十七尊の功德な

(二)阿修羅を照曜し 永く僞誑の心 恚疑を以つて鬪諍を好むを斷し  
傍生鞭撻に逼らん 互相に害し食噉するを 願くは慈惠の心を得て  
常に人天の路に生ぜしめ 色無色界天の 三味の味に耽著して  
願くは此の惑纏を脱せしめん (三)閻伽香水を獻すれば 平等性智の  
三界法王の位を證す 此の降注する 金剛の甘露水を廻施し  
水居の者を灌沐して 永く傍生の趣を離れ 速に淨法身を獲しめ  
及び下も無間に徹るまで 一切諸地獄の 苦具譬へば塵の如くなるも  
皆(三)清涼の池と成り 受苦の諸の群生を 解脱して淨土に生ぜしめん  
(四)嬉を奉れば常に悦を受く 笑を獻れば佛憐念し玉ふ 歌を奉れば法音を得  
舞を供れば神通を得 瓶を奉つれば寶瓶を得て 能く悦意の願を満つ  
寶を進れば衆寶を獲 莊嚴の樹を貢するに由つて 佛衣の覺樹を得  
幢を奉れば寶を雨すことを得 能く遍く貧乏を濟ふ 幢を供れば魔に超勝す  
鈴を獻すれば衆々歸從す 璣を奉つれば嚴具を獲 鬘を進すれば寶冠を得  
花を上つれば佛の容を得 復た此の福聚を以つて 無盡無餘の有情界

(二)廣大儀如來  
是は北方の金剛業  
菩薩なり 式如來  
に説くなり 俱  
藏と同一に俱  
に處空を庫となす  
(三)一諸法  
下は諸尊法なり  
廣は諸尊法なり  
一返傳受は諸尊  
めは諸尊法なり  
には諸尊法なり  
重に諸尊法なり  
三重に諸尊法なり  
抄は諸尊法なり  
玉造は諸尊法なり  
しきふは諸尊法なり  
は玄秘は諸尊法なり

六趣四生等に廻施し 乃生自の身心口の三金剛 地水火風界を以て  
無邊の等虚空法界に周遍して 一切含識と 悦意して之を受用せん  
此の無縁の悲に住して 常に拔濟し利樂して 彼と共に同じく廻向して  
願くは大菩提を成して 一切智智に應はん 復た是の觀察を作せ  
一切の法は皆空なり 三輪の體は有に非らず 當に無所得なりと知るべし  
此の三摩地に住して 能く眞實に拔濟し 限り無き福利を獲せしめ  
所作速に成就せん 此の觀念を作す時 最勝出生  
種種供養藏 (二)廣大儀如來 一切供養の心を誦せよ  
此の密語印 加持の威力に由るが故に 縦ひ觀想成せざれども  
(三)諸佛の海會に於て 皆如上等の 諸の供養雲海  
眞實の具成就すること有らん 諸佛の誠諦 法爾の所成に由るが故なり。文  
○(三)一字金輪の事 若し人有つて頂輪王等の佛頂を誦持せば、五百由旬の内餘部の  
密言を修する者の、本尊を請ふて念誦するに聖者降赴せず亦悉地を與へず、一字頂輪  
王の威徳を以つて、諸法を斷壞するが故に。之を譬へば、世間の金輪王臨幸の時、餘の

(二)犀の角 佛眼  
呪に譬ふ。

小國の王皆悉く隠る、若し隠れざる者は輪寶到つて之を切る、但し隠るとは是れ實體の失するに非らず、只威勢を失するのみか。譬へば日光出現の時、衆星の光没するが如し。然るに若し佛眼の眞言を誦すれば、隠る所の尊の威徳出現して、法の成就を得、其の意は鳩鳥水に入る時は、若しは河、若しは泉、其の中の有らゆる大小の有情皆死す、所以は何んとならば、此の鳥の毒餘の毒に勝るゝが故なり。若し(二)犀の角を以つて此の水に入れて之を振る時は、其の有情皆悉く蘇生す、此れ角の藥力強きが故なり、此れは是れ世間の譬なり。何かに況んや如來の呪力をや、行者能く意を得べし。大師の御傳に曰く、若し餘尊の法を行せば、次に必ず一字の眞言を誦すべし。文 其の由何とならば、經意を案するに曰く、一切の明を誦修するに他時を経るに、若し障り重ふして成就せずんば、最後に此の一字の眞言を念すれば、以前の不成就の法皆一時に成就すと。若し或は人命終の時は、彌陀佛を念じて極樂淨土に生せんと欲はゞ、心散亂せずして生ずることを得。

(三)遍智院 義範  
なり。

○一字金輪法 (三)遍智院僧都は息災に之を行じ、前の理趣房は増益に之を修す。

○道場觀 觀想せよ、壇の上に香水の大海有り、海の中に妙高山有り、山の頂に白

色の蓮花有り、一一の葉の上に右に旋つて輪王の七寶を布列す。金・銀・象馬・珠・中臺に

勃嚙ゴロム有り、則ち八輻輪と爲る、輪變じて大日如來一字頂輪王と成る、智拳印を持す、前の第一葉に佛眼尊を想へ、十佛頂の眷屬圍繞せり。

儀軌に曰く、即ち此の智輪を觀せよ、變じて金輪王遍照如來の身と成る、形服素月の如し、一切の相好を以つて、用ひて法身を莊嚴して金剛の寶冠を戴けり、輪鬘を首飾と爲す、衆寶莊嚴の具、種種に身を交飾し、智拳の大印を持して、師子座の日輪白蓮臺に處す。文

(三)大日金輪と釋迦金輪の形像各別か、又大日金輪の身は金色にして五佛の寶冠を戴き、衆寶莊嚴常の如し、結跏趺坐して、左の手の掌を仰けて心に當て輪を置き、右の手施無畏に作す。釋迦金輪佛の形像は釋迦の像の如く、法界定印に作して臍の上に當て、輪を置く。大日金輪は法身、釋迦金輪は應身或は化身なり、我と檀越と冥會して同一體と成つて護摩に著す。

○(三)根本印 二手、右左を押して内に相ひ又へ、直ぐ二光を立て、頭し柱へ、上節を屈して銀の如くして、眞言に曰く 曩莫三滿多沒駄曩勃嚙ゴロム ○又智拳印之を用ふ。 ○又印此の印は秘印なり

(二)大日金輪は金色にして、今も金色にして、故に大日金輪なり、大日金輪の胎藏の大日金輪なり  
(三)根本印 大日金輪釋迦金輪の二に通ずる印なり  
(三)二輪云云 爪の上へ二頭を置く意なり

(一) 唵摩云云 深孔  
雀明王を用ふる  
秘あること玄秘  
に出づ。  
(二) 小野鈔 小野  
の厚造紙に出づ。  
此の略法なり。  
(三) 辨事云云 此  
の印の功力に由り  
て八佛頂の障を除  
く、況んや天龍八  
部の障りは自ら除  
く故に結界なり。  
(四) 普供の明妃  
なる故に轉明妃な  
り。  
(五) 佛慈護 文殊  
慈護とも佛慈護と  
もいふ。  
(六) 頂輪王 本尊  
加持なり。  
(七) 二羽内縛 口  
傳の羽打の印を用  
ふ外縛なり。  
(八) 三摩耶 四種  
に通ず。  
(九) 無能勝云云  
一字金輪には無能  
勝を以て辨事の尊  
と爲す、無能勝と  
釋迦金輪と同體の  
故なり、師となす  
は尊となすと云ふ  
意なり。

御傳云云私に曰く、集經に有る印か。大佛頂法にも此の印を用ふ。内縛して二中指立て合はせ二頭(一)唵摩瑜  
指を以つて二中指の背に付く、但し少し許り相ひ去るなり、二大指並べ申べて無名指を押す。(二)唵摩瑜  
遷乞覽底勃嚕唵、娑縛賀。一字の金を打つ所に、大日の眞言歸命の句を加ふを用ふ。曩莫薩縛  
沒馱胃地薩怛縛二南、阿尾羅吽欠。○御加持の時は辨事佛頂の眞言を用ふ。曩莫三  
曼多沒馱南、唵吒嚕唵三滿馱、娑縛訶。○金輪王通諸佛頂念誦法野鈔 佛部心、蓮花  
部心、金剛部心、被甲護身。○辨事佛頂一字避除二手内縛拳、二大指掌に入れ、二中指直  
至る所、結界となる、故に一切佛頂の法 唵砧滿馱、娑縛賀。○次に闍伽。○次に普供の  
事破す、天龍八部怖れ走る。云云。唵砧滿馱、娑縛賀。○次に闍伽。○次に普供の  
明胎。○三方偈。○次に佛慈護の印。十度相ひ又へて月に作り、禪智。○次に佛眼  
印明常の如。○次に頂輪王内縛、二中指直く立て、鉤形の如くして、二 唵所求一切の事を祈請す  
明王の呪を。○次に孔雀明王の印を結べ二二羽内縛、檀惠禪智直く立て端し相ひ跏へ、  
加ふべし。勃嚕唵。○次に孔雀明王の印を結べ、頂輪王と共に此の眞言の句を加誦すべし。  
唵摩瑜遷乞覽底勃嚕唵、娑縛賀。若し尋常の持念一字頂輪王の眞言を以てせば、須  
く別に孔雀明王の眞言を誦せよ、亦須く別に此の加句の法を誦す、親たり阿闍梨の所に  
於て口傳を以つて之を授かれ、修瑜伽者之を知れ、(三)三摩耶は等持平等攝持を義と爲  
す、即ち入我我入に名を得、又は誓約と名づく。一字の軌に曰く、(四)無能勝を師と  
す。同軌鈔に曰く佛眼の印を結び、密言を誦して身を加持す。文 又無能勝の密言を以

(一) 印明 此れ無  
能勝大口の印、即  
ち口を開きたる形  
なり。  
(二) 必ず云云 散  
念誦に誦せよとい  
ふ事なり。  
(三) 佛眼法 道場  
觀の印に種々あれ  
ども今は如來拳印  
なり。

て、身の五處を印す。○印明八指右左を押して掌内に各々交へ合せよ、大指を開き離しく  
屈して、少し頭指の側りを離れて、心密言を誦せよ。呼  
○部主段 孔雀明王 或は佛眼 凡そ此法には此の兩尊を以て相應とす、然らば  
此等の眞言は(一)必ず誦すべきなり。  
○佛眼法 息災に之  
○道場觀此れより以前の  
作法は常の如し 樓閣の中に曼荼羅あり、内に紇哩字有り三重の八葉と成る、  
上に阿字有り月輪と成る、上に紇哩字有り蓮花と成る、上に嚕字有り佛眼明妃と成る  
身水精色の如し、五佛の冠を戴いて法界定印に住す、内重の八葉の前に勃嚕唵有り金  
輪尊と成る、右に廻つて七曜使者有り、第二重は前に金剛手より始めて、右に旋つて  
八大菩薩有り、第三重は前より右に旋つて步擲等の八大明王有り、此の院は四攝八供  
等圍繞せり。

(四) 佛頂眼 如來  
の御首なり。此の  
御首に五眼の功德  
あることなり。  
(五) 印明等 常の  
五眼の印にして右  
の頭指を三度召く  
明は上の歸命云云  
三反、玄秘鈔に出  
づ。  
(六) 請金輪 勝身  
三摩耶の印にして  
風に召く也。  
(七) 步擲等 金剛  
合掌。  
(八) 金剛王 諸尊  
を召請する也、以  
上迄の印明は玄秘  
に出たり。

○次に如來拳印七處を  
加持す。○或種子。○三形。○佛頂眼。○次に大虛空藏。○次に  
小金剛輪。○次に送車輅。○次に請車輅。○次に請本尊。歸命嚕嚕囉囉。○印・明・等  
○次に請金輪。勃嚕唵嚕囉囉。○次に七曜惣呪印。○次に金剛手印明。○次に八  
大菩薩惣請。○次に步擲等。○次に八大明王。○次に金剛王。○次に四攝並に  
拍掌



(一) 拳印 二拳、右を覆せ左を仰げ重ぬ。

(二) 大咲印 下の注に二頭相柱ふとあれども來去の時去するなり來去するなり  
(三) 大輪印 印は小金剛輪の印なり  
(四) 小輪印 印は小金剛輪の印なり  
(五) 無能勝 二頭合して圓にする印

○次に不動結界。○次に金剛網。○次に火院。○次に大三摩耶。○次に闍伽。○次に花座。○次に振鈴。○次に四攝・八供・並に現供・讚・禮佛等。○次に本尊印。五眼印、眞言常の如し  
○次に金輪印。○七曜別呪印。或は惣呪印意に任す。○次に金剛手・五股印・歸命・呼。○次に文殊・梵篋印・暗。○次に虚空藏・寶印・怛洛。○次に轉法輪・小金剛輪印。○次に摧魔怨・普賢三昧耶印・迦・八大明王・印・眞言。○次に步擲通印・唵、頤哩、部嚩唵、吒嚩呬、輪嚩呬。○次に降三世・唵蘇婆囉蘇婆唎縛曰羅吽吽。○次に大威德内縛二火合 唵吽惡吽。○次に(三)大咲印。先づ中指を以つて各々二無名指の背の上に惹り在り、二寸許り、二大母指二無名指の第二の節の側の文を押して無名指頭しを柱へ二小指頭しを開いて直く立て相ひ去る、と腕を合はせ、二頭指屈して頭し柱へて、頭指を來去す。 唵縛曰羅阿吒訶沙吽吽。○次に(三)大輪印。二手金剛拳にして檀惠と進力と四度互に鉤結す。 唵縛曰羅遮羯羅吽。○次に馬頭印。常の如し 唵賀耶呬里波吽吽吽吽。○次に(四)無能勝。虚心合掌して十輪の端し相ひ柱へ密合ならしむ。 唵戶魯戶魯戰擊里摩路者吽吽吽。○次に不動印。常の如し 唵阿遮羅迦娜戰擊薩野吽吽。○吉祥成就印。内縛して申べ立て、二頭指を以つて二中指の背を捻す。二大指を並べ立つ。 唵縛曰羅室利、吉祥、摩訶大室利、白、阿彌底也室利、日、素摩室利、月、央誡羅迦室利、火、沒羅賀沙跋底室利、木、戊羯羅室利、金、舍彌始者縛始

(一) 破宿曜障印 文殊と佛眼と同體なり、金剛吉祥に諸宿曜の印を破り、宿曜の崇を止むるなり。  
(二) 小野の説 小野の厚雙紙に出づ。

(三) 初鈴 振鈴のこと。

(四) 範 範俊。

(五) 靈巖寺 圓行なり。

(六) 經 瑜祇經。

制帝室利、土、摩訶大、三摩曳、普、室利、大普賢吉、娑婆訶。○次に(一)破宿曜障印。内縛、二大指を出して固く、明に曰く、薩縛那乞叉但羅囉、三摩曳、室利曳、扇底迦維息、戶嚩也、娑婆賀、宿曜一切不祥の印言と名づく 以上二種の眞言は散念誦に尤も誦すべし。○次に入我我入。○正念誦。  
○本尊加持。○散念誦。○五供養等常の如し。○(二)小野の説。金輪佛頂の所に一字の印明、八大菩薩の所に金剛手の印明、八大明王の所に步擲明王の印明、或は不動之を用ふ。護摩の部主には金輪、諸尊七曜、並に八大菩薩、八大明王、八大菩薩には、或る説は一切菩薩の眞言之を用ひ、八大明王は胎藏一切持金剛の呪之を用ふ。  
三寶院權僧正は、金剛界に就て此の法を修し玉ふ。仍つて(三)初鈴以前には、伴僧は金剛界大日の眞言、振鈴後には本尊佛眼の呪、御加持には本尊の呪なり。鳥羽僧正(四)範は胎藏に依つて之を行じ給ふ。初鈴以前に伴僧は胎藏大日、阿・尾・羅・吽・欠・の眞言なり。彼の僧正の傳に曰く、胎藏に依つて之を修するは勝る、説なり。文(五)靈巖寺口傳に曰く、佛母の種子は室利、五眼の契五股杵、印は虚心合掌して、二大を月に入れ、二頭指二小指、立て開いて五股杵の形の如くす、眞言は(六)經の如し。大聖妙吉祥説除灾教法に曰く、前に當つて佛眼尊、左に五眼の契を持し右は如來拳に作る。

付紙に曰く、五股を五眼と観ず中股 善提場所説一字頂輪王經二に曰く、應に佛眼明妃を畫く  
已に眼なり如來拳とは胎拳なり。 べし形ち女天の如し、寶蓮花に坐して種種に莊嚴す、身金色の如し、目に衆會を覩て、  
輕殺の衣を著て肩に絡いて被る、右の手に如意寶を持し、左の手の施願に圓かなる  
光明あり、身儀寂靜なり。云云

○普賢延命

(一)如意寶 一字  
頂輪儀軌に由りて  
如意寶を三形とな  
すことなり、寶珠  
は眼の形なり、眼  
は心を表する故  
に。  
(二)身儀寂靜 定  
印に住すること。  
(三)或る鈔 金剛  
智の口決を大師記  
し玉ふなり。  
(四)五智聚集云云  
五智合體の身な  
り、理趣經の大樂  
金剛に同じ。  
(五)四波羅蜜云云  
此の宮は四攝とな  
す、今は此の傳に  
由る、四攝と十六  
尊とを廿臂とな  
す。  
(六)三世常住云云  
壽命經の説に由る  
短命の業は一佛の  
力に由らば轉じ難  
き故に三世諸佛合  
體の尊を本尊とな  
すなり。

(三)或る鈔に曰く、金剛智三藏曰く、金剛壽命薩埵智身とは、五智聚集して大樂金剛  
薩埵と爲る、四波羅蜜十六尊を以て而も手臂と爲し、五分法身を而も寶冠と爲す、  
定の十手、掌惠の十手、各各手毎に十波羅蜜なり、内の四供養を而も禪悅と爲す、外  
の四供養を而も法喜と爲す、四攝方便三世諸佛を毛孔と爲す、額已上は過去の千佛、  
心已上は現在の千佛、心已下は未來の千佛、之を以て三世常住金剛壽命薩埵の智身  
と號す。 秘密明讚に曰く、唵縛曰羅合 羅細 摩訶燥契耶 樂者 縛曰羅合 唵勢摩訶  
唵灑命 縛曰羅合 惹憐多摩訶惹憐底 縛曰羅合 毘唵摩訶毘耶 不 唵砢欲義謨率都 二  
帝。 毘唵とは不可得不老、唵とは不死及び不 唵 三身佛 砢法眼 欲惠眼  
老不死の義常住不滅滿足の義なり。 唵 佛寶 砢法寶 欲僧寶 ○讚、或は金剛薩  
埵の讚之を用ふ。

○道場觀

壇の上に八輻の金輪あり、上に哦字有り白象王と成る 七千の象を以て眷屬とす 象王の  
上に紇哩字有り八葉の蓮花と成る、蓮花の上に唵字有り金剛甲冑と成る、甲冑變じて  
延命菩薩と成る、身色黄金なり、又大樂金剛不空眞實と名づく、惣じて五部の諸尊を  
攝す、二十臂に而も十六大菩薩四攝の三摩耶を持す。 惡世衆生の生死の長夜を驚か  
し、天死短命を除いて持念者と俱に盡虚空諸尊の加被を蒙り、過現未來の惡業一時に  
消滅し、無量の福壽を増長す。

○普賢延命印

二手各々金剛拳に作り、仰け並べて二頭指相ひ鉤して心に當つ 眞言に曰く 唵縛曰羅唵灑、娑縛賀 ○  
金剛壽命加持甲冑密印 前印に同じ、但し結冑印の如く處々を相ひ結ぶ ○護身破甲眞言に曰く 唵砢縛曰羅欲

三十卷教王經第十四に、降三世、大自在天を伏して放釋せしむる文に曰く、大自在天

活命を得る故に、一切如來の心より是の大明を出して曰く、唵縛曰羅薩埵吽弱。 印あり

彼の經の功能に曰く、去識還來して活命を得。 已上 略鈔 ○普賢延命形像。 天台の本は

一身四頭の象に乗る。小野僧正所持の本は四頭の象に乗り、象の頭に四天王立てり。

小野成尊僧都曰く、四の象に乗ることは生老病死の四苦を對治するを表す。○部主

段 無量壽佛 ○諸尊段 七十三 三寶院權僧正、左衛督 通 の祈に普賢延命の法を修せしむ、

(二)或云 降三  
世之用ある活命の  
義之れある故なり  
深秘に云く此の  
部主降三世を用ふ  
の秘事を斷ずる降  
三世なる故に今降  
三世の障を消滅せ  
ざれば延命となり  
離し。

二 伴僧云云 伴僧二十口の時は十口は壽命經を讀み誦すること。

三 大僧正御房 定海のこと。 四 内の御祈 裏のこと。

二 伴僧中分して壽命經を讀む。 金剛 智譯 ○御加持は降三世真言、長承二年二月日、白河殿に於て院の御祈に、仁和寺の宮此法を修し玉ふ時、天蓋に八色の幡を懸け、佛前と大壇の間に輪燈を立て四十九燈を燃す、伴僧は金剛智譯の經を讀む、御加持は延命の真言なり。 三 大僧正御房。 四 内の御祈に此法を修す、伴僧を中分して呪を誦し不空譯の經を讀ましむ。 (符紙)内の御祈とは即ち内裏の御願なり。 唵縛曰羅喻瀧弱吽鍍斛、貞真には貞を眞に作る。 成、消災延命娑縛賀、南謨普賢唵延命菩薩摩訶薩、滅除九橫死、壽命增長福德滿足の誓願なり。 以上二真言増加の句、御筆の本を以つて之を書す。或が曰く、欲は是れ諸乘不可得の義、乘は則ち運載の義、運載は是れ延命增長の義、謂く近より遠に至るなり、所以に延命の種子と爲すか。

私に曰く、天蓋を用ふること便宜ならず、輪燈を立つる故に燈火の爲めに危きか、隨つて經文に見えず、又先徳も多くは用ひざるか。

〇〇八字文殊災

〇種子滿 〇三形劍、或は青蓮の上に五股 又は三股 五股か

〇眞言云云 四種五種の法に隨て加ふべきなり。

〇印 師説に曰く、内縛して二大指を並べ立て、屈して師子口の如くす。 唵惡尾羅吽欠左洛、滿。此の如く 眞言の終りに種子の滿を加へて之を誦す。 但し事に隨つて加

二 口傳 支移鈔なり、四種五種に由りて替れども通が深秘なり、用ふるば千手の四十種へも持物所求に隨へどと實珠を通じ用ふると同じ事なり。

三 妙吉祥童子 四方は皆童子にして中尊のみ尊形にして尊なり、愛染の如し。 十七尊の曼茶羅の

誦すべし、是れ二口傳なり。

儀軌に曰く、其の曼茶羅の法は、先づ心に當て、一の圓輪を作せし滿月の如し、中心に當つて滿字を書せ、次に字の後より北面に唵字を書せ、次に右に旋つて東北の角に阿入字を書せ、東方に味字、東南の角に囉字、南方に咍字、西南の角に佉字、西方に左字、西北の角に嚩字、此九字を以て内院の中尊と爲す、或は院中に於て 三 妙吉祥童子を書せ、其の頂に入髻あり、若し福慶祿位吉祥の事を求めば、心中に室利二字を書せ、若し息災除難を求めば七種の災難を殄滅す、所謂る、日月薄蝕五星常の度を違失し、兵賊競ひ起り、水旱時ならず、風雨度を失し惡臣背逆して國民を損害し、武狼惡獸衆生を食噉し五穀登らず、此の如くの災禍急厄官府王難死厄怖怖等の事を消散せしめんと欲は、心中に當つて滿字を書せ、若し怨人を降伏し惡心を捨つることを好ましめんことを求めば、中心に而も淡字を書せ、若し惡人有つて降伏し難く、屠兒獵師及び外道、佛法を信せざる者惡心を摧滅せしめ或は破壊せしめんには、心中に梵字の瑟置利字を書すべし。文 或傳に曰く、部主には馬頭、諸尊段は八大童子。文

三 文殊 此は通用の文殊なり。

〇〇〇三 文殊 五字、八字、一各別の法

國譯厚造紙

(一) 八字文殊 此  
あり此に出さず  
(二) 眞言云云 此  
は事に隨て加ふ  
ども先は深秘な  
りし用ふるは手  
を出すが如し  
(三) 藥師 息災と  
増益と二通なり  
除病の時息災に  
修し延命の時増  
益に修するなり  
即ち藥師の印は  
なり藥之能く勝  
藥師の印を以て  
生(言)像法云云  
の中未法を能く  
るなり  
(五) 律師云云 義  
廣羅耶の呪なり  
此は慈覺の傳な  
ども慈覺の眞言  
なる故に眞言之  
を用ひ玉ふに  
には御加持に用  
(六) 阿闍梨 此の  
は釋迦藥師の種  
と同體の故なり  
闍梨

○種子阿、又は滿。 ○三形、青蓮花、又は書篋。 ○根本印虛心合掌して、火、水を押し風を扇して空の甲を捻す  
○五字眞言 唵阿羅縛左那 ○曼殊室利一字陀羅尼五字の軌 輪 五字文殊は  
首べに五髻有り、(一)八字には八髻有り。 八字の法には妙吉祥破宿曜障の印言尤も用  
ふべし、是れ相應の故に、八字眞言は八大童子の種子に充つ、仍て中尊の種子を加へ  
て誦すべきなり。(二)眞言の末には常に輪字を加へ、又事 或傳に曰く、八大童子の惣印に  
は、八葉の印之を用ふ。文 ○妙吉祥破諸宿曜障の印指節を痛くして  
乞叉但羅三摩曳室利曳、娑縛賀  
○〇〇〇〇 藥師

○種子佩 ○三昧耶形は所持の瑠璃壺なり。是れ藥器なり ○(四)印二羽内縛、禪智を立て、來去せよ。 ○眞言  
又口に曰く、定の手臍輪に仰け、惠の手を上に乗ね是れ釋迦の鉢印なり。 藥器有りと想へ、爲め  
に能く衆生の病を除く。文 鉢の印の觀、又此鉢の中に十二大の妙藥有りと想へ、此藥を以つて像法轉時の衆生の病を療治す。文 小野僧正は御加持に大呪を用ふ。此の門流に  
の由傳へ(五)律師は十二神將の呪なり。但し時に隨ふべし。或が曰く、無能勝藥師、釋迦藥師、種子は(六)吽、三形は五股、印は佛部の印、眞言は戶嚙戶嚙の呪なり。文 是れ

(一) 六字經法 下  
記の弓矢は古の法  
なり。後に玄秘鈔  
に従ふ。

(三) 近來云云 上  
代は結線座に高座  
を用ふ。後には禮  
盤を用ふ。施主に  
も持たさず伴僧の  
内に持せ結ぶなり  
(四) 驚覺云云 金  
剛起の印、金剛持  
は金剛持通稱な  
り。  
(五) 定印 彌陀の  
定印。  
(六) 寶山王 須彌  
山のこと。

無能勝藥師か、釋迦の鉢の印等之を用ふ、是を釋迦藥師と云ふか。

○〇〇〇 六字經法 先づ行者虔誠の心を發し道場を莊嚴し、調伏相應の香花を辨備すべ  
し、四肘の壇を建て、三角の爐を塗爐唇の廻りに矢七簇。 桑の弓一に葦の箭七を各々  
結び付けて、三具は佛前に置き、四具は爐の左右、各々二具之を置く、或は件の弓矢  
爐を廻らして順に之を置く、若し兩壇の作法ならば、七の弓矢を大壇に置くべきか。  
並に桑の弓七 又箭四簇を壇の四方に立て五色を引き、矢を以つて 大弓一張、矢八、太  
刀一を、阿闍梨の左邊に之を立て置け。或は便宜に隨つて本尊の左右又は阿闍梨の左右に之を置く又  
の料なり。 又壇邊禮盤の外に、別に高座を説く。但し(三)近來は之を用ひず、此れ師傳なり。 ○先づ上堂觀行當の  
○次に普禮 ○次に著座 ○次に塗香 ○次に淨三業、三部被甲等常の ○次に(三)加持香水、  
灑淨、加持供具。 ○次に(三)驚覺及び金剛持等 ○次に神分、祈願。 ○次に五悔 ○次に  
勸請。發願 五大願 ○次に四無量觀 ○勝願 ○次に大金剛輪 ○次に地結 ○次に四方結  
○道場觀 (四)定印を結んで臍下に當て、觀ぜよ、鏝字有り八功德水と爲る、廣く法  
界に遍して崖際有ること無し、其の水の中に劍字有り變じて(五)寶山王と成る、四寶所  
成なり、其の上に大樓閣有り高うして中邊無し、諸の妙寶王を以て種種に嚴飾せり、

(二) 觀自在云云  
正觀音本尊とす  
なり、六観音に本  
尊とするは醍醐な  
り、黒六字を本尊  
とするは勸修寺な  
り、此の法の本尊  
説なり。  
(三) 順逆 逆順を  
正しとなす、先に  
轉ずるは辟除後に  
轉ずるは結界なり

(三) 月に入れ  
縛、此れ内三股印

(四) 右に合云云  
世間の左廻とする  
なり。

(五) 彼は人門云云  
施主。

其の中に訖哩字有り變じて蓮花と成る、獨股の蓋の蓮か蓮花變じて(二)觀自在菩薩と成る、及び蓮花部の聖衆皆壇上に在り、乃至天龍八部前後に圍繞せり。如來拳印七處加持 唵歩欠  
○次に大虚空藏○次に小金剛輪○次に送車輅○次に請車輅○次に召請印二羽内縛、右の大指鉤の如くして之を召 唵阿嚕力迦噠囉吽、莎呵 ○次に四明、並に拍掌○次に馬頭印明(三)順逆 ○次に金剛網○次に火院○次に大三昧耶○次に闕伽○次に花座○次に振鈴○次に五供養印明、並に事供○次に讚○次に普供養、三力○次に禮佛○次に入我我入○次に根本印二小指二無名指又へて三月に入れ、二中指直く立て、頭し相ひ註へて、風を以つて二中指の背に着け、二大指を以つて二無名指を押す。但し少し之を付けず。 ○秘印、觀宿僧都の傳  
○次に念珠を取つて眞言を誦せよ、百八を満する毎に一結して則ち香水を病者に灑ぐ、百結既に了らば施主を退かして線法を用ふ、便ち白線十四條を以つて一の繩となし七を一片とす、兩片の十四條を(四)右に合せて繩とす、三尺五寸を法とす、師は三尺五寸を以つて百線を爲す、足らざれば四五尺を以ふるも亦得るなり、師は鬼門(五)實に向ひ(五)彼は人門未(五)未に向ふ、糸を以つて施主の無名指に繋げ、男は左、女は右師は右の無名指に

(二) 金輪云云息  
災は金輪調伏は馬頭。

繋ぐ、男女の別を論せず百返一結萬返百結、其の結線を以つて經所説の如く施主の身に着せしむべし。古様は高座に登つて結線す。近來は高座を用ひず。 或る傳に曰く、一時に萬返は満し難し、然らば伴僧と共に満すべきか、用意をなすべし。文 又百返を竟る毎に結線して、香水を施主に灑ぐ、若し施主來らずんば衣服を置いて之を灑ぐ。委くは別の念誦了る。結線は一時に三十六結の員なり、其の證は驗記に見ゆ。 ○次に護摩、第一火天段(常)常 第二部主段(一字)一字(二)金輪或は馬頭、秘説に曰く、大成徳 第三本尊段(正觀音或は千手) 供物(當)當 調伏の法、乳木(二束)二束(百八支)廿一支 皆葦の箭之を用ふ、藥種相應物(常)常 之を供す  
○次に三類形、天狐(七) 地狐(七) 人形(七) 之を焼くに多の口傳あり、繁に依つて要を取つて之を略鈔す、形を加持する時、其の所用眞言の終りに一字の眞言物嚕唵を加へ、次に四字の明を加へ、次に未怒沙の號を稱し、次に捨親嚕唵を加へ、怨家を召入するなり次に破壞の言を加へよ、泮吒の字なり、後に娑縛賀と稱す、鉤召の印を結んで彼の怨家を召入するなり 次に召罪の印眞言、摧罪の印眞言をもて之を結誦し、次に降三世の印言を以て之を加持し後之を焼く、先づ天狐次に地狐次に人形なり、(北首)北首 或傳に曰く、三類形各々三枚を火天段に焼き、各々四枚を本尊段に焼く。文 但し便宜に隨つて、各々七を皆本尊段に之を焼くを能しとす。○三類形を作る事 近代は紙を以て之を摺り用ふ之れ宜し。 ○未怒沙を作る法 或

(二)他人云云 此の法を修すること怨家の知れざる様にする事なり

(三)是れ人身云云 是れ調伏の肝要なり此の法は四無量觀に住して修することなり此の法を修すれば施す家又は怨家稍もすれば死すること之れある故なり

が曰く、諸人往還地の黒泥を以つて毒藥等に和して之を作る、臍に腫の糞を裹み朱墨を以つて姓名を題す。文 軌に曰く、天狐<sup>七</sup>地狐<sup>七</sup>人形<sup>七</sup>各々麴を以つて藥に染めて之を作る、慎んで他人に知らしむること勿れ、又墨を以て其の呪咀怨家の姓名を書き著けよ、若し姓名を知らざれば其の字<sup>イナナ</sup>を書せ、亦字を知らざれば其の在處乃至國郡郷、其宅其の條其の坊の男女と注るせ、先づ天狐を焼き、次に地狐を焼き、次に人形を焼け、能く内護摩して爐に投せよ、(三)是れ人身を損し其命根を斷すと云ふに非らず、但だ其の所作の惡事を燒滅し、成就せしめずんば彼の種種の不善、貪瞋癡を本として起す所の妄想分別の垢を消滅して、復た動作せざらんが爲めなり、心に慈心を懷いて能く内護摩の義を觀練すべきなり、調伏の法を作すには慈心を先と爲す、内に慈悲無くんば自ら損し他を損す、佛意を識らすんば何ぞ護摩に堪へんや、之を思ふて燒き了れ、亦た曰く、三類形等を燒きし灰、少し許りを取つて漿<sup>コンズ</sup>を和して彼に服せしめよ、酒に和すべからず、然して彼に之を知らしめざれ、師獨り之を知るのみ。文

○次に三類形を爐に投じて、其の上を三度矢を以て射了つて後、東西南北天地之を射る、是れ秘説なり。普通作法の護摩は世天段了つて後、四方並に上下之を射て結界となす。

是れ常の様なり、須らく大なる弓矢を以て之を射るべし。然れども頻しき故に近代は小弓を以て之を射る。云云 ○次に芥子(付紙)是れ加持物なり。 ○第四諸尊段

六觀音、不動、大威徳 ○第五普世天段常の如し、但し天等の末に呪咀神等を勸請して供すべし。眞言之なし、其の名字等を稱す、是れ秘説なり。 ○次に本尊印眞言 ○次に讀經本 ○次に散念誦六觀音、不動、大威徳、孔雀明王、一字。 ○次に後供養 ○後鈴 ○讚 ○普供養 ○禮佛 ○廻向 ○解界 ○奉送 ○勸請 本尊六字觀世音、四大八大諸忿怒。 六字法に、

觀宿僧都、明仙僧都の兩傳有り、明仙の傳は、中臺金輪の廻りに六觀音の曼荼羅を畫く。觀宿の傳は、中臺並に廻りは明仙の傳に同じ、而して曼荼羅の下の不動と大威徳の中間に小の月輪を畫く、其廻りに六體の天形合掌せるを畫く、其内三體は梵字を以て名を書す、是れ小野僧正圖し加へ玉ふ所なり、其の意趣は委しく口傳に在り、謂く呪咀神等を書するなり、下の小月輪は是れ鏡か、觀音持鏡の事、瑜祇經に見えたり。

本鈔には小野流曼荼羅の圖等有れども茲に略す。

○六字明王(二)説所知らず、故に人多く之に迷ふ、而るに近比、初めて莊嚴寶王經に出ることを知れり。 莊嚴寶王經齋然に曰く、此の曼荼羅の相は、周圍四方各々五肘量にして、中心に無量壽を安立す、無量壽如來の右の邊りに大摩尼寶菩薩を安持す、佛の左の邊りに於て六字大明王を安す、四臂にして肉色なり、日月色にして種種の寶を以て莊嚴せり、左の手に蓮花を持し、蓮花の上に於て

(二)説所云云 本儀軌未渡以前は種々の疑ありて六字明王を知らざりしをいふ、然も慈覺十二年在唐の内此の明王の儀軌翻譯なし故に圖のみ請來せり、故に説所を知らずといふ。

(二) 二手云云。六  
幅輪の印なり。

(三) 唵摩拏云云  
此の眞言は三部の  
眞言にして光明眞  
言の三部に同じ。

中に摩尼寶を安す、右の手に數珠を持し、下の(二)二手は一切王の印を結び、六字大明  
王の足下に於て、天人を安す種種に莊嚴せり、右の手に香爐を執り、左の手の掌は鉢  
に諸の寶を滿ち盛れり、曼拏羅の四角に於て四大天王を列ぬ種種の器械を執持せり、  
曼拏羅の外の四角に於て四の寶瓶を安して、摩尼寶を滿ち盛れり。略鈔、但し世流布の  
像は頗る之に違す。  
○六字大明王陀羅尼に曰く、(三)唵摩拏鉢訥銘二吽引一 彼經に種々の功能を説けり見る  
べし。繁文を厭ふて略鈔す。 經に  
曰く、蓮上の如來、此の六字大明王陀羅尼の功德を説いて言はく、善男子所有の微塵  
我れ能く數量を數ふ、善男子若し此の六字大明王陀羅尼一返を念することあれば、獲  
る所の功德は而も我れ其の數量を數ふること能はず、善男子又大海所有の砂數の如く、  
我れ能く其の一一の數量を數ふ、若し六字大明一返を念じて、獲る所の功德は而も我  
れ數へ量ること能はず、乃至南瞻部洲所有の大河恒誼河等、多くの河有り  
之を略す。 此の一一の河  
に各と五千眷屬の小河有り、晝夜に大海に流れ入る、此の如くの一の滴數我れ能く  
其れ數量す、若し此の六字大明一返を念じて獲る所の功德は而も我れ數へ量ること能  
はず云云 又曰く、此の六字大明陀羅尼を説く時に、四大洲並に諸の天宮悉く皆震  
搖して、四大海の水騰湧す、一切の尾那藥叉羅刹婆等、並に諸眷屬諸の魔作障の者の

悉く皆怖散馳走す云云 又曰く、若し人有つて此の六字大明陀羅尼を書寫せば、則ち  
四萬四千の法藏を書寫するに同ふして而も異なること無し、若し人有つて天の金寶を  
以て微塵數の如き、如來應正等覺の形像を造作し供養して所獲の果報、此の六字大明  
陀羅尼の中の一字を書寫して、獲る所の果報の功德には如かず。又曰く、此の六字大  
明陀羅尼を念すれば、是の人當さに三摩地を得べし、所謂る持摩尼寶三摩地、廣博三  
摩地、清淨地獄傍生三摩地、金剛甲冑三摩地、乃至遠離貪瞋癡三摩地等、都べて百八  
の三摩地を説けり、茲に略す。

○六字神呪王經呪咀退却敬愛成就法に曰く、次に六字の像を説かん、身相青黑色にし  
て四臂を具す、左第一の手に太刀を持し、第二の手に日輪を挙げ、右第一の手に  
は鉢を持し、第二の手に月輪を舉ぐ大暴惡の相なり。文同書に又の印を説く、眞言は當  
の如し二 又(三)如法相應成就の法六觀音  
に付くを説く。 或傳に曰く、六字明王の種子は(四)  
三形は弓、印は觀宿の印を用ふ。文 莊嚴寶王經に出づる六字明王の種子は(五)  
眞言は彼の經に説けり、私に之を注す、唵歸命の義  
三身の義  
摩尼寶  
鉢訥銘蓮花  
吽金剛部調  
伏の義

○正念誦 正觀音眞言、次に六字の呪、又寶王經の眞言上の 結線は或は伴僧の中

(一) 觀宿の印 夢  
中感得の印なり。  
(二) 如法相應云云  
此は六觀音の軌な  
り。

(二)成身會振鈴の次に三十七行ず、此法を長けり。随分丁寧に行ず可きことなり。(三)金色云々未練の行者は孔雀の全體を金色とするは宜しからず。毛筋細く之れあり皆金色にすれば惡し。此の法は此の卷の二本あり、共に秘卷の通は傳へず。醍醐には此を當流の聖教の様を當流の次第なり。御流具緣葉毒葉なり。(四)根本印内左の時右の指を左の大指の上にするなり。此は當流と餘院とばかりなり。右の大指の上と爲るなり。正流なり。

にて之を結す。

○孔雀經法(成身會に付いて之を行ず、息災)

○道場觀 壇上に金色の孔雀有り、孔雀の上に白色の蓮花有り、蓮花の上に喩字有り字變じて孔雀の尾と成る、尾變じて孔雀明王と成る、慈悲の相に住して四臂を具せり、右邊の第一の手には開敷蓮花を執り、第二の手には具緣葉を持す、左第一の手は心に當て、掌に吉祥菓を持す、第二には三五莖の孔雀尾を執る、七佛慈氏、四避支佛、四大聲聞、八方天王、二十八部夜叉大將、諸鬼神衆、並に宿曜十二宮神等、前後に圍繞す。

○根本印二手右、左を押して内に相ひ又へて二大

眞言に曰く 唵引 麼庾引 羅引 訖蘭引

帝、娑縛引二合 訶引一

○秘印善無畏

外縛、二大指二小指立て合はす。師説に曰く、

此の印は孔雀の形なり、二大指は頭の如く、二小指は尾の如し、戒忍進方願力の六指外に又へて二羽の如く之を動す、翼を動するは無量の不祥を掃ひ無量の願を招くと思へ。○種子鏤、三形、孔雀尾の上に半月並に圓滿形を置く。口に曰く、日月の七日より十五日に至つて、半月の形一日二日乃至七日に致つて圓滿する如し、悉地を成

就せざること無し、故に圓形半形を置くなり、七日の中に必ず成就を爲す法なり。

私に曰く、鏤字を以て種子となすは大日經に依る、又有情乃至非情皆水潤を以て命となす、水を失すれば枯散す、水は物を持する故か、悉しくは教王經開題に見えたり。

大壇の中瓶には孔雀の尾五莖之を立つ、火舎には沈香を焼く、東に白脇香を焼く、南に紫鑛芥子、鹽をを焼く、西に安息香蘇を以て之を焼く、北に薰陸香を焼く、以上五名香は禪林の軌に見若し紫鑛なき時は、湯黄ユウワウと鹽と芥子とを舂き和合して之を焼く。御傳たり。或は

中央の火舎に五名香を塗り續けて之を焼く。○護摩 ○部主 金輪、又は無能勝

○諸尊段 七佛種子阿、三形五股。○慈氏種子、喩 ○三形、蓮上迅疾印 ○七

佛印普明。一切佛心の明を用ふ、胎藏に有り。 ○慈氏印眞言常の勸請常の 教令輪者の次に唱へて曰

く、大孔雀明王慈悲尊、七佛慈氏諸聖衆 或る様 歸命、摩訶毘盧遮那佛 毘

鉢尸等諸如來 慈氏菩薩諸大士 摩訶摩訶利弼底也囉惹阿難陀等諸聖衆 釋梵

二天四天衆 二十八部藥叉將 羅刹婆等諸龍王 山河王諸仙人 十二宮神

本命星 七曜九執諸宿曜 半支伽大將諸護法 訶梨帝母諸眷屬 外金剛部諸

(五)秘印 此れ口傳の印。此の月の七日云々(六)此の法は兎角七日成就の法なり。此の圓形半形とは此の法は朔日開白結願す、八日に至り成就す、十五日に開白して十五日に開白圓形半形といふ。此の次に曼荼羅の圖あるも之を略す、次に圖後の文を掲





(二) 五大尊、部主段には大  
 誦佛眼、大日、修習般若真言、經の陀羅尼不  
 動、降三世、軍荼利、大威德、金剛夜叉  
 日。若し不動を以て本尊となす時は般  
 若菩薩を以て部主となすべし。  
 願大日、本尊界會、般若明王、五大忿  
 怒、諸大明王、兩部界會、諸尊聖衆。  
 ○讚 四智、並に不動の讚之を用ふ。 ○禮佛、  
 並に五大會梵號、御加持等には、慈救呪之を用ふ。大理趣房鈔に曰く、大師上表して  
 仁王經の法を修し給ふ時、(三)曼荼羅有り。文 ○修習般若真言口傳に曰く、正念誦に之  
 を用ふ、此れ秘説なり。  
 曩謨婆哦縛帝波羅壤波羅蜜多曳唵訖里地室利輸嚕多尾惹曳、娑縛賀  
 我が心月にありハニヤ、梵篋と成る、即ち本尊と成る、左の手に梵篋を持し、右は施無  
 畏の勢に作る、口中より般若波羅蜜多甚深の句義を出生す、即ち(四)惠刀の印を結べ、  
 唵縛曰羅羅乞叉憾、同心上にあり、賢瓶と成る、賢瓶變じて七俱胝尊と成る、十八  
 臂を具足して、種種の三昧耶を執持す、即ち前の部母の印にて同明を誦して四處を加  
 持す。以上大師の御筆香隆寺に之あり、件の本書は覺鑿聖人之を持す、高野を拂はる  
 、時之を失墜す、或僧之を取得す。

(五) 祈雨法日記  
 凡そ經法に就きて  
 大法に行ずれば餘  
 處にて請雨經とい  
 ふ時は祈雨又は行  
 るといふ。

○(五)祈雨法日記 長久四年天下亢旱す、茲に由つて、公家、小野僧正に請ふて享年  
九十  
 神泉苑に於て祈雨の法を修せらる、五月八日より之を始め、同じく十二日參向して親  
 たり其作法を見て之を記す、池の北の邊り子午の借屋五間東西に庇あり、四面並に上  
 方に青色の幕を引き張り、屋の上に青色の幡十三流を立つ、中方に一字の眞言並に輪形を畫  
 して皆梵字 幡の長さ七八尺許りにして青き生絹なり、屋の上に幡を立つ(二)圖すること左の  
 如し。  
 南端の一間並に庇は阿闍梨の宿所、四間並に庇は壇所、母屋の南は大壇、増益の法な  
 り仍つて東  
 に向。次の間は護摩壇、次は聖天壇、次は十二天壇なり、庇の四間は通じて伴僧の座、  
 東の庇は通じて伴僧の休息所なり、曼荼羅の南に並べて大師の御影を懸け奉つて香花  
 等の供物を獻す、大壇の四角は例の金剛概に非らず、(三)箭を立て、五色の糸を引く。  
 ヌリノ、ソヤの三つ羽なり 護摩壇には糸を引かず。  
 此の法には須く糸を引かず、而も大壇許り(三)會釋に引かる、所なり、之に依つて金  
 剛概を立てずして劣箭を以て概に替ふ、箭を用ふること所見無きにあらず、實樓閣記に  
 見たり  
 是れ小龍衆をして自在に壇上に勸請して供養せんが爲めなり、故に惣じて地結天結  
 等の結界を用ひざるなり、阿闍梨及び伴僧自身に(四)護身結界すべきなり。  
 大壇の中に千宮一合、並に裏物等を置く、是れ(五)彼の僧正年來の御持佛、並に大師御

(三) 箭を立て云云  
 大小龍を壇上に勸  
 請する故に結界あ  
 りれば諸龍壇上に臨  
 み難き故に箭を立て  
 つるなり。  
 (三) 會釋 本來は  
 大壇には糸を引か  
 ざる等なれども餘  
 り莊嚴見苦しき故  
 に小野僧正は會釋  
 を引きて玉ふなり。  
 (四) 護身結界 護  
 身法結界す。仁  
 壽なり。

(二) 圖 此の下た  
 すに圖あり之を略

國譯厚造紙  
 五七一

(一) 三寸許 此れ大師の御筆なり。  
(二) 憑を云云 大師の冥加を思召す故なり。  
(三) 殊の外香氣あるものにして肉桂の木なり。

(四) 立石等 大師の所に善女龍王を現し玉ふ故に神供の處にて修することなり。  
(五) 公事自然云云 此は禁庭の事御用繁き故に自ら延引するが故なり。

(六) 茅龍云云 此の茅龍供といふこと、此は大阿一人のすることなり。  
(七) 賀の爲云云 雨降る故に賀の爲に公家衆參向し賀を爲す。

手跡等なり。(一)三寸許の金色の大日如來、藥師の像、並に金泥の兩界曼茶羅等、惣じて靈驗奇異の理なり。此れ只(二)憑を懸け奉んが爲に置く所なり。云云 大壇並に護摩壇の五瓶は各々常の如し、但し瓶毎に檜一枝栢一枝、(三)桂一枝を挿む。是れ栢に至ては本桂に至つては青草の中に香有る。故に合釋して用ふる所なり。 兩壇壇敷布の上に更に茅を以つて之を敷く、母屋の柱に各々青き幡一流を懸く合して八流なり、各々梵字の「吽」(ウ)を書す、此れ五龍の梵字にして即ち胎藏諸流の眞言なり。 件の屋の西方池邊に近づけて一段餘許りを去て、三間許卯酉の借屋供所有り、供所の北に五六間許り子午の借屋有り、是れ伴僧等の休息所なり、神供所は壇所の屋の巽の方に當つて幾を去らずして(四)立石等の中に頗る高き所なり、五龍御祭り所は、東門の内門跡の前に當つて借屋等有り、件の祭は十一日より始め了んぬ、或説に曰く、是れ須く御修法の初日より同じく始るなり、而して(五)公事自然に懈怠す。文 茅を以て五龍の形を作り其中に梵字を籠む、即ち件の梵字阿闍梨之を書す。東並に北の道の邊に簡を建つ其文に曰く、親疎上下結界内に來るべからず、懈怠の障礙に依つて制止する所なり文 (六)茅龍を池に放つて供養する事、大切の時に望み只一度なり。

十三日天陰り大雨を降す、仍つて(七)賀の爲めに僧正に參向して談じて曰く、上代の人尙降雨し難し、然り而して仁海此法を修すること既に四箇度、度毎に感應有り是れ

大師の御恩なり。此度の伴僧は十五人なり。

同十五日結願、勸賞輦車の 宣旨を蒙り並に封戸を賜ふ。

(一) 三寶院云云 定海神泉苑祈雨の時、元海の記録なり。  
(二) 佛師 繪師なり。

(三) 中央 屋上の中央なり。

(一) 三寶院僧都祈雨日記。 永久五年六月十四日より始め此法を修す、當日巳の時許り神泉苑に渡り居す、(二)佛師を召して曼茶羅二鋪を圖繪せしむ、而して一鋪は道場に懸け(繪師)一鋪は大壇に敷く、五龍を繪く。 池の北邊子午の借屋五間三面に之を造つて壇所と爲す、壇所の母屋の上に十二の幢を懸く、皆青色なり、長七尺八尺許り、 幡には梵字を以て十二天の梵號を書き、屋の上には紺の幕を覆ふ、四面に同じく紺の幔を引く、又母屋の内二十八流の幡を懸く、其の懸け様は、四角に各々三流、四面の間各々二流なり、但し大壇並に十二天壇の後の間には之を懸けず、又壇所の西面の庇、南第三の柱の本より一丈許りを去る庭に、一丈三四尺許りの幢を立て、幡を懸く。 以上の幡都べて冊一流なり、(三)中央に立つべきの幡を庭に立つことは、此れ齊衡年中の祈雨太元法日記か。借屋の圖別に在り。大壇並に護摩壇には概及び五色を用ひず、諸壇同じく紺の布を以て壇敷と爲す。闍伽器瓶等皆靑表を用ふ。 灑水器並に闍伽器の水の底に紺靑を入る、なり。兩壇許り之を入る。 大壇の中央に佛舍利を安置し、又經箱を置き其の内に請雨經を入る、なり、燒香を絶

めす瓶水を日別に入れ改む、又兩壇半疊の下に茅の薦を敷く、十二天供、聖天供は常の如し。水天供東庇に於て之を修す、便宜に隨ふか。壇上に幡二流を立つ、壇の中央に青瓷の鉢に水を盛つて之を置き、其の前に青色の糸を置く、闕伽一前常の如し、神供所は壇所の東、池の邊に大石有る本なり、毎夜之を修す、但し幣十五本、及び粥等常の如し、大壇の南に北に向へて大師の御影を懸く。

(二)勸請 秘に之を唱ふ此は本尊の句の二字計り高口唱へて界會等は雲經の中の句、大蓋の句の龍神の唱ふ初の二字許り唱ふるが秘訣なり

○(二)勸請 歸命摩訶毘盧遮那佛等常の如し 本尊界會釋迦會 大雲經中諸三寶 輪蓋龍王難陀等 龍神八部諸護法 兩部界會諸聖衆 外金剛部威徳天 不越本誓三昧耶 降臨壇場受妙供 聖朝安穩増寶壽 天長地久成御願 亢旱疾疫皆消滅 甘雨普潤成五穀

(三)伴僧云云 此れ群立のことなり、大壇を繞る間は毘盧遮那佛と唱へて行道するなり (三)同十七日云云 定海大僧正の祈雨の時なり

○讚 四智並に孔雀經讚、南無率都 沒駄等 結願の時、後鈴讚常の如く誦了つて、其次に二十人の(三)伴僧並び立つて吉慶漢語三段を誦了る、上番の十人大壇を繞つて行道す、下藤の十人並び立つて繞鉢を打つ。又此の御修法の間は、伴僧の外に僧を請して不斷に孔雀經を轉讀せしむ。云云 (三)同十七日申の尅降雨、之に由つて衆人感悦す、同十八日左大臣右大臣光臨せしめ給ふ、同二十日結願、頭辨顯隆朝臣勅使として

(二)別尊云云 十八道立の次第のことなり

來る、勸賞を座主に讓る、阿闍梨澄律師に補任せしむ。云云 件の日酉の時許大雨降つて夜半に及ぶ。○護摩壇主座 ○十二天壇澄 ○聖天壇賢 ○水天供聖 ○神供賢 予其の伴僧の一分となつて、親たり委く作法を見て之を記す。元海 或鈔に曰く、祈雨には陰門を開き、止雨には陽門を開く、謂く東南は陽 西北は陰 云云 ○五香 薰陸、沈水、蘇合、栴檀、安息。 ○名香 安悉。準毘經に曰く、若し大に早せば中夜に於て安息香を燒くべし、印を結び五方の龍に勅して速に降雨せしめよ。云云 増益に之を修す、(二)別尊の行法次第に依つて行すべきか、但し五色を引かず、又地結天結等之を用ひず、是れ龍衆をして自在に壇上に勸請して供せんが爲めなり、阿闍梨自ら能く護身結界を爲せ。

○道場觀 先づ覽字並に印を以て器界を燒淨して次に觀ぜよ。阿字變じて宮殿樓閣と成る、難陀優婆難陀龍王宮内の、大威徳摩尼の藏大雲輪殿の如し、寶樓閣の中に蓮花座有り、上に婆字有り、右邊の蓮花の上に薩字有り、左邊に吽字有り、佛前の荷葉の上に曩字有り、左右の葉座の上も是の如し、即ち次の如く變じて釋迦、觀音、金剛手菩薩、輪蓋、難陀、拔難陀龍王と成る、諸天菩薩諸眷屬前後に圍繞せり。種子尊形皆青色に觀すべし、道場莊嚴之に準知せよ。

○釋迦印明常の如し、曰く、大鉢の印なり。 ○次に正觀音印明 ○次に金剛手印明 ○次に普世天印明 ○次に難陀拔難陀二印明 ○次に諸龍印明常の如し。 ○護摩 加持物には小米を青色に染めて之を用ふ、乳木は楊なり、惣じて一切の供具皆青色を用ふ。 火天段、部主、輪二本尊、諸尊段の末に、觀音金剛手輪蓋難陀等に之を供す。觀音金剛手印明種子三形常の如し。 輪蓋の印は合掌、難陀の印は胎の普世天段五龍の如し。諸龍の印言を用ふ。胎の如し。 口傳永治元年十二月二十七日夜大僧正に受く。 本尊の印は、胎の釋迦の印、即ち大鉢の印なり。 眞言は金の不空成就の、唵阿謨迦悉帝惡なり。之を秘すべし。正念誦に之を用ふ。 ○神供弊十五本難陀、拔難陀、輪蓋の三龍を加ふ各々印言之用ふべし。私に曰く、善女龍王尤も供すべし。仍つて用意すべし。 又神供の時は襄を著して之を行す、但し近來は之に居して行す此れ宜し、龍供にも同じく著すべきか。 大方等大雲經に曰く、若し諸佛を知らんと欲は、如來は常恒に不變なり、當に此經を誦持すべし、如來は變易あること無し、終に畢竟して涅槃に入らず、法僧も常住にして亦滅盡無し。爾時に毘藍風王、受くる所の樂報天の如し、清涼の風を六時に放つて花菓を變じて、常に有つて時として暫くも替ゆること無し。爾の時世尊神通力の故に、四もの黒雲甘水を起して俱に遍く三種の雷を興す、謂く上中下なり、甘露の聲を發すこと天の伎樂の如し、一切衆生の聞かんと樂ふ所なり。爾の時に世尊即ち

説いて曰く、羯帝波利羯帝、僧羯帝、波利僧羯帝、波羅卑羅延低、三波羅卑羅延低、波羅波羅波沙羅波、沙羅、摩文闍、摩文闍照曰く異本には遮呼の二字有り。 遮羅低、遮羅低、波遮羅低、波遮羅低、三波羅遮低、比提、喜利、喜利、薩隸醯、富盧富盧。 若し諸龍有り此の神呪を聞いて甘雨を降さずんば頭破れて七分ならん、十方諸佛の世界六種に震動し、乃至淨居も動し已て龍宮俱に動き大雨を降注す、閻浮提九萬八千の大河七寶盈滿し、一切の泉池上藥味を具へ、雨ること七日なりと雖も傷損する所無し、衆生快樂にして甘露を服するが如し、是の經は時早りする時は雨り過ぐれば則ち止む。 三世諸佛共に呪を説いて曰く、郁究隸、牟究隸、頭低、比頭低、陀羅尼、羯低、陀那賴低、陀那僧答子、娑縛賀。 雨を祈らんと欲せば、齊の六日三寶に供養して龍王の名を稱せよ、善男子四人の性變易せしめずんば此の呪を誦持せよ、天雨降らずんば此の處は有り有ること無し。文 ○祈雨の助け頂輪加持の眞言に曰く 唵勃嚕唵、阿彌頭迦、哦羅羅鼻飽、合吽發吒 ○五種雨障とは、旱災に五有り、一には地領若し鬼神瞋れば土を以て空中に雨らし、風を以て雨を吹いて餘處に向ふ。二には風領風を以つて雨を消す、三には火領熱氣を以つて消す、四には修羅瞋る故に雨無し、一指を半閻浮に廣く、二指合

(一) 測法師 慈恩  
と同時代の圓測なり  
(二) 茅を以て云云  
此れ茅龍供なり。

(三) 佛舍利 此の  
舍利を竹の筒に入  
れて首に結び付く  
るなり。  
(四) 水濁る 時云  
云 供物等を埋む  
こと。

(五) 止雨法 此は  
長雨の時行ずる  
なり。行法は諸法  
なり。同法に請法  
なり。觀音は金剛  
觀音は上全剛手  
並に輪蓋難陀を  
祭る龍王並に天  
那師龍王並に天  
請雨に同行法は  
委しく出さざる  
空色云云 壇  
上に張るなり。

はせ廣ぐれば稍々四天下に廣がる、五には主雨天子放逸なれば雨を忌む。仁王(一)測法師の疏文なり。

○龍供の作法 先づ(三)茅を以て龍の形を作す、長さ八寸許金箔を以て之を押す、

件の龍形を開眼すべし、謂く佛眼大日の印言、並に龍の眞言を以て之を加持す、又

(三)佛舍利を以て龍頭に結び付くるの様有り、或は又佛舍利をば筒に入れて之を奉

る云云 ○供物 香花、散米、五穀の粥、並に幣帛等なり。 以上供物等、(四)水

濁る、時は少し許り地を掘つて之を埋む。 ○龍供眞言 唵縛嚩野、娑縛賀 此

の眞言を用ふることに正口傳なり、私曰く、孔雀經に曰く、無熱惱池縛嚩野、此義

尤も叶ふか。 ○釋迦大鉢の印 二手を以て相ひ重ね合はせ、右を以て左の上に加

ふ、坐禪手の如し、臍に當てしめ稍々屈して、手を重ねて鉢を承くるの形の如し。

○觀音印 二羽外縛して、二頭指花形の如し。唵阿嚩力迦、娑縛賀 ○金剛手印

五 三摩耶薩怛鍍 凡そ此法には佛眼尊を以て相應とす、仍て尤彼の眞言を能く

誦すべし、或は部主に用ふ。

○(五)止雨法 釋迦、金剛手、觀音、火天、摩耶師龍王。

○(六)法花法息 (六)空色の天蓋を張つて幡二十四流を懸く。 又大壇

(八)色の幡なり、懸け條は仁王經法の如し。

(一) 傳あり 釋迦  
を本尊となす、是  
は普通の曼荼羅な  
り。

(二) 多寶 胎藏の  
一切の佛心の印眞  
言なり。

(三) 鍍 此の鍍字  
は即ち五大形な  
り。次の三形の率  
都婆は五大法性の  
率都婆なり、智拳  
印は率都婆にして  
即ち多寶塔なり此  
の中に大日を觀ず  
るなり。

(四) 口傳云云 是  
れ法華の文と余輪  
の軌と意一致なる  
故に智拳印を用ふ  
深秘なり、智拳印  
をば又覺勝の印  
ともいふ。

(五) 秘印 率都婆  
印なり。

(六) 八葉九尊 開  
けば八葉、合すれ  
ば一體なり、故に  
八尊は毘盧遮那の  
一體の功德なり。

の四角に幢を立て、雜色の幡四流を懸く、壇の中央に多寶塔を安置すべきか、護摩

壇、十二天壇聖天壇常の此の法は本尊に多くの(一)傳有り、或は儀軌の意に依つて釋迦

を本尊とす、多寶を具す種子・三形・眞言常の如 ○(二)多寶の印或二手内縛、左の中指を

立つ。文 或は定印を用ふ。 眞言は歸命阿。或は金剛界大日を本尊と爲す、種子は

(三)鍍、三形は率都婆、印は智拳印を用ふ。 (四)口傳に曰く、經に曰く十方佛土中唯有

一乘法。金輪の軌に曰く、十方佛土中唯有智拳印。其意相叶ふ云云 ○眞言歸命阿

阿示暗悟也入、ア、具足 或は普賢一字心の眞言歸命鍍を用ふ。 又秘説に曰く、胎藏

大日を以つて本尊となす、種子は第五の嚩、三形は率都婆なり。 ○(五)秘印虚空合掌、

して、二大指の上に置き、但し二大指の間を少

し去けよ、塔戸を開く意なり、率都婆の印なり。 ○眞言に曰く 曩莫薩縛、怛他引 葉帝、引

毘庾二尾濕縛二目契毘藥二薩羅縛二他引阿阿暗惡二嚩正念誦に之 印は率都婆、言

は胎藏定印の眞言に、第五の嚩字を加へて之を誦す、是れ極秘事なり、此法は胎藏

(六)八葉九尊の故なり。 私に曰く、嚩字變じて塔と成る、塔變じて大日如來と成る、衆

生を利益せんが爲めに、轉じて釋迦の身を鷲峰に現して法花經を説き給ふ、是れ三身

即一の理なり。 釋迦を本尊とする時は 此の如く想ふべきか。 凡そ大日を以て本尊とするを秘説とするに、甚深

(二)圓寂 假の圓寂にして實に常寂如來なり此を報に大師法華の報といふ此れ常の報といは異なるなり(三)大師云云 是は法華開題の意なり(四)觀自在云云 彌陀觀音は一體なり今日の日天は如意輪に現じ玉ふ如來に現じ玉ふなり之を世人は知らざるなり(五)輪西方に入れば即ち彌陀と名くるなり故に以上の三つ同體なり(六)多寶云云 此の五智如來の中多寶なり多寶は過去の佛にして法華證明の爲に現在の佛の全身舍利を納め玉ふ故に之を無量壽如來といふ即寶生如來にして現在の五佛に入れて住するなり

(五)我身云云 我身即ち多寶と觀ず此れ即ち理智不二の塔と觀することなり(六)同一云云 此は即身成佛の一大事の因縁の故なり(一)一定 南都東南院の一定律師なり(二)常に似ず如法尊勝の法は常の尊勝に似ずといふこと(三)結び上 三丈の幡なる故に中央の幡なる邪魔になれば結び擧ぐるなり(四)三摩耶云云 尊勝曼荼羅なり(五)鳥羽云云 鳥羽の寺中にて修し玉ふことなり(六)之を奇とす 此の尊勝法は増益の法なればとて護摩壇に延命を掛るは誤りなり故に奇人とすと

の義有り、經に曰く、常在靈鷲山と。文 是れ即ち大日如來に當る、釋迦既に(二)圓寂に歸す、然らば大日と爲つて常に靈鷲山に住して衆生を利益すべきの故なり、(三)大師の釋意は、兩界曼荼羅、法花經、阿彌陀如來、(四)觀自在菩薩は同體異名。文 或鈔に曰く、法花肝心の眞言を誦すべし、又此眞言を書して壇中に埋むべし。文 無量壽命決定如來とは、或傳に(五)多寶佛なり。文 此法には無量壽命決定如來の眞言尤も誦すべし、是れ壽量品の意に叶ふ、無量壽命決定如來は大日なり、或は無量壽如來か、是れ兩尊共に義に叶ふなり。○御加持、石山内供の傳に曰く、無量壽命決定如來の眞言之を用ふ。文 或傳には不動の眞言を用ふ。○部主不動 ○諸尊段、八大菩薩一切菩薩の眞言に在り、八約 〇四大聲聞 四約之を供す、眞言は胎藏聲聞の眞言之を用ふ。 或次第三に曰く、中央の佛菩薩は即ち三部三身、塔は胎藏の大日佛部法身なり、多寶は金剛界、蓮花部は報身、釋迦は蘇悉地金剛部應身なり、三身即一の理此の曼荼羅に現するが故に、法身塔中に報應二佛坐し給ふ、(五)我身本より成就す、五大塔婆の中に三身悉く成就す、又同一の塔中に坐して三身を顯示することを爲すは大事を成せんが爲めの故なり。文 秘傳 傳法阿闍梨所覺曰く、中臺は智拳印の尊、四方佛は胎藏の如し、兩部惣合行なり。云云 以上三行は(一)一定律師の御傳なり。

〇尊勝法 白河院御祈に、僧正範俊之を修す、其の作法(二)常に似ず、空色の天蓋を張り、蓋の四方に各々淺黄色の幡二流を懸く合して 又天蓋の中央に三丈の幡淺黄を懸けて之を(三)結び上ぐるなり、大壇に(四)三摩耶曼荼羅を敷き、其の中央に三尺の塔を立つ、件の塔の九輪百八枚皆銅箔なり、輪毎に尊勝陀羅尼を書す。此れ尊勝別法に見ゆるか 其の塔中には彼の僧正所持の寶珠之を置く、本尊の像は之を懸けず、香藥等の支度は別に在り。

天仁二年月日(五)鳥羽に於て之を修す僧正義、久安三年十月日白河の泉殿に於て、寛信僧都此の法を修す、作法前に同じ、但し護摩壇に普賢延命の像を懸く、人(六)之を奇とす、同四年八月十八日、前の大僧正三寶院に於て此の法を修す、御塔幡等一院より之を送遣す、作法上の如し、但し大壇に不空儀軌の曼荼羅を懸く、大日在中尊と爲して塔中には所持の佛舍利、並に寶珠之を安置す、瓶には栢の枝を挿む、此の法は塔を以て本とす、然らば率都婆の印尤も宜し之を秘すべし、大日を本尊と爲す。○曼荼羅の圖は不空軌の説○善無畏軌の説(異本に出づ)



或鈔に曰く、不空の軌には八大菩薩を用ひ、無畏の軌には八大佛頂を用ふ、是れ相違なり、但し之を案するに、八大佛頂は大日如來の五智三部の表示、八大菩薩は八大佛頂の所變なり、八大明王は八大菩薩の忿怒身なり、故に彼此相違無きか、不空軌の意

(一) 根本印  
常の印とは大鈎召の印即ち胎藏の除障佛頂の印なり

(二) 小呪  
佛頂の眞言を説けり

(三) 焼供  
食物の事をいふ、今に飯に粥に焼き用ふ、五穀も粥に焼き用ふ、五穀も常用ふ、通りの五穀も常用ふ、大勝金剛當流は十二臂の禪證は十二臂の愛染と習ふ、彼の流三井すに十二臂の愛染と

は大日を以つて本尊と爲す、八大菩薩圍繞すと之を觀ず。文 觀想せよ、五大所成法

界宮の中に圓明の月輪有り、其の中央の大蓮花臺の上に鏡字有り、字變じて法界率都婆と成る、率都婆變じて大日如來と成る、前の圓明の中に訶林字有り、字變じて鈎と成る蓮上の鈎色、鈎變じて尊勝佛頂と成る、八大菩薩圍繞す。文 ○(一) 根本印、内縛して右の風を鈎す。常の印なり。 或は智拳印大日眞言。又は率都婆印(異)に曰く、秘なり此れ大日を本尊と爲す時なり。 又印

不空の軌 二手合掌金掌して二頭指を屈して甲を相ひ背け、二大指を以つて二頭指を押して彈指の如くす。此印は業障除の印か。 ○(二) 小呪 唵阿密哩多諦惹縛底、娑縛賀或は正念誦に用ふ。 小野の説は御加持には、胎藏除障佛頂の眞言之を用ふ。 曩莫三曼多沒馱南、訶林尼枳羅

多、半祖烏瑟尼灑、娑縛賀私に曰く、正念誦に此の呪を用ひて宜しかるべきか。 ○尊勝護摩供香樂次第大作法古様 蘇油、三次に(一) 燒供、三次に五穀粥、三次に五穀、三次に沈香、三次に白檀、次に乳木、次に又沈香、又白檀、次に安息、次に丁子、次に薰陸、次に甘松、次に雀香、次に荅陵

香、次に乳頭香、次に又安息、次に龍腦、次に又丁子、次に荳蔻、次に白芥子。○(三) 大勝金剛像、十二臂 智證大師此の尊像を圖畫して愛染王の像なりと書き附けて經藏に安置す、仍つて(五) 彼の流には之を以つて秘事と爲す。



(一) 如法云云如意法にして此れ如意寶を本尊となす法の本尊となすの字を書くは秘する故なり實は寶の字なり。

(二) 小壇 此の時は護摩壇を略す。

(三) 彼の僧正 範俊。

(四) 高野後僧正 眞然僧正。  
(五) 金剛界の圖 之を略す。

(六) 小野僧都 大僧正成尊なり。

〇〇愛染王法(二)如法を行

白河院の御時六條殿に於て鳥羽僧正後如法愛染王の法を修す、天蓋に八色の幡を懸け、大壇に理趣會の曼荼羅を敷く、但し此の敷曼荼羅は月輪許りの圖繪なり。云云  
或は三摩耶形を圖すべきか。

○大壇、護摩壇は、敬愛に之を修す。降三世護摩は、降伏に之を修す。或は(三)小壇を立て降三世を懸けて之を供するか。隨十二天壇並に聖天壇は之を立てず、但し便宜に隨つて之を用ふべきか。行法の次第は金剛王の儀軌に付て之を修し理趣會十七尊の印言之を用ふ、次第の此れ(三)彼の僧正の傳なり、又成身會に依つて之を修し、初鈴以後羯磨會三十七尊の印言之を用ふ、此れ常の様なり、是れ經意に叶ふ。護摩に紅蓮花の葉百八を用ふ、若し之なき時は造り成して用ふ。云云  
理趣會を以つて愛染の曼荼羅と爲すこと、(四)高野後僧正の御傳なり。云云 (五)金剛界の圖金剛王軌の説と、尊位頗る相違せり之を尋ねべし。

○道場觀(六)小野僧都は愛染の種子に此を用ふ。壇の上に呬字有り、字變じて五股金剛杵と成る、杵變じて愛染王と成る、身色日の暉りの如し、熾盛の日輪の中に住す、三百六臂にして赤色の蓮花に坐し、蓮の下に寶瓶有り、兩畔より諸寶を吐く、聖衆前後に圍繞せり。

(二) 平等王 眞如平等にして金剛薩埵の事なり。

鳥羽僧正後傳に曰く、種子・斛、三形・金剛箭なり。

○正念誦には小呪を用ひ、小呪は芥子に之を用ふ、又(二)平等王の眞言は即ち小呪なり、金剛薩埵の異名なり、眞言は平等の義、謂く一切衆生善惡平等の義なり。又金剛吉祥の明、破宿曜障眞言、成就一切明眞言は散念誦に尤も誦すべし。○部主段降三世

○諸尊段理趣會の十七尊之を行す、印言は金剛王儀軌の如し。又十七尊惣呪の印は、大樂不空身の印か。唵摩訶蘇

佉縛曰羅二薩佉縛弱呬鍍解蘇羅多薩佉合三又三十七尊を諸尊段に行するは是れ常の事なりと雖も、此の法に於て尤も相應するか。口に曰く、本尊兩種の種子三形共に勝

説なり、但し事に依り時に隨つて之を用ふ。云云 呬ムダキ摘ムダキ枳ムダキ呬ムダキ弱ムダキ、但薩ムダキ專ムダキ、替ムダキ擊ムダキ強ムダキ、暴ムダキ惡ムダキ 暴ムダキ 迷ムダキ但ムダキ曩ムダキ曩ムダキ、俱ムダキ底ムダキ奢ムダキ但ムダキ嚧ムダキ家ムダキ、阿ムダキ尾ムダキ奢ムダキ、降ムダキ伏ムダキの義ムダキ、嚧ムダキ迦ムダキ、破ムダキ 呬ムダキ呬ムダキ吒ムダキ推ムダキ 破ムダキ 此の呪は調伏の時之を用ふ。

○根本印二手金剛拳にして内に相ひ又へ縛に爲す、直く忍願用ふ。口に曰く、二中指を交ふるは是れ定の弓に惠の箭を交ふる義なり、又此印を染の印と云ふ、又弓箭の印と云ふ

か。唵摩訶羅織縛曰路瑟捉灑縛曰羅薩佉縛弱呬鍍〇羯磨印外五股、或は二手金剛忍願立て相ひ合せよ、二風鈎形の如くす、檀 明に曰く、呬摘枳呬弱 或傳に曰く、又は小

呪印は内 呬印は内 悉正俱に之を用ひ玉ふ。地正俱に之を用ひ玉ふ。 〇五種相應の印眞言には、(二)或に呬悉地を用

(三) 或は呬悉地云云此は五種ながら呬悉地にて濟すことある故に或はといふ。

(一) 故權僧正 勝  
(二) 彼れ 梵書す  
る義にして四種五  
種に由りて異なる  
(三) 蓮花云云 右  
手白蓮を以て彼の  
手を打つなり

ふ。一、内縛して二火を豎て二風を申べ中指の背に著けず、檀惠合して針の如くす。  
息災と 二、前の印二風を以つて二火の背に著く。増益と爲す、經に曰く四指頭し並べ齊くせよ。 三、前の印二風を改めて蓮葉に作る。敬愛と爲す。 四、前の印蓮葉を改めて三角に作る。調伏と爲す。 五、二風を以つて之を鈎す。鈎召と爲す。 ○字輪觀 「因業不可得 摘憍慢不可得 積作業不可得 呼了義不可得」  
遷變不可得 ○愛菩薩の讚 縛曰羅二邏引 誡愛摩訶燥引 企也、樂、二合 縛曰羅二縛引 擊也縛 商迦羅、能伏、二合 摩引 羅迦引 摩敵 摩訶縛曰羅三合 縛曰羅二左引 波也二曩謨娑都諦 ○金剛愛菩薩梵號 南謨縛曰羅羅誡胃地薩怛縛摩訶薩怛縛 ○密號 離樂 離愛 義訣に曰く、如來は已に愛染を離ると雖も、善巧に由るが故に諸佛愛念すること世の恩愛の如く相ひ捨離せず。文 或鈔に曰く、鈔理愛染王は愛菩薩と同じきなり、利樂と名づけ又は離欲と名づく、此尊は未だ菩提に至らざる者を引いて菩提に至らしむ、大悲の箭を以つて二乗の心を射て衆生をして佛法を愛樂せしむ。文 (二) 故權僧正曰く、(三) 彼とは所求に隨ふ、梵字に書して之を持せしむべし。或鈔に曰く、彼とは所求の事なり、(三) 蓮花は調伏の事なり、又曰く、彼の手は空手に作り所求に隨ふ、其時に臨み三摩耶を以つて彼手に置き、所願を成就す、息災には輪を用ひ増益には珠、調伏には一股、

(一) 神心 生肝のこと

(二) 拳 金剛拳なり  
(三) 教口 教王房義覺のこと

(四) 二方五股 三股と二股との二方なり、即ち人形并の事を二方五股といふ。

敬愛には蓮花、鈎召には鈎、延命には甲冑なり、世流布の像は人頭を持たしむ、之に就いて種種の秘説有り。或鈔に曰く、人頂十字の上に入王六粒有り、宛も牛王の如し。 或鈔に曰く、彼手には如意寶珠を持たしむ、壽命を増長して所求を成就せしむ、又敬愛の爲めには神心を持たしむ、我が(一)神心を加す。又廣慶開梨の鈔に曰く、肉團、人頭、日輪は同意なり、能く意を得べし、神魂を持すること日輪に似たり、實の日輪には非ず。文 神日律師の傳に曰く、彼とは人王なり。文 仁和寺の故大御室、小野僧正に問ひければ、仁黃なりと答へ申し給ふ。文 大師御持佛の彼手は、(二)拳にして物を持する如し、蓋し慥かに見せず、然らば此意に叶ふ。(三)教口に曰く、一切衆生の人王を持し、蓮を以つて之を打てば惡心衆滅す、是れ敬愛の中の調伏の義なり、委細は口傳に在るのみ、打つと云ひ射ると云ふ意同じ、或鈔に曰く、靈巖傳に曰く、染愛王は定なり男なり 呼は二方五股杵を表示す、愛染王は恵なり女なり 呼は(四)二方五股杵、定惠和合の形、一重呼は二方五股杵なり、六臂の器仗は皆定惠の相を表す、印契、染愛は右の手五股契に作す、愛染又之に同じ、定惠和合の契は、二手を以つて内五股に之を結ぶ。文 或鈔に曰く、香隆寺寛僧正の口に曰く、金剛愛染菩薩「重呼五股、敬愛法に行する時は、蓮花の上に五股を觀すべし、降伏に行する

時は怒杵を觀すべし。文

○羯磨印經の如 ○小呪 「吽摘枳吽弱」 ○印、外五股、外の障を除くことを表す。

○印、内五股、内の障を除くことを表す。 ○持物 鈴、杵、弓

○(二)求願 彼の手なり。

○(二)求願、赤蓮、衆星の光を射るが如しとは、謂く衆星光を放ち形を顯

はすと雖も、日月出現の時は皆隱歿して形なし。此の王菩薩の印を結び明を誦すれ

ば、一切の罪障怨敵魔縁、彼の衆星の日月の光り相ひ向へば、皆悉く散失せざることを無

きが如く、速かに悉地を得るが故に譬説として衆星の光を射るが如しと云ふなり、功

力は具には經の如し。 曩摩を頭冠に置くは阿毘舍盧迦惡人の姓名、及び惡星等に

て、此れ摧破の義なり、 (三)平等羅惹とは、愛菩薩變じて閻王と成る、右の手には檀

茶の印を持し、左の手には人王を持す、身色赤肉色にして (四)水牛に坐す、此王は殊に

死難を除く。文 ○歸命、閻羅野、摘枳吽弱、娑縛賀 ○檀茶印 (五)外五股印

延喜二十二年六月二日、(五)般若寺に於て之を聞く、 以上香隆寺僧正の記 (六)大僧都は彼の

手に、後冷泉院の御名を梵字に書して持せしむ、此れは調伏の故なり、或傳に曰く、

師子冠は衆惡を調伏す、又持者の無畏を表すか。 愛染と佛眼と降三世は同佛なり、

(二)平等云云 平等王といふ (三)水牛 水陸に於て自在を得るものなれば生死自在を得ることを表す (四)外五股 此の外五股を五眼の印といふ、此の意を以て又は檀茶の印といふ (五)般若寺 觀賢僧正 (六)大僧都 成尊

(二)染淨云云 平等に住せよとの事 (三)智相云云 此れ愛染の弓箭なり (四)殺者 弓箭を以て染淨に片寄るを殺して平等心にむるなり

(四)殺者 此は設ひ坐禪等の觀念等成するも片寄らざる様に弓箭を以て射ることなり

延命も亦同じ、皆是れ金剛薩埵の所變か、瑜祇經に曰く、此れを金剛王と名づく、頂

中に最勝なるを名とす、金剛薩埵の定なり、一切諸佛の母なり。文 金剛頂義決に曰

く、如來の悲智は甚深微密にして無盡界に亘り、(一)染淨に違順す、是故に如來其の

(二)智相を現じて名付けて摩羅と云ふ、染淨を樂ぶ者には自在を得ざらしむ、摩羅とは

具足の梵音には摩爛拏と云ふ、此には(三)殺者と翻す、其智印の如きは所謂弓箭なり、

謂く或は菩薩有つて、等正覺を成じて清淨の處に住して、雜染世界に隨つて衆生を成

就することを樂はず、此の智印の力を以つて能く撃ち射て之を攝して久住せしめず、

故に染智を以つて彼の淨智を攝す故に(四)殺者と名づく、或は菩薩有つて廣大の心を發

して大佛事を作し、佛菩薩有つて自宮に住して其力を助けず、而も此の菩薩即ち此の

智印を以つて向つて而も之を彈擊す、彼の佛菩薩便ち當に隨喜して共に加持すべし、

佛智の神力に違ふこと有る無き者は、此れ即ち淨を殺して染に順するなり、又諸の衆

生恒に一切の煩惱堅牢染縛の爲めに、而も佛の清淨の法を信受せず、爾の時に菩薩此

の智印を以つて而も之を撃射す、彼の堅縛する所即便ち破壊して清淨の法を以つて用

ひて之を染す、一切衆生是の因縁を以つて佛の智見に開示悟入す、此れ即ち染を殺し

て淨に順するなり、是の故に如來摩羅の智を以つて染淨の中に於て皆能く染淨するなり。又云く頌に云く、如來奉事の心秘密神變の相教を請する旨を現することは菩提の弓箭を授くるなり、如來奉事心とは、經に曰く、爾の時に世尊復た拔折羅邏伽等に入れ及ぼす、釋して曰く、謂く普賢菩薩金剛三昧より佛境界に入つて衆生を加持して、相續して便ち不空王の相に入つて而も佛事を作す、轉注して即ち此の奉事門に入る故に復入等と云ふ、上の如く準知せよ、奉及染愛と言ふは、謂く如來及び衆生に奉事するなり、如來に奉事するを以ての故に如來愛樂す、衆生に奉事するを以ての故に苦を離る、又謂く如來に染愛するに由るが故に如來護念す、衆生に染愛するに由るが故に衆生解脫す、是を以て名づけて染愛の智と爲す、故に秘明を説いて拔折羅邏伽と云ふなり、秘密の義とは、謂く金剛愛樂奉事なり、又曰く、此の中の契相の別とは、所謂る(二)花器仗弓箭等是れ如來彈擊の智なり、其契の兩頭に皆蓮花有り故に花器仗と云ふ、花器仗は即ち是れ弓箭なり、此の智は猶、王の彈宮を立つて非法を彈擊するが如し、謂く二乗の寂を樂ひ自ら究竟と謂ふ此れ非法なり、菩薩の位地は悲智等しからざる此れ非法なり、一切衆生常に諸欲を樂ふて諸の邪道を習ふ此れ非法なり。乃至假使

(二)花仗器弓の上下共に蓮花形に當る處は箭も人に當る處は蓮花形、此れは染淨に片寄らざる義なり、此を花器仗と云ふなり。

ひ佛及び一切の聖賢有つて、非智等しからざるは皆是れ非法なり、是の故に大日如來此の智相を現じて諸の菩薩の正行を習ふ者をして、此の智印を持つて諸佛に承事す、衆生を攝受して意に隨つて無礙なり、頌に現請教示相と云ふは、經に至極の殺に由るが故に、最勝悉地の果に至るが故に等と云へり。釋して曰く、謂く諸佛の境界を以て衆生界に入りて、和合して一と爲して妙智の相を成ず、(三)左の月輪に在つて諸の衆生の爲めに諸の因縁を現す、故に云ふて摩羅大菩薩の身と爲す、而して此の大菩薩善巧智の相、如來に奉事して已に愛染を離ると雖も、善巧に由るが故に諸佛愛念すること世の恩愛の如く相ひ捨離せず、故に攝して一體と爲つて自心に住す、調伏の偈を説くこと經の如く解すべし。鈔略經に曰く、衆星の光を射るが如く能く大染の法を成ず。文是れ速疾の義なり、或書に曰く、觀想せよ、日月輪の光の矢、道場内に射散す。又摩尼の射光。文 此の如く文證顯然なり。涅槃經第十六に曰く、復次に善男子菩薩摩訶薩慈悲喜捨を修し已つて(三)極愛一子の地に住することを得、善男子云何ぞ是の地名づけて極愛と云ふ、復一子と名づく、善男子、譬へば父母の子を見るが如く安穩の心あれば大に歡喜す、菩薩摩訶薩是の地の中に住するも亦復是の如し、諸の衆生を見るこ

(三)左の月輪に在つて諸の衆生の爲めに諸の因縁を現す、故に云ふて摩羅大菩薩の身と爲す、而して此の大菩薩善巧智の相、如來に奉事して已に愛染を離ると雖も、善巧に由るが故に諸佛愛念すること世の恩愛の如く相ひ捨離せず、故に攝して一體と爲つて自心に住す、調伏の偈を説くこと經の如く解すべし。

(三)極愛一子の地に住することを得、善男子云何ぞ是の地名づけて極愛と云ふ、復一子と名づく、善男子、譬へば父母の子を見るが如く安穩の心あれば大に歡喜す、菩薩摩訶薩是の地の中に住するも亦復是の如し、諸の衆生を見るこ